

日琉諸語の一員としての 宮古語音韻史

総合研究大学院大学 先端学術院
先端学術専攻 日本語言語科学コース
尹 熙洙

目次

I 宮古祖語と 15 世紀沖繩語	5
1 はじめに	7
1.1 目的	7
1.2 本論文で扱う方言とデータ	9
1.3 言語接触を示唆する例：「二重上昇」	10
1.4 言語接触を示唆する例：順行硬口蓋化	14
1.5 歴史的背景	17
1.6 古い借用語と新しい借用語の区別	18
1.7 本論文の構成	22
2 先行研究による宮古祖語の再建とその年代	23
2.1 Bentley (2008) の再建体系	23
2.2 Pellard (2009) の再建体系	25
2.3 宮古祖語の時代区分	26
3 宮古祖語の子音体系の再検討	29
3.1 超重音節回避と摩擦母音の由来	29
3.2 摩擦母音の発生と後期宮古祖語 *i	33

3.3	*-to 「年（助数詞）」にみる破擦化，二重上昇，*i, *u > *i . . .	38
3.4	*paro 「畑」と *ɾ の再建	41
3.5	宮古祖語の子音目録	43
4	宮古祖語の母音体系の再検討	45
4.1	母音 *ɛ の再建	45
4.2	母音 *æ の再建	52
4.3	長母音 *ɛ: と短母音 *ɛ の対立	57
4.4	新しい再建体系による語源の検討	61
4.5	母音 *ɔ: と *ɔ の再建	69
4.6	後期宮古祖語から八重山語・与那国語へ	69
4.7	宮古祖語の母音目録	70
II	宮古祖語を超えて	73
5	琉球祖語と古代九州基層仮説	75
5.1	*o の三重反映	77
5.2	強勢の位置について	81
5.3	借用元方言についての考察	85
5.4	古代九州基層仮説と宮古語の語源研究	92
6	日琉祖語について	95
6.1	子音間における母音の脱落	98
6.2	母音脱落に由来する子音連結を持つ語の例	106
6.3	母音脱落とアクセントの起源	123
7	おわりに	129

7.1 第Ⅰ部「宮古祖語と15世紀沖縄語」	129
7.2 第Ⅱ部「宮古祖語を超えて」	131
参考文献	133

第 I 部

宮古祖語と 15 世紀沖繩語

第1章

はじめに

1.1 目的

宮古語は、沖縄県宮古島市および多良間村を中心とする宮古諸島において伝統的に用いられてきた言語であり、琉球諸語に属する。琉球諸語とは、鹿児島県奄美群島および沖縄県沖縄諸島・宮古諸島・八重山諸島において伝統的に話されてきた言語群である。Pellard (2015) による系統分類によれば、琉球諸語は日本語、八丈語とともに日琉語族を構成し、さらに北琉球語群と南琉球語群とに大別される。宮古語は南琉球語群に属する。同群には宮古語のほか、与那国島で話される与那国語、および与那国島を除く八重山諸島で話される八重山語が含まれる。一方、北琉球語群は、奄美群島で用いられる奄美語と沖縄諸島で用いられる沖縄語から成る (図 1.1)。

琉球諸語は、(Pellard 2015) が 5 つの言語に分類するように、全体として著しい多様性を示すが、宮古語内部においても多様性が顕著である。ペラール & 林 (2012: 13) によれば、宮古語には約 30~40 の方言が存在す

るとされる。宮古語が現在の多様な方言群に分岐する以前の段階の言語，すなわち宮古語諸方言の共通祖先を本稿では「宮古祖語」と呼称する。同様に，琉球諸語の共通祖先を「琉球祖語」，琉球諸語と日本語の共通祖先を「日琉祖語」と呼ぶ。

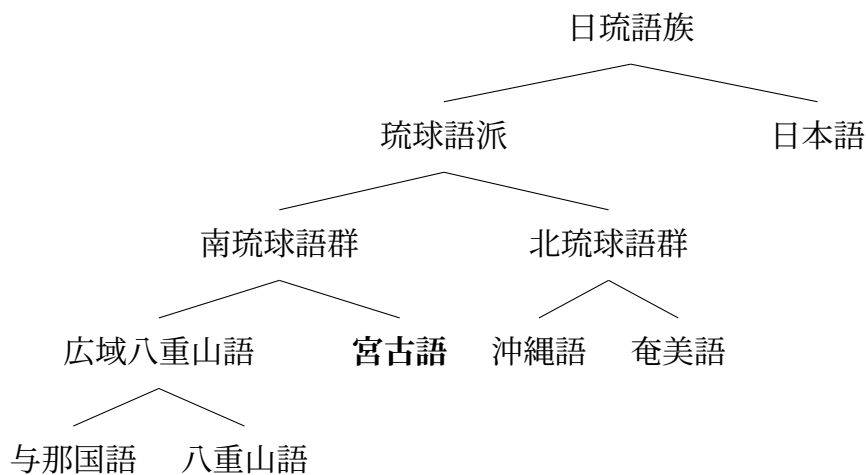


図 1.1: 日琉諸語の系統分類 (Pellard 2015) (八丈方言は省略)

祖語は，文献資料や現代の諸方言に在証される形式を比較することを通じて再建される。宮古祖語の再建に関しては，Bentley (2008), Pellard (2009), ペラール & 林 (2012), セリック (2020) などの先行研究が存在する。特に音韻体系に関しては，Bentley (2008), Pellard (2009), ペラール & 林 (2012) において再建が試みられている。

本論文は，これらの先行研究の成果を継承しつつ，それをさらに発展させることを目指す。具体的には，従来の研究において十分に考慮されてこなかった琉球諸語間の言語接触，とりわけ古い時代の沖縄語からの借用語に焦点を当て，宮古語の音韻史をより包括的かつ整合的に説明し得る再建体系を提示することを目的とする。

1.2 本論文で扱う方言とデータ

Pellard (2009: 294) およびセリック (2020) による系統的分類によれば、宮古語は大きく3つの方言群に分けられる。すなわち、多良間島および水納島で話される多良間・水納方言群、伊良部島および池間島（池間島からの分村である宮古島西原集落および伊良部島佐良浜集落を含む）で話される池間・伊良部方言群、そしてそれ以外の地域に分布する中央宮古語諸方言（Miyako central）である。

本論文では、この従来分類に加えて、特定の音韻対応に基づく分類群「中核諸方言」を提案する。Pellard (2009) およびペラール & 林 (2012) が指摘するように、宮古語において「昔」「無い」「一人」等を表す語は特徴的な音韻対応を示す。ここで、任意の非硬口蓋化子音をC、対応する硬口蓋化子音をC^hと表すと、中央宮古語諸方言（ただし大神方言など一部を除く）ではこれらの語にC^ha:が現れる（例：n^ha:ŋ 「無い」）。これに対して、多良間方言、水納方言ではCe:が（例：ne:ŋ 「無い」）現れる（表1.1）。伊良部方言、仲地方言では一部Ci:が（例：ni:ŋ 「無い」）現れる場合もある。

表 1.1: Pellard (2009: 299) が提示する C^ha: :: Ce: の対応例

	中央 大神方言	中核 平良方言	池間・伊良部 池間方言	長浜方言	多良間 塩川方言
「昔」	ike:m	ŋk ^h a:ŋ	ŋk ^h a:ŋ	ŋk ^h a:ŋ	ŋke:ŋ
「無い」	ne:n	n ^h a:ŋ	n ^h a:ŋ	n ^h a:ŋ	ne:ŋ
「一人」	tafke:	tavk ^h a:	tauk ^h a:	tavk ^h a:	to:ke:
「未明」	sɛ:ka	ɕa:ka	ɕa:ka	ɕa:ka	ɕe:ka

本稿における中核諸方言とは、中央宮古語諸方言のうち、上記の音韻対応において主として広母音C^ha:を持つ反映を示す諸方言を指す。中

核諸方言以外の方言群は「非中核方言」と呼ぶ。この分類はあくまで便宜的なものであり、系統的な分類を主張するものではない。中核・非中核諸方言の分類は、宮古語全体の音韻史を再建する際に、比較の基準点を確立し、方法論的基盤として機能する。

本論文は、琉球諸語のデータとして、十分な規模の語彙データ（辞典・語彙集など）が公開されている方言のデータを用いる。具体的には、中核諸方言のデータとして、皆愛方言(セリック 2018)および砂川方言(セリック 2022a)の語彙集を用いる。非中核方言については、多良間・水納方言群（以下「多良間」と略記）の代表として、多良間島の仲筋方言の辞典(渡久山 & セリック 2020)を参照する。さらに必要に応じて、ニコライ・ネフスキーが1922～1928年に行った宮古語調査記録（以下、「ネフスキー資料」）の英訳版(Jarosz 2015)、池間方言西原下位方言の辞典(仲間 et al. 2024)、および『宮古伊良部方言辞典』資料編「宮古28集落の音韻調査」(富浜 2013: 886–893)を引用する。

宮古語以外の琉球諸語については、奄美語の資料として与論方言(木部 2016)、沖縄語の資料として今帰仁方言(仲宗根 1983)・伊江島方言(生塩 2009)・首里方言(国立国語研究所 1963)、八重山語の資料として石垣方言(宮城 2003)を参照する。また、与那国語の資料としては、与那国方言辞典編集委員会編(2021)を参照する。

1.3 言語接触を示唆する例：「二重上昇」

1.1節で述べたとおり、本論文は従来十分に考慮されてこなかった琉球諸語間の言語接触に焦点を当て、宮古語の再建体系を提示する。本節では「二重上昇」の事例を取り上げ、宮古語と北琉球語が古い時期に接触

していたことを示唆する証拠を確認する。

「二重上昇 (double raising)」とは本稿における造語であり、琉球祖語において語末に中段母音 *e, *o を持つ語として再建されうる語彙の一部が、宮古語（および他の南琉球諸語）において例外的な反映を一貫して示す現象を指す。具体的には、北琉球諸語内部の比較や本土日本語との比較からは琉球祖語に中段母音 *e, *o を再建すべきであるにもかかわらず、宮古語（および南琉球諸語）内部の比較からはむしろ狭母音 *i, *u の再建を要請するかのように見える現象を、本稿では「二重上昇」と呼ぶ。

二重上昇が観察される語の1つとして「東」が挙げられる。「東」は、宮古語では方言により *aga*₁ (中核宮古語諸方言 = 皆愛・砂川方言など), *aga*_l (多良間方言) のような形が見られる。宮古諸方言間に語末の ₁ と _l の音対応が観察される場合、当該語の琉球祖語形の語末には狭母音を伴う **ri* あるいは **ru* が再建される。例えば「鳥」は宮古語で *tun* (中核諸方言), *tul* (多良間方言) などを示し、その琉球祖語形は **tori* と再建される (表 1.2)。この規則に従えば、「東」についても語末に狭母音をもつ **agari* あるいは **agaru* を再建するのが妥当となる。ところが、松森 (2021: 20) が指摘するように、北琉球諸語間の比較からは語末に中段母音をもつ **agare* が再建されるので、南北の比較結果の間に不一致が生じる。松森 (2021) がこの不一致の原因解明を「今後の課題」としていることが示すように、問題の対応はこれまで十分に説明されてこなかった。

同様の対応は「いどこ」にも見られる。宮古語の形は *itsufu* (皆愛方言) などであり、語末音節が *fu* となる。宮古語における *fu* は、琉球祖語の **pu* あるいは **ku* に遡り、**ko* には遡らない (表 1.3)。 (Pellard 2013: 85) の音韻対応に従えば、南琉球諸語の比較からは語末に狭母音をもつ **itoku* が再建される。この場合、北琉球諸語からの再建と南琉球諸

表 1.2: 琉球祖語 *ri, *re の反映例と「東」

琉球祖語	北琉球		南琉球	
	首里方言	皆愛方言	砂川方言	多良間方言
*tori 「鳥」	tui	tun	tun	tuɭ
*tore 「凧」	turi	turi	turi	turi
*agarV? 「東」	ʔagari	agaɪ	agaɪ	agaɭ

語からの再建に矛盾はなく, *itoku を再建することで北と南両方の形が説明できる. しかしながら, 日本語 *itoko* 「いところ」との比較から予測される琉球祖語形は, 語末に中段母音をもつ *itoko であるという点で疑問が残る. 再建形 *itoku は変則的であることは既にセリック (2022b: 117) によって指摘されている.

表 1.3: 琉球祖語 *ku, *ko の反映例と「いところ」

琉球祖語	北琉球		南琉球	
	首里方言	皆愛方言	砂川方言	多良間方言
*kusa 「草」	kusa	fusa	fusa	fuça
*kosi 「背中」	kuçi	kusɪ	kusɪ	kusɪ
*itoku? 「東」	ʔitçuku	itsufu	itsɪfu	itçafu

「肛門」もまた類例である. 宮古語の「肛門」は *tsibirum*, *tsibinum* などであり, 語末に子音 *m* を示す. 宮古諸方言で語末に *m* を示す語においては, 対応する琉球祖語形の語末に狭母音 *mi あるいは *mu が再建される. 例えば「虱」は宮古語で *ssam* などであり, その琉球祖語形は *sirami と再建される (表 1.4). したがって, 「肛門」についても語末に *mi, *mu をもつ形が想定されうる.

しかしながら, 「肛門」を表す語は, 沖縄語首里方言 *tsibi* 「尻」, *tsibinumi* 「直腸」, *tsibinumi* 「肛門」の比較からわかるように, 琉球祖

表 1.4: 琉球祖語 *mi, *me の反映例と「肛門」

琉球祖語	北琉球	南琉球		
	首里方言	皆愛方言	砂川方言	多良間方言
*sirami 「虱」	siraŋ	ssam	ssam	ssam
*ame 「雨」	ʼami	ami	ami	ami
*...mV? 「肛門」	tsibinumi:	tɕibirum	tɕibinum	tɕibirum

語 *tsu^mbe=no me 「尻=GEN 穴」の構造を持ち¹、語末に中段母音を含む形が想定できる。実際、北琉球諸語ではこれに由来する規則的反映が見られる。例えば、沖縄語首里方言では「肛門」は tsibinumi: であり、語末 mi: は琉球祖語 *me の規則的な反映である。

以上の観察は、当該語彙を借用語とみなすことで整合的に説明できる。すなわち、1) 借用元の北琉球語（本稿では沖縄語を想定する）で中段母音の上昇（*e, *o > *i, *u）が生じ、2) その形が宮古祖語に借用され、3) さらに宮古祖語側で狭母音にかかる音変化（狭母音の脱落 *i, *u > のなど）などが生じたとする仮説である。例えば「肛門」について、琉球祖語語末に *me を再建するなら、宮古語では *e > i によって mi が予測されるが、実際の宮古語諸方言の語末は m である。これは、沖縄語側で *me > *mi の母音上昇が生じた後に、その形が宮古祖語に借用され、宮古祖語で語末狭母音の脱落 *mi > m が生じたとすれば説明できる。「いところ」「肛門」などを借用語とみなす見解は、筆者の知る限り、これまで示されてこなかった。

本論文がこの現象を「二重上昇」と呼ぶのは、琉球祖語の中段母音

¹沖縄語首里方言の辞典(国立国語研究所 1963: 371)や宮古語多良間方言の辞典(渡久山&セリック 2020: 466)の解説にあるように、これらの言語で *me > mi: 「目」は「穴」の意味でも使われる。Lawrence (2003: 40-41)は、宮古語における「肛門」の語源として南琉球祖語 *cibi-nu-mi を再建し、同じく「尻-GEN-穴」の分析を提示している。

*e, *o が、まず借用元言語において語末母音上昇を経て *i, *u となり²、その後、借用先である宮古祖語側でさらに狭母音に対する変化を受ける、という二段階の過程として把握できるためである。この第二段階における狭母音に対する変化は音環境によって異なり、「東」「肛門」では狭母音の脱落 (*i, *u > ∅ / {r, m}_#), 「いところ」では狭母音に先行する子音の摩擦化 (*k > f / _u) となる。加えて、この第二段階においては、宮古祖語においても沖縄語より遅れて中段母音 *e, *o の上昇が生じることになる。音変化の相対的年代としては、沖縄語における中段母音の上昇、沖縄語から宮古語祖語への借用、宮古祖語における中段母音の上昇の順となる。この中段母音の上昇の相対的年代のずれを考慮して、本稿ではこの現象を便宜的に「二重上昇」と呼称している。

このように、宮古語には北琉球語との言語接触を前提すると自然に説明できる事例が存在する。逆に言えば、これらは宮古語と北琉球語の古い時期の言語接触を示唆する証拠であるといえる。借用元として沖縄語を想定する歴史的根拠については、8節で論じる。

1.4 言語接触を示唆する例：順行硬口蓋化

本節では、宮古語と北琉球諸語が古い時期に接触していたことを示唆するもう一つの証拠として、順行硬口蓋化 (progressive palatalization) を論じる。

²二重上昇が語末に限られていることから、借用元言語は語末の中段母音だけが上昇していた時期があったことが想定される。本論文では、この「借用元言語」を15世紀の沖縄語と考えているが、実際にも当該時期の文献には語末の母音が先に上昇したことを示唆するような表記が現れ、例えば朝鮮資料の『語音翻訳』に記されている語の中で、語末と非語末に同じ中段母音を二つ持っている名詞(2語)は、全て非語末が中段母音対応のハングル表記、語末が狭母音対応のハングル表記になっている(sto.muy.ti「朝」, mwo.si.lwu「筵」)(尹 2024)。

ここでいう順行硬口蓋化とは、琉球祖語の母音 *i に後続する子音が硬口蓋化する音変化（例：*pi^hdari 「左」 > 首里 φidzai）を指す。この現象は北琉球諸語に広範に観察されることが知られており、具体的に、北琉球諸語における順行硬口蓋化は、問題の子音に後続する母音が非狭母音である場合にのみ生じる（五十嵐 2023: 14）。したがってこの音変化は (1) のように記述できる。

(1) 順行硬口蓋化：*C > *C^h / i_ {e, a, o}

順行硬口蓋化 (1) は北琉球諸語で規則的に生じることから、これは北琉球祖語を定義づける改新とみなしうる。これに対し、南琉球諸語では規則的な順行硬口蓋化は観察されない。

しかし、南琉球諸語に順行硬口蓋化が全く観察されないわけではなく、宮古語・八重山語でも一部の限られた語彙にその痕跡が見られる。表 1.5 は、順行硬口蓋化が生じうる音環境を有する 7 語の北南琉球諸語における反映を示す。北琉球諸語では全ての語で順行硬口蓋化が見られるのに対し、南琉球諸語では「いところ」「明日」に限って痕跡が認められる。

南琉球諸語において「人」（琉球祖語 *pito）の第 2 音節が一貫して tu であることを踏まえると、「いところ」（琉球祖語 *itoko）の第 2 音節も tu が期待される。しかし実際には t_ɕu, tsu, ts_ɰ などの破擦音を伴う音節が一貫して観察される。逆に、「いところ」で第 2 音節の子音が一貫して破擦化していることを踏まえると、「人」においても同様の破擦化が期待されるが、実際には破裂音が一貫して観察される。すなわち、北琉球諸語で順行硬口蓋化が生じる音環境をもつ語に関しては、南北琉球諸語間の対応に不規則性が認められる。

表 1.5: 琉球諸語における順行硬口蓋化

	「光」	「左」	「人」	「いところ」	「土」	「下」	「明日」
奄美語（北琉球）							
与論	pittçai	pidzai	pitçu	ʔitçu:	(duru)	çitça	ʔattça:
沖縄語（北琉球）							
今帰仁	pitçʔai	pidzei	tçʔu:	çitçʔi:kʔu:	mitçʔa:	çitçʔa:	hatçʔa:
首里	çitçai	çidzai	ttçu	ʔitçuku	ntça	çitça	ʔatça
宮古語（南琉球）							
池間	çikai	çidai	çitu	itçufu	nta	sita	atça
皆愛	pɪkaɪ	pɪdaɪ	pɪtu	itsufu	mta	sɪta	atsa
砂川	pɪkaɪ	pɪdaɪ	pɪtu	itsɪfu	mta	sɪta	atsa
八重山語（南琉球）							
石垣	pikari	pidari	pitu	ʔitçuɸu	nta	sita	ʔattsa
琉球祖語	*pikari	*pi ⁿ dari	*pito	(*itoko)	*mita	*sita	*asita

表 1.5 の音対応は、「いところ」「明日」が北琉球語（歴史的事情から沖縄語が想定される）から南琉球に借用されたと仮定すれば整合的に説明できる。すなわち、北琉球祖語で順行硬口蓋化 (1) を経て *tç を含む形となった語を、*tç 音素を欠く南琉球祖語が *ts として受容したという仮説である。これに対し、表 1.5 の「光」「左」「人」「土」「下」は琉球祖語からの継承語であるとみなせる。

「いところ」は、1.3節で述べた二重上昇を経験している語でもあることから、この語が北琉球語からの借用語であるという見解がさらに支持される。同時に、順行硬口蓋化と二重上昇が同じ語に生じている事実は、順行硬口蓋化痕跡語彙と二重上昇語彙が、同一の由来—すなわち宮古祖語あるいは南琉球祖語の段階における北琉球語からの借用—を有することを示唆する。

以上より、南琉球諸語の一部の語彙に観察される順行硬口蓋化の痕

跡は、古い時期に北琉球語からの借用が行われたことを示唆する証拠とみなすことができる。次節では、この借用元を15世紀の沖縄語と想定し得る歴史的根拠について論じる。

1.5 歴史的背景

18世紀に編纂された『球陽』『宮古島記事仕次』などの歴史資料によれば、宮古島の住民が琉球王国の前身である中山王国と初めて接触したのは察度王41年・洪武23年（西暦1390年）である（仲宗根2011）。1500年、宮古は琉球王国と八重山の戦争（オヤケアカハチの乱）において琉球軍の先導役として参戦した。当時の宮古首長であった仲宗根豊見親 *nakadzuni tujum'a* は琉球王国から宮古の頭職に任命され、さらにその次男・三男が八重山の頭職を務めるなど、琉球王国は南琉球全域へと影響力を拡大した。

このように、沖縄本島の首里を中心とする政治勢力（中山王国・琉球王国）と宮古の初接触が14世紀末に遡り、16世紀初頭には両者の政治的結合が進展していたという歴史的経緯に照らすと、15世紀に宮古語が沖縄語から顕著な影響を受けた可能性が高い。二重上昇および順行硬口蓋化の痕跡語彙に代表される宮古語の北琉球的特徴は、15世紀に沖縄語から導入されたとみなすことができる。

2.3節で論じるように、宮古語の「沖縄化」の年代については朝鮮資料により直接検証が可能である。また、当該特徴は宮古語のみならず他の南琉球諸語（八重山語・与那国語）にも観察されるが、本論文は、これらが16世紀前半の歴史的展開を通じて宮古からもたらされたものと

仮定する³。

1.6 古い借用語と新しい借用語の区別

第2章以降で論じるように、15世紀沖繩語から前期宮古祖語へ導入された借用語は、借用が行われた時期の宮古語における音素目録や音素配列を復元する手がかりを与える点で、宮古語の語史研究において重要な意義を有する。しかしながら、琉球諸語間の借用は、必ずしもこの時期に限られない。歴史を通じて、さまざまな変種間で借用が繰り返されてきたと推測される。したがって、本研究の目的に照らせば、15世紀沖繩語から前期宮古祖語へ導入された借用語（以下「古い借用語」）と、それ以降に導入された借用語（以下「新しい借用語」）とを明確に区別することが不可欠である。

新しい借用語の例として、多良間方言 *ɕa:ru* 「猿」が挙げられる。この語は琉球祖語 **saru* 「猿」に対応するが、音対応が規則的ではない。琉球祖語 **ru* は多良間方言では通常 *ɕ* に反映するにもかかわらず、この語では *ru* を保持している。

さらに *ɕa:ru* 「猿」は第1音節に長母音 *a:* を含む。この長母音は、北

³八重山語の「沖繩化」を示す例として、琉球王国時代の官職名「首里大屋子」を挙げることができるだろう。ネフスキー資料によれば、「首里大屋子」は宮古語平良方言では *sunupujaku*、八重山語では *cinabagu* と言われる。これらは究極的に **ɕor'i* 「首里」 + **ɕopojako* 「大屋子」からなる古い沖繩語 **ɕor'opojako* 「首里大屋子」に遡ると考えられる。しかし **oja* > *a* は八重山語では一般的ではない。例えば「燃やす」（琉球祖語 **mojas-*）は、宮古語では *ma:s-* であるのに対して、八重山語石垣方言では *mo:siŋ* である。八重山語 *cinabagu* において **oja* に相当する位置に *a* が現れる事実は、古い沖繩語形が宮古語を経由して八重山語に借用されたとすれば説明できる。すなわち、「首里大屋子」が沖繩語から宮古語に借用され、宮古語で **oja* が *a(:)* に変化した後に、八重山語に借用されたとする仮説である。ただし、この仮説は、宮古語平良方言の形が *sunupujaku* であり **oja* に相当する位置に *a(:)* が現れていない点と整合しない。これについては、「首里大屋子」が語源的に透明であり、*upu-* 「大きい」を含むことが明らかであるため、現代平良方言形の *uja* 部分は復元による結果とみなすことができる。

琉球諸語の一部に見られる C 系列 2 音節名詞の特徴と一致する。琉球祖語には 3 種類のアクセント系列 (A 系列・B 系列・C 系列) が再建されており (松森 2000), C 系列の 2 音節名詞は, 現代首里方言を含む北琉球諸語の一部において第 1 音節が規則的に長母音化する (松森 2017). 実際, 首里方言の「猿」は sa:ru である。C 系列 2 音節名詞には「息」「臼」「松」「鍋」「婿」なども属し, 首里方言では ?i:tɕi, ?u:si, ma:tsi, na:bi, mu:ku のように長母音をもつ。C 系列における長母音が北琉球祖語あるいはそれ以前に遡るかどうかにについては議論があるが (ペラール 2016; 松森 2017), 本稿はペラール (2016) に従い, 長母音化を北琉球諸語の一部における二次的発達とみなす。この長母音化は南琉球諸語には見られない。実際に多良間方言では「息」「臼」「松」「鍋」「婿」が ika, usɪ, matsɪ, nabi, muku として現れる。したがって, 多良間方言 saru 「猿」は, 規則的な音変化から説明できない長母音を含む点でも不規則である。

加えて, 多良間方言には ɕa:ru 「猿」と並んで, 十二支の申を表す ɕal という語が存在し, 二重語 (doublet) をなしている。十二支の ɕal 「申」は琉球祖語 *saru の規則的反映であり, 多良間語における継承語と考えられる。したがって, ɕa:ru 「猿」は, 多良間語において *ru > ɕ という変化が生じた後の時代に, C 系列 2 音節名詞の第 1 音節長母音化を経験した北琉球語の形式 sa:ru を借用したものと解される。以上から本稿は, ɕa:ru 「猿」を「新しい借用語」の例とみなす。

これに対して, 「苦瓜」「柱」「明日」などは「古い借用語」の例である。「苦瓜」は首里方言 go:ja: に対応し, 宮古語諸方言では gaura~go:ra として現れるが, 後述するように接尾辞 *-ja を伴う形式に由来する。宮古語の継承語彙においては, 語末 *ri に接尾辞 *-ja が付加した *...ri-ja# は, 中核諸方言では rɪa, 多良間方言では re として反映する (2).

(2) a. *piⁿdari 「左」 > 中核 pɪdan :: 多良間 pɪdal

b. *piⁿdari-ja 「左利き」 > 中核 pɪdar^{ja} :: 多良間 pɪdare

「苦瓜」の語根は九州方言との比較から *ⁿgaori と再建される (五十嵐 2022: 14)。本稿では、琉球諸語に見られる a で終わる形は、接尾辞 *-ja が付加された *ⁿgaori-ja に由来するとみなす。したがって *...ri-ja# の条件を満たすはずだが、宮古語では予測される r^{ja} や re ではなく、ra で終わる形式のみが現れる。この不一致は、「苦瓜」が宮古語において借用語であることを示唆する。

本稿は、現代宮古語 gaura~go:ra 「苦瓜」を、15世紀沖縄語 *ⁿgaur^{ja}: (< *ⁿgaori-ja) が前期宮古祖語に借用された *gaura の反映とみなす。語末 *r^{ja}: が *ra として借用されたことは、前期宮古祖語の音素目録を再建する上で重要である。すなわち前期宮古祖語には硬口蓋化子音も長母音も存在しなかったことが示唆される。現代宮古語の多数の方言に見られる go:ra は、gaura がさらに変化したものであり (Pellard 2009: 307–308)、*au が *au として借用されたと考えれば、前期宮古祖語に長母音が存在しなかったとする見解と矛盾しない。

「苦瓜」において中核諸方言で予測される r^{ja} の代わりに ra が現れる点は、para 「柱」と共通する。「柱」は中核諸方言・多良間方言で para の形を持ち、日本語 *hasira* に比べると、*si* の部分が抜けているように見える。現代首里方言の ha:ja 「柱」にも、同様に *si* に対応する部分は見られないが、15世紀沖縄語を記録した朝鮮資料『語音翻訳』には「柱」を意味する *pha.nya* = *pa:r^{ja} が収録されており、現代首里方言 ha:ja の j が15世紀の *r^j に由来することがうかがえる。また、この *r^j の硬口蓋化を説明するために、隣接する *i の存在が要求されるので、*pasira > *pacir^{ja}

> *par^ha のように、1.4節で述べた順行硬口蓋化が生じた後、*ci が脱落して15世紀以降の沖縄語の形が成立したと考えられる。この *ci の脱落は、後述の「明日」など一部の名詞で散発的に生じている音変化であるが、*kanasi-sa 「悲しさ」> kanaça や、*panas-ite 「話して」> hanatci のように、語幹が *si で終わる形容詞や、語幹が *s で終わる（日本語のサ行四段活用相当）動詞の音便語幹では規則的に生じており、一部名詞の散発的脱落は、この動詞・形容詞における脱落が類推的に拡張した結果と考えれば不自然ではない。したがって、haja のように *si に対応する部分を保持していない語形の存在にもかかわらず、「柱」の琉球祖語として *pasira を再建することができ、*si に対応する部分の不在を共有することから para は15世紀沖縄語からの借用とみなされる⁴。琉球祖語 *pasira の継承語として期待される形式を示す passa 「帆柱」（多良間方言）が para 「柱」と共存していることも（二重語）、para 「柱」が借用語であることを支持する。

前期宮古祖語における硬口蓋化子音の不在は、宮古語 atsa 「明日」によっても確認できる。この語は琉球祖語 *asita に比較されるが、para 「柱」と同様に *ci 脱落を経た北琉球的な形式 (*^ʔacitça > *^ʔatça) に由来すると考えられる。さらに宮古語 atsa は ts をもつが、*ta が直接 tsa に変化したとは考えにくく、むしろ順行硬口蓋化によって琉球祖語 *t が *tç となった北琉球語 *^ʔatça を、宮古語が借用した結果とみるのが妥当である。宮古語諸方言には tç ではなく ts をもつ atsa 「明日」が広く分布す

⁴沖縄語の音韻史において *pasira の *r が硬口蓋化して *r^h > j となった原因は *i の存在なので、*si に対応する *ci の脱落は、順行硬口蓋化より遅い時期の音変化である。順行硬口蓋化は、1.4節で論じたように北琉球側の改新なので、それよりさらに遅い *ci の脱落もまた北琉球側の改新ということになり、宮古語で偶然同じ散発的脱落が起こったと考えるより、北琉球側（15世紀沖縄語）から *ci が脱落している形を借用したと考えるのが妥当である。

る。正確には、 ts と i 以外の母音の組み合わせが避けられる傾向のある方言 ($*ts > t\zeta$ となる池間方言 (at ζ a), $*ts > t$ になる多良間方言 (ata) 等) を除いては、atsa が広く用いられる。これは、借用当時の宮古語に音素 $*t\zeta$ が存在しなかったため、 $*ts$ で代用したものと考えられる。

以上の議論を総括すると、宮古語における古い層の沖縄語借用語(「古い借用語」)は、長母音に対して短母音、硬口蓋化子音に対して非硬口蓋化子音が現れる、また、北琉球における祖語の中段母音の反映が宮古語における狭母音の反映に対応する(二重上昇)などといった特徴を有する。このように、古い借用語は前期宮古祖語の音韻体系を反映しており、それらを分析することによって、前期宮古祖語をより精密に再建することが可能となる。

1.7 本論文の構成

第I部第2章では、先行研究によって提案された再建体系を検討し、その年代について考察する。第3章では宮古祖語の子音体系の諸問題を、第4章では宮古祖語の母音体系の諸問題を扱う。

第II部では、宮古祖語よりもさらに古い琉球祖語(第5章)と日琉祖語(第6章)を対象とする。特に第5章では、第I部で宮古語の中の15世紀沖縄語借用語を中心に議論を展開したように、琉球祖語における古代九州基層方言からの借用語に焦点を当てる。宮古祖語の範囲を超えた再建は、日琉祖語から宮古語に至る音変化の歴史を網羅的に記述することを可能とし、宮古語の語彙の由来(語源)研究にも資する。

第2章

先行研究による宮古祖語の再建と その年代

本章ではまず、先行研究による宮古祖語の音韻体系の再建を概観する。宮古祖語の音韻体系を包括的に再建した先行研究は、筆者が知る限り、Bentley (2008) と Pellard (2009) のみであり、それぞれが異なる体系を再建している。その後で、宮古祖語を前期宮古祖語と後期宮古祖語に区分する枠組みを提案する。この区分は、沖縄語からの借用語を考察するために重要となる。

2.1 Bentley (2008) の再建体系

Bentley (2008) は南琉球諸語を比較した書籍であり、著者が「先島祖語」(Proto-Sakishima) と呼ぶ南琉球祖語を再建する過程で、その中間段階として宮古祖語の再建を提示している。

Bentley (2008) の再建する宮古祖語の子音体系は表 2.1 のとおりであ

る。*Nの調音位置は不明とされるが、表では軟口蓋音と同列に配されている。

表 2.1: Bentley (2008) による宮古祖語の子音体系

	*m		*n		*N
*p	*b	*t	*d	*k	*g
*f		*s	*z		
			*r	*j	

同書の母音体系は表 2.2 のとおりである。

表 2.2: Bentley (2008) による宮古祖語の母音体系

*i	*u
e	*o
*a	

現代の宮古語諸方言はいずれも、琉球祖語の *k, *p が *u に先行する環境で摩擦化して *f に変化している (*kuti 「口」 > 多良間 futsɿ; *pune 「舟」 > 多良間 funi)。しかし Bentley (2008) の宮古祖語は、琉球祖語 *pu > 宮古祖語 *fu を除けば、子音の摩擦化以前の段階となっている。摩擦化のうち *pu > *fu のみを Bentley (2008) が認めた理由は明らかにされていない。

また、現代宮古語諸方言では、琉球祖語の中段母音 *e, *o は狭母音として反映する (*pera 「篋」 > 多良間 pira; *tako 「蛸」 > 多良間 taku)。一部方言に見られる中段母音は、母音融合等による二次的発達である。それにもかかわらず、Bentley (2008) は琉球祖語の中段母音に対応する中段母音を宮古祖語に再建している。このことから、Bentley (2008) は中段母音の上昇が生じる前の体系を宮古祖語の体系として再建していることがわかる。

2.2 Pellard (2009) の再建体系

Pellard (2009) は宮古語大神方言の文法記述を主題とする博士論文であるが、その一部に宮古語諸方言の比較に基づく宮古祖語の再建が含まれる。この再建体系は、ペラール & 林 (2012) にも継承されている。ペラール & 林 (2012) は宮古祖語の再建を目的とするというより、調査した諸方言間の音韻対応の提示に主眼を置いているが、豊富な語例を備えており、宮古祖語の再建に有益な情報を提供している。

Pellard (2009) の再建体系が Bentley (2008) と大きく異なる点は、子音の摩擦化と中段母音の上昇という改新が反映されていることである。前述のとおり、現代宮古語諸方言はこの2つの改新を共有する。したがって、宮古祖語を在証される諸変種の最も近い共通祖先 (most recent common ancestor) と定義するなら、Pellard (2009) のように、これらの変化がすでに生じた段階の言語として宮古祖語を再建するのが妥当である。

Pellard (2009) の子音体系は表 2.3、母音体系は表 2.4 のとおりである。

表 2.3: Pellard (2009) による宮古祖語の子音体系

	*m		*n		
*p	*b	*t	*d	*k	*g
		*ts	*dz		
*f	*v	*s	*z		
			*r	*j	

Bentley (2008) の *N は *n と相補分布をなすとして、Pellard (2009) では採用されていない。また、Bentley (2008) の *z に相当する音素について、Pellard (2009) は破擦音 *dz を再建する。Pellard (2009) の *z は摩擦化

表 2.4: Pellard (2009) による宮古祖語の母音体系

	*ɿ	
i		*u
	*a	

に伴って新たに音素目録に加わった子音であり、性質を異にする。ただし、ペラール & 林 (2012) では *dz と *z を区別せず *z に統一している。

2.3 宮古祖語の時代区分

一般には、ある言語の在証される全変種の最も近い共通祖先の段階を、その言語の祖語とみなすのが合理的である。しかし本論文は第 1 章で述べたとおり、沖縄語からの大規模借用が生じた時期は、子音摩擦化および母音上昇以前に遡ると想定している。したがって、沖縄語からの借用語を検討するには、これらの改新以前の段階の宮古語についても考察する必要がある。

本論文では、Yun (2025) の時代区分に従い、子音摩擦化と母音上昇が生じる前の段階を「前期宮古祖語」(Early Proto-Miyako)、それらが生じた後の段階を「後期宮古祖語」(Late Proto-Miyako) と称する。沖縄語からの大量借用が行われた時期に対応するのは前期宮古祖語である。このように宮古祖語を二つの時代に区分して捉えることで、Bentley (2008) と Pellard (2009) による再建体系の相違を説明できる。すなわち両説は相互に矛盾するものではなく、異なる時期の宮古祖語の体系をそれぞれ再建したものとみなすことが可能となる。具体的には、Bentley (2008) の体系は前期宮古祖語に、Pellard (2009) の体系は後期宮古祖語に近いと考えられる。

宮古語を記録した文献資料から前期・後期宮古祖語の絶対年代を推定することができる。注目されるのは『朝鮮王朝実録』漂流民記事に見える「伊良部島」の表記である。「伊良部」を表す現代宮古語は irav (皆愛・砂川方言) であるが、沖縄語首里方言で同音 (?irabu) の島「永良部」が存在し、『正保国絵図』などに見えるように、伊良部島もかつて「永良部」と呼ばれていたため、「永良部」の漢字音から伊良部島の名前の古い発音は *era^mbu のようなものだったと推定できる。

表 2.5 に示すように、『朝鮮王朝実録』の 15 世紀後半の記事では伊良部島の名前が実際に *mb を反映する mp または p で表記されている。一方で、16 世紀前半の記事では摩擦化後の mw が現れる¹(Yun 2025)。これに基づき、本論文では前期宮古祖語を 15 世紀後半、後期宮古祖語を 16 世紀前半の段階とする。

表 2.5: 『朝鮮王朝実録』漂流民記事に見える「伊良部島」

1462 年	日南浦	<i>zil.nam.pwo</i>	/zirnampo/
1479 年	伊羅夫	<i>i.la.pwu</i>	/irapu/
1530 年	尼南院	<i>ni.nam.wen</i>	/zinamwən/

¹最後の *n* (/n/) は、上述の irav に sɪma 「島」の連濁形がついた irav-dzɪma 「伊良部-島」の dz に対応する *ndz の鼻音部の反映と考えられる。

第3章

宮古祖語の子音体系の再検討

本章では、前期宮古祖語の狭母音 *i と *u が後期宮古祖語で完全に合流した (*i, *u > *i) という仮定を中心に、宮古祖語の子音体系を再検討する。

3.1 超重音節回避と摩擦母音の由来

宮古語では、歴史的に CCVV や CVVC のような超重音節が回避されていた時代があったように見える。

このことを示唆する良い例は、「羨ましい」(中核 vv^hamas₁-, 多良間 ve:mas₁) である。Bentley (2008) は南琉球祖語(「先島祖語」)として *ura(ya)m-, 宮古祖語として *uCuyamasV- の再建を提示していることからわかるように、これは日本語 *urayamasi-* と同根の可能性が十分にある形式である。しかも、Pellard (2010) の書評でも指摘されているように、Bentley (2008) が宮古祖語 *uC と再建した「羨ましい」の前半は *ur (> vv) に再建することも可能で、琉球祖語でも日本語と同じ *urajamasi-

の形式を持っていたと推定することができる（沖縄語首里方言 'ure:mas- 「羨ましい」も参照）。

*aja が中核方言で a, 多良間方言で e になる例も, 伝統的に「綾語 (あやご)」と表記されてきた「歌」(中核 a:gu, 多良間 e:gu) のような語から確認できるが (4.3 節参照), この語では *aja に由来する母音が長い (中核 a:, 多良間 e:). 「羨ましい」の場合は, 多良間方言の該当場所の母音は長い, 中核諸方言では短くなっている. 逆に, 多良間方言は語頭に短い v を持つが, 中核諸方言は長い vv を持つ. 予測される形では語頭の子音も長く (*ur > vv), その直後の母音も長い (*aja > a~e:) はずが, 多良間方言では子音が短くなり, 中核諸方言では母音が短くなっているのである. このような不一致は, 各方言が宮古祖語から分岐した後 (少なくとも中央諸方言と多良間方言が分岐した後), 超重音節を回避するためにそれぞれの方言 (または方言群) が祖語の 5 モーラ形を長母音の短母音化や子音の削除によって 4 モーラに変化させていることを示唆する.

もう 1 つの例は, 「番所」(ネフスキー資料の平良方言 bumm^{a}) である. この語は bu:-mmi 「苧麻-績み」と ja: 「家」からなると分析できる¹. それにもかかわらず, 長い u: ではなく短い u を持つ. CVV.CCV のように 2 音節に分けることができる bu:-mmi とは違って, *bu:mm^{a} は CVV.CCVV に分けても CVVC.CVV に分けても超重音節が生じてしまう. したがって, bumm^{a} は, 超重音節を回避するために u: が短母音化し, CVC.CVV の bumm^{a} になった結果と考えられる.

超重音節回避のための子音の削除は, 二重子音が 1 つの子音になる $\text{C}_1\text{C}_1 > \text{C}_1$ タイプだけではなく, 超重音節の末尾にある有声摩擦音を脱落

¹この語の訳語として Jarosz (2015: 85) に提示されている「番所 紡績所」を参照.

させる $VVC_1.C_2V > VV.C_2V$ タイプもあったと思われる。皆愛方言 *kuitca:* 「踊りの一種」がその例である。この語は「声」と「打ち合い」からなると分析できる。後部要素「打ち合い」は、「打ち合わす」に対応する *vtca:s-* との比較から、**kuivtca:(C)* のような形式が予測される²。しかし実際には重音節 **kuiv* が避けられ、それが *kui* になっている。

ここで、非常に興味深いのが多良間方言 *fune:l* 「船酔い」の存在である。中核諸方言は *funai* 「船酔い」の形を持つ。本論文では、この中核方言の形は「船」と「酔い」からなる複合語であると考えられる。しかし後部要素の「酔い」が、究極的には語幹末子音が **w* (< 日琉祖語 **p*) と再建できる動詞（日本語のハ行四段活用相当）の名詞化に由来すること、同じくハ行四段動詞の名詞化に由来する形が、中核諸方言で *akɪnaɪ* 「商い」、*juɪ* 「結い、相互協力」等であることを踏まえると、「船酔い」の「酔い」に相当する部分の末尾も *ɪ* を持った *funaiɪ* が期待される。しかし、中核諸方言の「船酔い」は *funai* であり、母音 *ɪ* が脱落した理由を説明する必要が生じる。

この母音脱落の原因を、本論文では超重音節回避に求める。想定される **funaiɪ* は語末に母音が3つ連続するため、音節を *CV.CV.V* と区切れることも可能であり、必ずしも超重音節を含むとは言いきれない。しかし、現代の中核諸方言の *ɪ* が **z* に遡ると仮定すれば、より古い段階の「船酔い」の形は **funaiz* となり、第2音節が超重音節の *CV.CVVC* 構造となる。宮古語に **z > ɪ* の変化を仮定することで、現在の中核方言の *funai* は **z* が *ɪ* へ変化する以前に、**funaiz* が超重音節回避によって語末子音

²セリック (2020: 198) は後部要素を *vtca:sɪ* 「打ち合わせる」としているが、*s* に当たる部分が見当たらない。この不一致は、本節で後述するように、**w* で終わる語幹を持つ動詞（日本語のハ行四段活用相当）を想定することによって説明できるため、本節では「打ち合い」相当と再建した。

を脱落させた形であると説明できるようになる。

多良間方言 *fune:l* はどのように説明できるだろうか。この語形には、語源的に説明できない *l* が含まれている。第1章で論じたように、多良間方言の *l* は琉球祖語 **ri* あるいは **ru* に遡る。しかし「船酔い」の語史に **r* を含む段階を再建することは困難である。この問題は、多良間方言の「船酔い」を中核諸方言からの借用とみなすことで解消されうる。現代の中核諸方言において語末に *ɿ* をもつ語には、語幹末が **r* で終わる動詞の連用形（あるいは名詞化）に対応する形式が多い。例えば *budur-*「踊る」～*budun*「踊り」である。対応する多良間方言の形は *budur-*「踊る」～*budul*「踊り」であり、名詞の語末には *ɿ* と *l* の対応が観察される。したがって、多良間方言話者が語末 *ɿ* をもつ中核方言形を借用する際、類推によって語末 *l* をもつ形式として借用したと考えるのは合理的である。「船酔い」の場合、中核方言の **funaiz*（当時は **z* が未脱落）を、**budur-*「踊る」～**buduz* (> *budun*)「踊り」等との類推に基づき、**funail* (> *fune:l*) として借用したと説明できる。

現代宮古語諸方言のいわゆる摩擦母音 *ɿ* の解釈には複数の可能性がある。しかし、**fnaiz* > *fnai* のような変化は、超重音節の回避が行われた時代において *ɿ* が有声摩擦音 **z* であったことを示す証拠といえる。

以上のように、「羨ましい」「番所」「踊りの一種」「船酔い」等の語からは、宮古語の古い段階には超重音節が回避されていたことが示唆される。

3.2 摩擦母音の発生と後期宮古祖語 *i

3.1 節で論じたように、現代宮古語中核諸方言のいわゆる摩擦母音 ɹ が有声摩擦音 *z に遡るのであれば、 kab_1 「紙」(琉球祖語 * ka^{mbi}) や mug_1 「麦」(琉球祖語 * $\text{mo}^{\text{n}g\text{i}}$) などの子音直後の ɹ も同様に *z に遡るとみなすことができる。例えば、 b_1, g_1 は * $\text{bz}, *gz$ に遡るとみなすことができる。

しかしながら、頭子音が歯摩擦音 (sibilant) の $\text{s}_1, \text{dz}_1, \text{ts}_1$ が歯摩擦音の連続から構成される * $\text{sz}, *dzz, *tss$ に遡るとみなすのは不自然である。したがって本論文では、これらについては、 ɹ が *z だった時代にはそれぞれ *s, *dz, *ts であったとみなす。この時、*s, *z は音節核を担う機能を有する子音、すなわち成節的子音 (syllabic consonant) である。このように成節的な無声摩擦音 *s の存在を仮定すると、 ptu 「人」(琉球祖語 * pito) や k_1n 「衣」(琉球祖語 * kinu) 等に見られる無声破裂音と ɹ の連続 p_1, k_1 は、* $\text{ps}, *ks$ に由来すると考えることができる。

この成節的な *s, *z の由来については破擦化を想定することができる。[ci] と実現されていたと考えられる琉球祖語の * si が宮古語で s_1 になっており、前述の通り、この s_1 は本論文では *s に由来すると仮定しているので、* si [ci] > *s > s_1 の変化が想定される。この想定に基づくと、琉球祖語 * $\text{pi}, *ki, *^{\text{mbi}}, *^{\text{n}g\text{i}}$ なども [pei], [kci], [$^{\text{mbzi}}$], [$^{\text{n}gzi}$] のような段階を経て * $\text{ps}, *ks, *bz, *gz$ になったのではないかと考えられる³。つまり、狭母音 *i が先行子音の直後に歯茎硬口蓋 (alveolo-palatal) を調音位置とする摩擦的噪音を生じさせた段階を仮定する。同様に、*u も先行子音の直後に両唇を調音位置とする摩擦的噪音を生じさせた段階を仮定して、* $\text{pu}, *ku, *^{\text{mbu}}, *^{\text{n}gu}$ > [$\text{p}\phi\text{u}$], [$\text{k}\phi\text{u}$], [$^{\text{mb}\beta\text{u}}$], [$^{\text{n}g\beta\text{u}}$] > $\text{fu}, \text{fu}, \text{v}, \text{v}$ のような変化

³また、*i > z についても、*i > *zi > *z のような変化を経験していることを想定することになる。詳細は Yun (2025) 参照。

の過程を想定することができる⁴。

これらの摩擦的噪音を伴う破裂音のうち [pɸ], [ᵐbβ] は、閉鎖の行われる位置と摩擦的噪音が生じる位置が同一である、すなわち同器官的 (homorganic) なので、破擦音とみなすことができる。それに対してほかのものは同器官的でない。[kɕ] と [ᵑgz] に関しては、それぞれ [k], [g] と表記している子音の調音位置が、後続の狭母音によって硬口蓋寄りになっているとみなせば、同器官的とみなすことも不可能ではないが、[pɕ], [ᵐbz], [pɸ], [kɸ] は明らかに同器官的ではない。本論文では、歯茎硬口蓋あるいは両唇を調音位置とする摩擦的噪音を伴う破裂音を単一の音素と捉える立場をとり、同器官的な [pɸ], [ᵐbβ] だけでなく、異器官的な [kɕ], [ᵑgz], [pɕ], [ᵐbz], [pɸ], [kɸ] も破擦音とみなす。つまり異器官的破擦音 (heterorganic affricate) を認める。

破擦化した子音を音素的に認めると、少なくとも子音直後においては、*i と *u は音素的に対立しないことになる。狭母音によって破擦化するのは破裂音のみであり、以下に示すように、琉球祖語における破裂音以外の子音 *C においては、*Ci と *Cu の宮古語における反映は同じである。したがって、破裂音の直後の *i, *u を他の方法（本論文では破擦化）によって説明できれば、子音直後の *i と *u の区別を想定する必要がなくなる。

*m *mi > m (*mita > mta 「土」) = *mu > m (*mukasi > mkasɨ 「昔」)

*n *ni > n (*oni > un 「鬼」) = *nu > n (*kinu > kɨn 「衣」)

*ts *tsi > tsɨ (*mitsi > mtsɨ 「道」) = *tsu > tsɨ (*tsuki > tsɨkɨ 「月」)

⁴上述の *i > z の場合と同様に、*u > v もまた *u > *βu > v のように解釈される。

*ⁿdz *ⁿdzi > dzɪ (*toⁿdzi > tudzɪ 「妻」) = *ⁿdzu > dzɪ (*meⁿdzu > midzɪ 「水」)

*s *si > sɪ (*sima > sɪma 「島」) = *su > sɪ (*sumi > sɪm 「墨」)

*r *ri > ɾ (*ori > uɾ 「瓜」) = *ru > ɾ (*peru > piɾ 「蒜」)⁵

*mii > mɪ: 「3」のように例外に見えるものもあるが、これは実際には *mi の部分に由来する成節的な m と *i の部分に由来する成節的な z の連結が [mz] > [mz:] のように一つの音節をなし、2 モーラ分の長さを持つようになったのであろう。短い mɪ はこの方法によって説明できないが、mtaga 「三つ子」のなどにみられる短い mɪ はこの方法によって説明できないが、「三つ子」に関しては ta の部分が存在することから、mɪ: 「3」と futaga 「双子」の混成語として説明するべきであり、他にも短い mɪ を持つ語は、多良間方言の kamɪ 「上」(kam 「神」と分節的な形が一致しない) や tigamɪ 「手紙」のように、日本語からの新しい借用語と思われるものが多数含まれている。

以上から、本論文では前期宮古祖語 *i, *u > 後期宮古祖語 *i のような合流を想定する。残された問題は、先行子音を伴わない琉球祖語の *i, *u の区別が、宮古語諸方言で保たれている事実(例えば語頭における *itsu > itsɪ 「いつ」と *uts- > uts--vts- 「打つ」)を説明することである。本論文は、これを *u > *βi で説明する⁶。

⁵方言によっては ɿ(多良間方言), i(池間方言)。

⁶具体的には、*u > *βu のように摩擦音が挿入され、*u > *i によって *βi となる。宮古語において、語幹が *w で終わる動詞の連用形の最後の *Vwi は、*Vu と同様の反映を示す。例えば、*wewikusare- > b'u:fusari- 「酔っぱらう」(後部要素は *kusare- > fusari- 「腐る」)の *ewi と *keu > k'u: 「今日」の *eu は区別できない。

本論文の破擦化仮説では、現代宮古語諸方言の *fu, v* が後期宮古祖語で破擦音であったとされる。池間方言の無声鼻音の発生がそれを支持する。

池間方言には *ɱmu* 「雲」や *ɱnu* (例:「昨日」) など、音節核母音直前に現れ、しかもその母音と同一の調音位置をもつ無声鼻音が観察される。ペラール & 林 (2012: 44–45) は *ɱmV* を **fumV* に、*ɱnV* を **tsɪnV* に遡らせ、これを無声鼻音発生直前の段階として再建する。しかし、なぜ無声鼻音の発生がこの特定の環境に限られるのかについては十分な説明が与えられていない。**fumV* と **tsɪnV* は、いずれも「摩擦音／破擦音＋狭母音＋鼻音＋母音」という連続で、かつ先行子音と鼻音の調音位置が後続母音と一致するという条件として一般化できそうに見える。ところが実際はそうではなく、たとえば **sɪnV* もこの条件を満たすにもかかわらず、池間方言には *sɪna* 「品格」⁷ のように、当該環境でも無声鼻音を生じない例がある。すなわち、先行研究が想定する段階では、鼻音無声化を引き起こす音の集合が自然類 (natural class) をなしていない。

本論文の再建体系に立つと、鼻音の無声化を自然類に基づく音変化として記述できる。池間方言の *fu* は琉球祖語 **pu, *ku* に、池間方言の *tsɪ* は琉球祖語 **ki, *tsu, *tsi* に由来する。したがって、池間方言の *ɱmV* は **pumV[-high], *kumV[-high]* に、*ɱnV* は **kinV[-high], *tsunV[-high], *tsɪnV[-high]* に遡る (*V[-high]* は非狭母音 **e, *a, *o* を表す)。本論文は、これらの系列が宮古語で次のように推移したと想定している。

(1) a. **pu [pɸu] > *pɸi > fu*

b. **ku [kɸu] > *pɸi > fu*

⁷ 仲間 et al. (2024) の表記では *sɪna* である。ペラール & 林 (2012) の表記では *sina* となるだろう。

c. *si, *su > *si > s₁

d. *ki [kçi] > *ksi > k₁

e. *tsi [tçi] > ts₁

f. *tsu [tsu] > ts₁

池間方言では (1c) の ks (< *ki) は *ks > ts により ts と合流するため、無声鼻音を引き起こす先行子音は、いずれも破擦化の段階を経た系列であるといえる。s₁na 「品格」のような語で無声鼻音が現れないのは、鼻音直前の子音が破擦音ではなく摩擦音であるためである。池間方言の s₁nV は琉球祖語 *sunV, *sinV に由来し、本論文では *su, *si が宮古語で *s となるとみなすので、鼻音の直前は摩擦音となる。

このように本論文の枠組みでは、無声破擦音と鼻音の連続が無声鼻音を生じると説明できる。ただし、すべての無声破擦音と鼻音の連続が無声鼻音化を生むわけではない。池間 ts₁mi 「爪」、ts₁mu 「肝」、funi 「船」は、それぞれ琉球祖語 *tume, *kimo, *pune に由来するが、無声鼻音を持たない。これは破擦音と鼻音の調音位置が一致していないためである。これらの語において、鼻音に破擦音が先行した段階は (2) のように再建される。

(2) a. *tum > *tsm (例：ts₁mi 「爪」 < *kimo)

b. *kim > *ksm > *tsm (例：ts₁mu 「肝」 < *tsume)

c. *pun > *pφn (例：funi 「船」 < *pune)

これに対して、無声鼻音を生じる系列 *pumV[-high], *kumV[-high], *kinV[-high], *tsunV[-high], *tsinV[-high] では、破擦音と鼻音の調音位置が一致する (3).

- (3) a. *pum > *pɸm
 b. *kum > *kɸm > *pɸm (例: ɸmu 「雲」 < *kumo)
 c. *kin > *ksn > *tsn (例: ɸnu 「昨日」 < *kino?)
 d. *tun > *tsn (例: ɸna 「綱」 < *tsuna)
 e. *tin > *tsn

以上より、本論文の枠組みでは、池間方言の無声鼻音は、鼻音と調音位置が一致する無声破擦音が直前に立つ環境で生じたと説明できる。その相対年代は、琉球祖語の *pu と *ku が *pɸ に合流し、かつ *tsu, *tsi, *ki が *ts 合流した後の段階に位置づけられる。したがって、池間方言の無声鼻音は、現代宮古語諸方言における fu がかつて破擦音であったという本稿の見解を支持する証拠とみなせる。

3.3 *-to 「年（助数詞）」にみる破擦化、二重上昇、

***i, *u > *i**

以下に論じるように琉球祖語には「年」を表す助数詞が再建される。助数詞「年」は北琉球諸語と宮古語で母音の対応が不規則である。この不規則性は、本研究の再建体系における破擦化、二重上昇、そして *i, *u > *i の合流によって簡単に説明できる。

表 3.1 に示すように、「年（助数詞）」の琉球祖語の形は，北琉球諸語間の対応からは，*to が再建されうる。しかしながら，宮古語では予測される †-tu ではなく⁸，*te に遡るように見える -ti の形で現れ，対応が不規則である。

表 3.1: 琉球祖語 *to, *te の反映例と「年（助数詞）」

琉球祖語	北琉球		南琉球	
	首里方言	皆愛方言	砂川方言	多良間方言
*tori 「鳥」	tui	tun	tun	tu
*teni 「空」	tin	tin	tin	tin
*-tV? 「年（助数詞）」	-tu	-ti	-ti	-ti

本研究は，宮古語の -ti 「年（助数詞）」を沖縄語から前期宮古祖語への借用と仮定する。本研究の再建体系では，琉球祖語 *tu は遅くとも前期宮古祖語までに破擦音 *tsu へ変化しており，琉球祖語 *to は前期宮古語ではまだ母音上昇を受けず *to のままであったとされる。したがって，前期宮古祖語の継承語彙には音節 [tu] が存在しなかったことになる。

沖縄語側で母音上昇が生じた後，琉球祖語 *-to 「年」は *-tu となる。この段階の沖縄語形 *-tu がそのまま前期宮古祖語に借用されると，継承語彙にはない音節 [tu] が前期宮古祖語に新たに出現する。ここで導入されるのは新しい音素ではなく，*t と *u の連鎖を同一音節で許容するという音素配列制約の緩和である。

沖縄語から前期宮古祖語に借用された *-tu 「年（助数詞）」は，後期宮古祖語における合流 *i, *u > *i (3.2 節) を経て *ti に変化する。ここから ti に至る過程は以下のように説明される。

⁸ダガー (+) は，予測されるが在証されない形式を表す。

後期宮古祖語の継承語彙における *i は、前期宮古祖語の *i, *u の反映である。しかし、破裂音の直後の *i, *u は、後期宮古祖語において、破擦音の摩擦的要素に変化するか、*s, *z に変化するかのいずれかである。この環境では、*i, *u は成節的子音へと変化する。したがって、後期宮古祖語の継承語における *i は、後期宮古語で成節的子音とならなかった前期宮古祖語の *i, *u の反映である。例えば琉球祖語 *iⁿdas- 「出す」は、前期宮古祖語でも *iⁿdas- の形をとるが、この語頭の *i は成節的子音化しない環境に位置する。したがって、前期宮古語の *iⁿdas- は後期宮古祖語 *iⁿdas- と変化する。成節的子音へと変化せずに残った後期宮古祖語 *i は現代宮古語諸方言で i に変化するのだから、後期宮古祖語 *iⁿdas- は現代宮古語諸方言で idas- となる⁹。

沖縄語から前期宮古祖語に借用された *-tu 「年（助数詞）」は、前述の通り、後期宮古祖語では *ti に変化するが、摩擦音や破擦音とは異なり、破裂音は成節的子音になれない。したがって、*ti は現代宮古語諸方言で ti に変化する。このようにして、琉球祖語の *-to 「年（助数詞）」は、沖縄語で母音上昇を経て *-tu となった後、前期宮古祖語に *-tu として借用され、後期宮古祖語で *-ti に変化し、さらに宮古語諸方言で ti に変化したと説明される。宮古語諸方言の -ti 「年（助数詞）」は、沖縄語での母音上昇を経て、前期宮古祖語に借用された語であり、借用後に宮古語側で母音上昇が生じることになるので、二重上昇を示す例となる。

⁹多良間方言では、idas- に加えて ndas- の形も見られるが、これは二次的な成節的子音化の結果である。

3.4 *paro 「畑」と *ɿ の再建

琉球祖語で「畑」を意味する語にも北琉球諸語と宮古語との間で対応の不規則性が認められる。この不規則性は、宮古祖語における *r の音価を再建する上で重要である。

「畑」の琉球祖語の形は、haru (首里方言) や paru: (今帰仁方言, 伊江島方言) のような北琉球諸語間の対応からは、琉球祖語 *paro または *paru が再建されうる。これは、同じく *ro または *ru で終わる「色」(*iro > 中核諸方言 iru) や「昼」(*piru > 中核諸方言 pi:) のように、宮古語では †paru や †pai のような形式が予測されるものであるが、実際には *pare に遡るように見える pari の形で現れ (*re > ri については表 1.2 参照), 対応が不規則である。

本研究は、宮古語の pari 「畑」を沖縄語から前期宮古祖語への借用と仮定する。具体的には、沖縄語で (母音上昇を経た¹⁰) *paru が前期宮古語に借用されたと仮定する。*ru が現代宮古語諸方言で ru ではなく ri として反映されている事実を説明するために本研究は、宮古祖語における継承語彙の *ri, *ru は [ɿ], [ɿu] と実現されていたと仮定する。この段階で沖縄語からの借用語の *paru [paru] を借用すると、新たに *r と *ɿ が音素として対立するようなる。

前期宮古祖語の継承語彙における *ru, *ri は、*i, *u > *i の合流によって後期宮古語で *ri となり、*ri は成節的子音 *ɿ となる。この *ɿ は現代宮古語諸方言で r- となる。それに対して、借用語における *ru は *i, *u > *i の合流によって後期宮古祖語で *ri となるが、*ri は成節的子音になれず、*ri にとどまる。成節的子音にならなかった後期宮古祖語の i は現代宮古

¹⁰琉球諸語のデータだけでは、「畑」の最後の母音を特定することは難しいが、日本語 para との比較から、本研究では *paro の再建を採用する。6章の議論も参照。

語諸方言で i となる。以上のように、琉球祖語 *paro は借用を経て、現代宮古語諸方言で pari として反映されると説明することができる。

したがって、本研究の再建体系では、宮古祖語において *r と *ɾ は別の音素として扱うべきであるが、これらが狭母音の前でしか対立しないことと、*ɾ と対立する *r は借用語にしか存在しないことを考慮し、本節の表 3.2 と表 3.3 を除いて、以降 *r と *ɾ を区別せず *r と表記する。

3.5 宮古祖語の子音目録

本章の議論から、本論文は前期宮古祖語の子音目録は表 3.2、後期宮古祖語の子音目録は表 3.3 のように再建する。

表 3.2: 前期宮古祖語の子音目録

	*m		*n		
*p	* ^m b	*t	* ⁿ d	*k	* ^ŋ g
		*ts	* ⁿ dz		
	*β	*s		*z	
			*r		
	*w		*ɹ	*j	

表 3.3: 後期宮古祖語の子音目録

	*m		*n		
*p	* ^m b	*t	* ⁿ d	*k	* ^ŋ g
*pφ	* ^m bβ	*ts	* ⁿ dz		
	*β	*s	*z		
			*r		
	*w		*ɹ	*j	

先行研究との違いは、後の z, v を説明するために摩擦音 *β, *z (> 後期宮古祖語 *z) を設定していること、そして二つの流音音素 *r と *ɹ の区別を想定していることである。

また、*p, *^mb, *k, *^ŋg の摩擦化の過渡的な段階として、後期宮古祖語に異器官的な破擦音を再建していることも本論文の新しい点である。

第4章

宮古祖語の母音体系の再検討

本章の議論は、尹 (2025a) の成果を土台としつつ、大幅な修正を加えたものである。

4.1 母音 * ϵ の再建

本論文が再建する前期宮古祖語の体系は硬口蓋化子音を欠く。しかし、古い層の沖縄語借用語の中には、現代宮古語諸方言の一部で硬口蓋化子音が現れるものも存在する。本節では、このような現代宮古語諸方言の硬口蓋化子音は、前期宮古祖語に再建される子音の直接の反映ではないとする枠組みを提案する。具体的には、15世紀沖縄語の硬口蓋化が、前期宮古祖語では子音ではなく母音 * ϵ あるいは * æ によって反映されたとする枠組みである。本節では * ϵ の再建を論じる。

古い層の沖縄語借用語と考えられる語で、一部の現代宮古語諸方言が硬口蓋化子音を示す語の例の1つは「糸瓜」(中核 nab'ara, 多良間

nabira) である。注目すべきは、現代宮古語諸方言間で、「糸瓜」に (1) のような音対応が観察されることである。

(1) 中核 C^ja :: 多良間 Ci

「糸瓜」は、語源的には「鍋を洗うもの」の意を持つとされ¹、琉球祖語 *na^mbe 「鍋」 + *araw-i 「洗い」 + 接尾辞 *-ja に遡る形式が想定される。しかし、宮古語の継承語においては、琉球祖語で *aw で終わる語幹に接尾辞 *-ja が付く場合、中核諸方言では ...aja, 多良間方言では ...e: という反映が一貫して観察される。例えば *kuraw- 「食べる」の派生形 *kuraw-i-ja は、中核諸方言 faja, 多良間方言 fe: となる。したがって、「糸瓜」が継承語であるならば、その語末は ...ra ではなく、...raja ...re: となるはずである。しかし実際にはそうではない。したがって、現代宮古語諸方言の「糸瓜」は借用語であることが示唆される。

首里方言の「糸瓜」では、接尾辞 *-ja を伴う形が母音融合によって長母音化している (15 世紀沖繩語 *na^mbe:ra: > 現代首里 na:be:ra:)。この形は、母音の長さを除けば、現代宮古語諸方言の形 (中核 nab^ja:ra, 多良間 nabira) に類似している。首里方言の長母音に対して短母音が現れることは、第 1 章で論じた「苦瓜」(首里方言 go:ja: :: 宮古語 gaura go:ra) と共通している。この共通性は、宮古語の「糸瓜」も、「苦瓜」と同様に 15 世紀沖繩語からの借用語であることを示唆する。

15 世紀沖繩語の長母音が短母音として借用されるという規則をそのまま適用すると、予測される宮古形は *na^mbera である。しかしこの形では、中核諸方言に観察される b^ja: を説明できない。中核諸方言に観察される硬口蓋化子音を説明するために、前期宮古祖語に硬口蓋化子音を含

¹筆者の知る限り、これは一部の話者が持っている語源認識である。

む *na^mb^jera や *na^mb^jara を祖形として再建することは適切ではない。なぜなら、第1章で論じた「苦瓜」「柱」「明日」などの古い層の沖縄語借用語における硬口蓋化子音を、前期宮古祖語が非硬口蓋化子音として借用するという枠組みと矛盾するからである。

そこで本論文は、中核 C^ja :: 多良間 Cⁱ という音対応 (1) を示す語について、前期宮古祖語に母音 *ε の再建することを提案する。前期宮古祖語の *Cε は、中核諸方言で C^ja に、多良間方言で Cⁱ に変化する (2)。

(2) 前期宮古祖語 *Cε > 中核 C^ja :: 多良間 Cⁱ

この再建体系に従えば、「糸瓜」の前期宮古祖語形は *na^mbera と再建できる。「糸瓜」に関する限り、提案される音変化 (2) には、中核方言の nab^ja:ra が多良間方言 nabira と母音の長さにおいて一致しないという問題が残るが、これは中核方言における散発的な長母音化の結果と解釈する (3)。

(3) 前期宮古祖語 *na^mbera 「糸瓜」 > 中核 nab^ja:ra :: 多良間 nabira

中核 C^ja :: 多良間 Cⁱ の対応 (1) に基づいて前期宮古祖語に *Cε が再建できる語は「糸瓜」以外にも多数見られる (4)。

(4) a. 前期宮古祖語 *m{i, u}kεku 「海葡萄」 > 中核 ŋk^jafu :: 多良間 ŋkifu

b. 前期宮古祖語 *ukεn{i, u} 「鬱金」 > 中核 uk^jaŋ :: 多良間 ukin

c. 前期宮古祖語 *ekεra- 「少ない」 > 中核 ik^jara- :: 多良間 ikira-

d. 前期宮古祖語 *ikεma 「池間 (島)」 > 中核 ik^jama :: 多良間 ikima

- e. 前期宮古祖語 *kurema 「来間 (島)」 > 中核 ff^aama~ffima :: 多良間
ffima

「海葡萄」(4a)に対応する語は、『沖縄語辞典』には見られないが、『沖縄伊江島方言辞典』には *ŋkiku* 「海葡萄」がある。琉球祖語 *{m, n}ukek{o, u} に遡る形式である。Jarosz (2021: 65) は、琉球諸語の「海葡萄」を上代中央日本語 *nikimē* 「和海藻」と比較し、日琉祖語 **nike* を再建している。しかし上代中央日本語 *nikî-mē* 「和海藻」は *ara-mē* 「荒海藻」と対立する語であることを踏まえると、その前部要素は「柔らかい」を意味する *nikî* であるとみなせる。したがって、意味の対応が成立しない。それに対して本稿は、海葡萄は岩の表面に着生することを踏まえ、琉球祖語 *{m, n}ukek{o, u} 「海葡萄」は、語源的に **muke-* 「剥ける」を含むと解釈する。『混効験集』の「むけ(こ)」(外間 1970) もこの解釈を裏付ける。

「海葡萄」の 15 世紀沖縄語形として本論文は **mkeku* を再建する。語頭に後続母音を伴わない **m* を再建するのは、15 世紀沖縄語では、すでに **mi*, **mu* > **m* の変化が生じていたと考えられるからである。この想定は、琉球祖語 **muna* に由来する現代首里方言 *nna* 「空っぽ」が、朝鮮資料『語音翻訳』(1501 年) に *mi.na* /*mina*/ として記録されている事実によって裏づけられる。この *mi.na* に含まれる *i* (*u* ではない) は、15 世紀末の沖縄語 **mna* の発音を中期朝鮮語話者が聞き取ったが、中期朝鮮語では語頭 /*mn*/ が許容されなかったため、/*mina*/ として転写された結果と解される。

以上のように本論文は 15 世紀沖縄語形として **mkeku* を再建し、前期宮古祖語 **m*{*i, u*}*keku* をその借用とする。この **m*{*i, u*}*keku* では、語頭の **m* の後に、借用元の沖縄語には存在しない狭母音 {*i, u*} が再建されて

いるが、これは借用の際に後続母音をもたない *m を適応 (adaptation) する過程で挿入されたものとみなす。前期宮古祖語に V および CV 以外の音節構造を認める根拠がないので、本論文は前期宮古祖語は CCV 構造を許容しなかったと想定している。したがって、後続母音を持たない *m の適応として狭母音を伴う *mi または *mu が前期宮古祖語で生じた と解釈する。

「鬱金」(4b) も、15 世紀沖繩語からの借用であると想定される。現代首里方言の「鬱金」^ʔutɕiŋ である。15 世紀沖繩語に *^ʔukin のような形を再建すれば、*i による *k の逆行硬口蓋化によって現代首里方言の形は得られるが、このような再建では宮古語諸方言の反映形が説明できない。第 5 節で論じるように、本論文は「鬱金」の琉球祖語形として *usiken{i, u} を再建する。この形は究極的には「鬱金」の呉音に遡る。*usiken{i, u} は、第 1 章で論じた順行硬口蓋化とその後の *si の脱落によって、15 世紀沖繩語 *^ʔukⁱen となる。いずれにせよ、本論文の提案する *Cε > Cⁱa のような広母音化 (2) を想定せずに、中核宮古語諸方言の ukⁱaŋ のような形式を説明するのは難しい。前期宮古祖語 *ukɛn{i, u} の語末には、借用元の沖繩語にはない母音を伴う *n{i, u} が再建されているが、これは「海葡萄」(2a) の場合同じように、後続母音を持たない *n の適応として狭母音を伴う *ni または *nu が生じた と解釈されるためである。

「少ない」(4c) は、15 世紀沖繩語 *^ʔekera- 「少ない」 (> 現代首里方言 ^ʔikira-) の借用である。もし琉球祖語の「少ない」の語頭 2 音節が *iki, *ike であれば、沖繩語では順行硬口蓋化によって *k > *kⁱ > tɕ のように変化するはずであるが、現代首里方言では硬口蓋化していない ^ʔikira- である。同様に、琉球祖語の「少ない」の語頭 2 音節が *eki であれば、沖繩語では逆行硬口蓋化によって *k > *kⁱ > tɕ のように変化するはずで

あるが、現代首里方言では硬口蓋化は生じていない。したがって、琉球祖語 *ikara- を再建し、中核宮古語諸方言の ik^hara- を宮古語における散発的な硬口蓋化の結果とするようなことはできない。15世紀沖繩語 *^hekera- については、その連用形 *^hekeraku 「少なく」が『語音翻訳』に yey.kyey.na.kwu /jəjkjəjnaku/ として在証され、中段母音 *e の再建を支持する²。

「池間」(4d) と「来間」(2e) は、宮古諸島の島の名前である。来間島の名前は、『朝鮮王朝実録』の朝鮮漂流民記事(1462年)に「屈伊麻 kwul.i.ma /kurima/」として在証される。中期朝鮮語に前舌母音は /i/ しか存在しなかったため (Lee & Ramsey 2011: 156–158), /i/ については、他の前舌母音を中期朝鮮語話者が /i/ と認識した可能性もあるが、いずれにしても第2音節の母音が前舌の短母音であったことが伺える。本稿では現代首里方言の形 (*itc^hima, kurima) を参照し、15世紀沖繩語として *^hik^hema, *kurema を再建し、前期宮古祖語 *ikema, *kurema をその借用と考える³。

(4) の全ての例において、前期宮古祖語 *ε は、15世紀沖繩語の非語末第2音節の *e に対応する。この非語末第2音節の *e は、中核諸方言では *Cε > C^ha, 多良間方言では *Cε > *Ci の反映を示す。

(5) は、由来は同じであるが、変則的な反映を示す例である。

(5) a. 前期宮古祖語 *jutete- 「零す」 > 中核 itati- :: 多良間 itati-~jutati-

²中段母音 *e は『語音翻訳』のハングル表記に yey, uy, i などと表記される。

³島の名前が借用であるという結論は意外であるが、特殊な反映を示しているため、借用語であると考えしかる。類例として、八重山語石垣方言でも「石垣(島)」を ^hicanagi といい(宮城 2003), *isi^hgaki の *^hg に対応する n が見られるが、これは pimi < *pi^hge 「髭」など一部の語にしか見られない特徴で、沖繩語における順行硬口蓋化の環境に限られている。筆者の知識の範囲内では、八重山語内部の変化によってこのような現象を説明することは難しく、恐らくかつての沖繩語における硬口蓋化子音 *^hgⁱ ([ŋ]?) を n として借用した結果と考えるのが妥当である。

- b. 前期宮古祖語 *sotetsu 「蘇鉄」 > 中核 sutitsɨ~çukʲatsɨ :: 多良間
çutatsɨ

「零す」(5a)は、15世紀沖縄語 *jute- 「零す」(> 現代首里方言 juti-)の借用であると考えられる。セリック(2020: 44)によると、宮古島の山中方言・比嘉方言には itʲati- の形式があるので、本論文では itʲati- がより古い形で、itati- は散発的な非硬口蓋化の結果とし、前期宮古祖語の *jutete- を再建する。この前期宮古祖語 *jutete- の語尾には、借用元の沖縄語 *jute- と対応しない *-te が付加されている。本研究は、これを、語幹末に *ε を持つ母音語幹動詞が許容されないため、接辞 *-te のついた *jute-te 「零して」を語幹として借用した結果と考える⁴。

多良間方言には、itati-~jutati- と並んで継承語の可能性のある juti- があるため、itati- は他方言からの借用語である可能性も考えられる。その場合、jutati- は juti- と itati- の混淆形の可能性もある。

セリック(2020: 50)は、この語を日本語 i- 「注ぐ」+ tate- 「立てる」に対応するものとする語源説を提示しているが、この語源説では語頭に ju を持つ juti-~jutati- の説明が難しいと思われる。宮古語内部的な itati- と jutati- の類似、宮古語と現代首里方言 juti- の類似、そして現代首里方言の juti- が ju: 「湯」+ ʔuti- 「食べ物などを他の容器に移す」に当たる複合語と考えられる点を考慮する必要がある。

「蘇鉄」(5b)は、宮古語諸方言において sutitsɨ, sututsɨ, sutatsɨ のように第2音節母音の揺れが激しい(セリック 2020: 52)。しかし çukʲatsɨ を見るに、*tʲa からの散発的な変化によって kʲa, ta などの形式が生まれたと考

⁴これと似た例に宮古語の不規則活用動詞 mmʲa:~ɨ 「いらっしゃる」の命令形 mmʲa:~tɕi 「いらっしゃい」がある。この形は、現代首里方言 ʔ(i)mo:r- 「いらっしゃる」(< *imawi-?) の命令形 ʔ(i)mo:r-i ではなく、接辞を伴う ʔ(i)mo:tɕ-i 「いらっしゃって」に対応する。

えられる。現代首里方言は *su:ti:tsi* で、15 世紀沖繩語として **so(:)te(:)tsu* が再建される。

(6) 前期宮古祖語 **tɛ > ta, tʰa, kʰa, ti, ...* (散発的)

4.2 母音 **æ* の再建

古い層の沖繩語借用語と考えられる語のうち、中核諸方言に硬口蓋化子音が現れる例として、「烏賊」(中核 *ikʰa*, 多良間 *ika*) および「苦い」(中核 *ŋgʰa-*, 多良間 *ŋga-*) がある。現代首里方言ではこれらは *ʰitɕa* 「烏賊」, *ndza-* 「苦い」であり、いずれも硬口蓋化子音を含む。したがって、表面的には 15 世紀沖繩語 **ikʰa*, **ŋgʰa-* の **kʰa*, **gʰa* がそのまま宮古語に借用され、*ikʰa*, *ŋgʰa-* となったかのように見える。もしそうであるなら、本研究が前期宮古祖語に硬口蓋化子音を再建しない立場をとる以上、「烏賊」「苦い」は前期宮古祖語以降に借用された「新しい借用語」と位置づけられることになる。しかしながら、本稿はこれらの語の宮古語諸方言間の音対応を、「針」「走る」に観察される対応と並行的なものとして捉える。このように捉えることによって、「烏賊」「苦い」においても、15 世紀沖繩語の硬口蓋化は子音としてではなく母音によって反映されたとみなしうる。具体的には、「烏賊」「苦い」「針」「走る」の前期宮古祖語形に母音 **æ* を再建する。

「烏賊」「苦い」には (7) の音対応が観察される。

(7) 中核 *Cʰa* :: 多良間 *Ca*

(7) のような音対応を示す語について、本論文は前期宮古祖語に **æ* を再建する。前期宮古祖語の **Cæ* は、中核諸方言で *Cʰa* に、多良間方言

で Ca に変化する (8).

(8) 前期宮古祖語 *Cæ > 中核 C^ja :: 多良間 Ca

この再建体系に従えば、「烏賊」「苦い」の前期宮古祖語形は *ikæ, *nfi, u^hgæ- と再建できる。これらの借用元である 15 世紀沖縄語の形は、それぞれ *^hik'a (> 現代首里 'itca), *ng^ja- (> 現代首里 ndza-) となる。*ng^ja- 「苦い」について、15 世紀沖縄語で後続母音のない *n が、前期宮古祖語で狭母音を伴う *nfi, u^h として借用されているのは、4.2 節で論じた適応の結果である。

*æ の再建に重要となるのが「針」と「走る」である。現代宮古語諸方言において、これらの語は (9) のような特徴的な音対応を示す。

(9) a. 「針」中核 pin~pɪ :: 多良間 pal

b. 「走る」中核 pir- :: 多良間 par

(9) の音対応は、中核諸方言に C^ja ではなく Ci が現れる点で、「烏賊」「苦い」における音対応 (7) とは異なっている。しかし、「針」については『宮古 28 集落の音韻調査』に久松・友利・保良（いずれも中核方言）の形として p^jaɪ が記録されている。また「走る」についても、『雍正旧記』（1727 年）の韻文（綾語）には「へやり」「へやれ」「へあり」の形があり、これは p^jar-i の発音を反映すると考えられる。さらに、ネフスキー資料にも平良方言韻文の形として p^jar- が収録されている⁵。加えて、宮古島の地名 p^jarumidzɪ 「漲水」において、この動詞の古い連体形

⁵Jarosz (2015) による形は、厳密には p^jaɪ (原文の表記は p^ja:z) であるが、この資料の V_ɪ は、他の資料の V_i に対応するものが多い。これは、ネフスキー資料が半長母音 (ː) と長母音 (:) を区別していないこと (Jarosz 2015: 9) を原因としている可能性がある。狩俣・佐和田の方言として記録された p^jarasɪ 「走らせる」(原文の表記は p^jarasi) などの比較から、語幹が p^jar- であることは間違いない。

と考えられる p^har-u が確認される。これらの事実から、pir- よりも p^har- が古い形式であることは確実である。

以上から、現代中核諸方言に見られる pin~pɪ: 「針」、pir- 「走る」は、それぞれ p^haɪ, p^har- から二次的に発達した新しい形式であるとみなすことができる⁶。したがって、「針」「走る」にも「烏賊」「苦い」と同様の音対応 (7) を認めることができ、両語について *æ を伴う前期宮古祖語を再建することが可能となる (10)。

(10) a. 前期宮古祖語 *pæri 「針」 > 中核 p^haɪ (> pin~pɪ:) :: 多良間 paɪ

b. 前期宮古祖語 *pær- 「走る」 > 中核 p^har- (> pir-) :: 多良間 par

本論文は、前期宮古祖語 *pæri 「針」、*pær- 「走る」を 15 世紀沖繩語からの借用語とみなす。残された課題は、15 世紀沖繩語の「針」「走る」では、「烏賊」「苦い」とは異なり、前期宮古祖語で *æ を含む音節の子音が硬口蓋化していない点をどのように説明するかである。現代首里方言における「針」「走る」の形はそれぞれ hai, har- であるため、*p^hari, *p^har- のように硬口蓋化子音を伴う形を 15 世紀沖繩語に再建する直接的な根拠がない。

⁶p^ha が pi に変わる二次的変化について、*pær- 「走る」が多くの方言で「行く」という新しい意味を獲得していることが注目される。系統的に他の方言と離れている (Pellard 2009: 281-284) 多良間方言では、この語は「走る、流れる」の意味で使われることから、「行く」を意味するようになる変化は多良間方言が宮古祖語から分岐した後の改新と思われる。地名の p^harumidzɪ も「行く水」という解釈は不自然であることから、恐らく「走る水」または「流れる水」の意である。さらに、『雍正旧記』の綾語でこの語が常に「着く」「行く」など他の動詞とともに現れ (例えば「へやれいけい」)、単独では使われないことから、「行く」という意味の獲得は比較的新しい変化であることが伺える。したがって、中核宮古語諸方言において予測される p^ha の代わりに pi を持つ形は、*æ が *e に合流し、*pær- > pir- 「行く」のような変化を経験した方言から借用によって拡散した可能性がある。ただ、筆者の知識の範囲内では、そのような方言は現代においては存在しない。他には、(中核諸方言では *æ が *e に合流しているため) *e をまだ保持していた方言から、既に *e を失った方言への借用の可能性も考えられるが、現時点ではそれを裏付ける独立的な根拠はなく、この特殊な反映の原因については、今後更なる検討が必要である。

ここで注目されるのは、現代首里方言 har-「走る」が琉球祖語 *pasir-「走る」に遡りうる点である。第1章で論じたように、北琉球諸語では琉球祖語 *si が脱落する傾向があり（例：*asita > *ʔaʃitʃa > 首里 ʔatʃa「明日」）、この脱落前の段階では *si が順行硬口蓋化を引き起こす。したがって、琉球祖語 *pasir- は *pacir^j- を経て、15世紀沖繩語で *par^j- へと変化したと考えられる。この *par^j-「走る」では、前期宮古祖語 *pær- の *æ の直後に対応する子音 *r が硬口蓋化している。

同様に、「針」においても硬口蓋化した *r^j を想定することができる。現代首里方言 hai「針」は琉球祖語 *pari に由来し、15世紀沖繩語では C 系列に特徴的な長母音化（第1章参照）を経た *pa:ri が再建される。この *pa:ri の *r は狭母音 *i に先行するため [pa:r^ji] のように硬口蓋化したと考えられる。したがって、15世紀沖繩語の形は便宜的に *pa:r^ji と表記できる。

以上を踏まえると、「針」「走る」の15世紀沖繩語形はいずれも、前期宮古祖語の *æ の直後の *r が硬口蓋化した *pa:r^ji, *pa:r^j- であったとみなすことができる。したがって、前期宮古祖語には、15世紀沖繩語の *Ca(:)r^j が *C^jar であるかのように借用される現象を想定することができる。本論文はこれを「硬口蓋化の前方移動」(palatalization throwback) と呼ぶ。

硬口蓋化の前方移動は、子音が隣接する母音の調音位置を変化させる vowel coloring の一種として説明される。具体的には、硬口蓋化子音が隣接する広母音 *a を前舌化し (a > æ)、その結果が母音音素として再分析される現象の1つである⁷。表4.1に示すように、本研究では、15世

⁷例えば、カザフ語には主にアラビア語やペルシア語からの借用語の第1音節に見られる特殊な母音音素 /æ/ があり (Muhamedowa 2016: 274)、アラビア語において母音 /a/ の後舌環境ではない場合の前舌実現に対応する。

紀沖繩語において、硬口蓋化破裂音は直後の、硬口蓋化共鳴音は直前の
 広母音を前舌化させたと仮定する。15世紀沖繩語における広母音の前
 舌性は、隣接する口蓋化子音に付随する余剰的特徴にすぎなかったが、
 前期宮古祖語がそれを借用する際に、子音の特徴ではなく母音の特徴—
 すなわち独立した母音音素 *æ—として取り入れたと考える。この仮定
 に従えば、15世紀沖繩語 *^ʔik^ʔa [ik^ʔæ] 「烏賊」は *ikæ とし、*parⁱ [pærⁱ]
 「針」は *pæri とし前期宮古祖語に借用されたことになる。後者のよう
 に、口蓋化の特徴が子音から直前の母音へ移行する現象を本研究は「硬
 口蓋化の前方移動」と呼ぶ。

表 4.1: 硬口蓋化子音に隣接する *a または *a: の借用

	前の *a(:)	後ろの *a(:)
硬口蓋化破裂音	→ 前期宮古祖語 *a	→ 前期宮古祖語 *æ
硬口蓋化共鳴音	→ 前期宮古祖語 *æ	→ 前期宮古祖語 *a

ただし、表 4.1 の規則だけでは「柱」の例を説明できない。「柱」は
 現代首里方言 ha:ja に対応し、これは琉球祖語 *pasira 「柱」に由来する。
 *pasira は *si の脱落、順行口蓋化、C 系列の長母音化を経て、15 世紀沖
 繩語で *parⁱa に至ったと考えられる。この場合、前期宮古祖語には、*rⁱ
 による硬口蓋化の前方移動を経た *pæra が予測される。しかし実際には、
 中核方言には pⁱara ではなく para が現れる。

本論文はこの問題を、母音調和的な制約を仮定することで説明す
 る。すなわち、前期宮古祖語には語中で前舌広母音 *æ と後舌広母音
 *a が共存しないという制約があったと仮定する。この場合、15 世紀沖
 繩語 *parⁱa 「柱」に対応する前期宮古祖語 *pæra は、同化規則 *æ > a /
 _Ca に従い *para へと変化したことになる。この過程は、古英語におけ

る a-restoration (Lass 1994: 41–44) と類似している。本稿では暫定的に前期宮古祖語 *pæra 「柱」を再建する (11)⁸。

(11) 前期宮古祖語 *pæra 「柱」 > 中核 para :: 多良間 para

4.3 長母音 *ɛ: と短母音 *ɛ の対立

長母音 *ɛ: を再建する必要性

本章で前期宮古祖語に新たに再建した *ɛ, *æ の根拠は、中核 C^ja :: 多良間 Ci や中核 C^ja :: 多良間 Ca とという音対応である。これらは 15 世紀沖縄語からの借用語に限られた分布を持つ。一方、現代宮古語諸方言には、これらに表面的に類似する中核 C^ja :: 多良間 Ce: という対応も見られる。この長母音の反映を伴う対応の特徴は、借用語にとどまらず継承語にも現れる点である。

Pellard (2009: 299) は、中核 C^ja :: 多良間 Ce: の対応を示す例として表 4.2 の 5 語を挙げている。このうち「昔」「無い」「一人」の 3 語はペラー & 林 (2012) でも同様に再建されているが、本稿では代表的先行研究として Pellard (2009) を引用する。

「昔」「無い」「一人」「未明」の音対応（中核 C^ja :: 多良間 Ce:）は、本稿で *Cɛ を再建する根拠とした中核 C^ja :: 多良間 Ci の対応と類似している。この点から、本稿は当該対応を *Cɛ の長母音版、すなわち祖語 *Cɛ: の反映とみなす。前期宮古祖語は長母音を欠く体系であるため、長母音

⁸このような再建は多少アドホックに見えるかもしれないが、*pera に遡るように見える与那国語 çira 「柱」の存在は、本論文の仮説（節参照）から考えて、宮古祖語の「柱」に由来する可能性があり、宮古祖語 *pæra → 与那国祖語 *pera のような適応を想定することができる。これは、硬口蓋化子音に隣接する *a の借用規則を再確認するものであるが、現代宮古語 para との不一致を説明するために *æ > a / _Ca のような母音調和的变化の設定が必要となる。

表 4.2: Pellard (2009) による宮古祖語の再建の例

	中央 大神方言	中核 平良方言	池間・伊良部 池間方言 長浜方言		多良間 塩川方言	宮古祖語
「昔」	ikɛ:m	ŋk ^h a:ŋ	ŋk ^h a:ŋ	ŋk ^h a:ŋ	ŋke:ŋ	*ŋkjaan
「無い」	nɛ:n	n ^h a:ŋ	n ^h a:ŋ	n ^h a:ŋ	ne:ŋ	*njaan
「一人」	tafkɛ:	tavk ^h a:	tauk ^h a:	tavk ^h a:	to:ke:	*tavkjaa
「未明」	sɛ:ka	ɕa:ka	ɕa:ka	ɕa:ka	ɕe:ka	*sjaaka
「もっと」	mmɛpi	nnapi	mm ^h api	mm ^h api	mmɛpi	*mmjapi

*ɛ: は前期宮古祖語ではなく後期宮古祖語の特徴と位置づけられる。後述するように、後期宮古祖語の *ɛ: は前期宮古祖語 *ai, *ae, *ei, *aja, *ija に由来する。本稿は後期宮古祖語 *Cɛ: の音変化として (12) を提案する。

(12) 後期宮古祖語 *Cɛ: > 中核 C^ha :: 多良間 Ce:

多良間方言では、長母音 *Cɛ: は Ce: に反映するが (12)、短母音 *Cɛ は Ci に反映する (2)。この差異は、母音上昇が短い中段母音にのみ生じ、長い中段母音には適用されなかった結果と説明できる。

表 4.2 以外の例として、「歌」(中核 a:gu :: 多良間 e:gu) も同様の対応を示す。この語は語頭に対応が現れる点で特異である。「歌」は宮古の伝統的な詩歌を指す語であり、18 世紀の宮古島旧記類には「あやこ」「あやご」「綾語」「綾子」などの表記が見られることから、*ajaⁿgo に由来すると認識されていたことが窺える。語源的に *aja に遡る点は、*sajaka に由来する表 4.2 の「未明」と同じである。本論文は、前期宮古祖語に *sajaka 「未明」、*ajaⁿgo 「歌」を再建し、前期宮古祖語 *aja > 後期宮古祖語 *ɛ: の音変化を経て、後期宮古祖語の *sɛ:ka 「未明」、*ɛ:ⁿgo 「歌」が生じたことを提案する。

ただし、「歌」には伊良部の一部方言で予測される i: の反映が見られないという問題がある。しかし、「歌」が文化的語彙に属することを考慮すれば、地理的に最も隔たる多良間を除き、中核方言形が他方言に浸透した可能性が十分に考えられる。

Pellard (2009) は問題の音対応を示す語に *Cjaa を再建している。しかしこの再建では「歌」の祖形を提示できない。中核 C^ja: :: 多良間 Ce: < 宮古祖語 *Cjaa という仮定を語頭に拡張すると、「歌」の祖形は *jaa (*Cj を *C と *j に分解した場合) または *aa (そうでない場合) となる。しかし前者であればすべての方言で (同音の「家」のように) ja:, 後者であれば a: となることが予測されるので、中核 a: :: 多良間 e: という対応は説明できない。

一方、本稿が提案する中核 C^ja: :: 多良間 Ce: < *Ce: の再建 (12) は、語頭に先行子音をもたない場合にも (13) のように拡張できる。

(13) 後期宮古祖語 *ε: > 中核 a: :: 多良間 e:

したがって、「歌」の存在は長母音 *ε: を再建する必要性を裏付けるものといえる。

長母音 *ε: の短母音化と短母音 *ε の長母音化

表 4.2 の「もっと」は、長母音 (中核 C^ja: :: 多良間 Ce:) ではなく、短母音 (中核 C^ja :: 多良間 Ce) の対応を示す。しかし前節で述べたように、多良間方言では短母音 e は通常 i に上昇するはずである。したがって mm^japi :: mmepi⁹ は、祖語から分岐した後、各方言において長母音 a:, e:

⁹中核宮古語諸方言で、多良間方言 mmepi 「もっと」に対応する一般的な形は nnap^ji-nm^japi である。これは *mn > nn の逆行同化の結果とみられる。同様の変化は琉

が独立に短母音化して a, e となった結果と考えられる。実際、ネフスキー資料（1920 年代）には『南琉球宮古語多良間方言辞典』の mme 「もう」に対応して mmè: が記録されており、遅くとも一世紀前には多良間方言の「もっと」が長母音を保持していたことが確認できる。したがって、「もっと」は後期宮古祖語において長母音 *ɛ: を有し、諸方言分岐後に短母音化が並行的に生じたとする本稿の見解が支持される。

「もっと」の短母音化の原因は、CCVV 型の音節構造をもつ超重音節を回避するという歴史的傾向に求められる。例えば、中核 vv^lamasɪ- :: 多良間 ve:masɪ- 「羨ましい」は、琉球祖語 *urajamasi- に由来することから（第 1 章参照）、*aja > *ɛ: を含む形が予測される。しかし、中核方言では長母音 a: の代わりに短母音 a が現れる。多良間方言は長母音 e: を保持する一方、中核方言の vv に対応して v を反映しており、いずれも超重音節の回避を示唆するものである。さらに、琉球祖語 *kuraw- 「食べる」の *kur- に対して予測される ff が f として現れる事例も、超重音節回避仮説を支持する証拠といえる。

短母音化が生じやすいもう 1 つの環境は語末である。(2) 「左利き」(中核 pɪdar^la :: 多良間 pɪdare) のような *...i-ja# に遡る語がその例である。「未明」や「羨ましい」では、*aja が長母音の *ɛ: に変化するので、同じく通時的に 2 音節に由来する *ija も長母音の *ɛ: に変化したと考えるのが妥当である。

多良間方言の短母音 e は主として語末に現れるが、これは次のよう

球祖語 *mune 「胸」にも観察され、mmi~nni などの形が確認できる。「胸」を mmi という方言では、*mn > mm の順行同化が前舌母音の前で生じている。ただし、後舌母音を伴う *mina 「蝸牛」や *mino 「蓑」の *min にはこの反映は見られない。さらに、沖縄語にも *mn^l > mm の変化が確認される（例：琉球祖語 *mine > *m^lin^le > *mn^le > 現代首里方言 mmi 「嶺」）。このため、*mn > mm の順行同化は沖縄語の影響によるものと考えられる。本文では、音対応を明瞭に示すため、中核宮古語諸方言の nnapi~nn^lapi ではなく、表 4.2 の池間・伊良部方言の mm^lapi を代表形として挙げた。

に説明できる。まず、*e (*εに由来するものも含む) がiへ上昇する。次に、長母音 e: が短母音 e へと変化する。この過程を仮定すると、多良間方言に現れる短母音 e は、二重母音 eo などの例外を除けば、すべて長母音 e: に由来することになる。したがって、多良間方言で母音が e であれば、その祖形として長母音 *e: を再建できる。一方、多良間方言で i が現れる場合は、他の方言に散発的な長母音化が見られても、短母音 *ε が再建される。4.1 節で論じた「糸瓜」がその好例である。

「糸瓜」は中核方言で nab'a:ra であり長母音 a: を含むが、多良間方言の nabira を根拠として短母音 *ε を含む *na^mbera が再建される。借用元となる 15 世紀沖縄語の形は長母音 *e: をもっていたと推定されるが、それが前期宮古祖語には短母音 *ε として借用された。この事実は、前期宮古祖語に長母音が存在しなかったという仮説を支持するものであり、その必然的な帰結として、長母音 *e: は後期宮古祖語において (*ai, *ae, *ei, *aja, *ija から) 新たに生じたと考えられる。

4.4 新しい再建体系による語源の検討

「くしゃみの呪文」

「くしゃみの呪文」(ネフスキー資料の平良方言 kusɨk'a, 多良間 kusɨke:) は、くしゃみをしたときに言う呪文である。ネフスキー資料では、「糞食らえ」の意の沖縄語に比較されている。「糞喰らえ」の意の沖縄語としては、『混効験集』に「くそくはい」、『沖縄語辞典』に kusu k^we: があり、同様にくしゃみをしたときに言う呪文として使われる。しかし、沖縄語 kusu 「糞」、k^wa- 「食べる」に対応する宮古語は fusu, fa- のように f を持

つ。したがって、宮古語の「くしゃみの呪文」は明らかに借用語である。

平良方言と多良間方言の音韻対応 Cja :: Ce を、4.2.2 で論じた語末における短母音化の結果であるとみなせば、中核 Cja :: 多良間 Ce: の音対応 (12) を認めることができ、この音対応から後期宮古祖語に *ɛ: を再建することができる。したがって、「くしゃみの呪文」として後期宮古祖語 *kʊsɪkɛ: が再建される。前半については対応に多少不明な点があるが、後半は 15 世紀沖繩語の *kʷae が前期宮古祖語 *kae として借用された後、*ae > *ɛ: のように変化したものと思われる。

「一人」と「前」

「一人」(中核 tavkʰa:, 多良間 tauke:~tauka:) と「前」(中核 mavkʰa:, 多良間 mauke:~mauka:) は、語頭子音以外は同音である。本稿では、前者の語源を琉球祖語 *puta-mukaw-i 「二人で向かうこと」、後者の語源を琉球祖語 *ma-mukaw-i 「真正面」と考える。後者が *mukaw- の部分を含むという語源説は Bentley (2008: 46) によって提案されたが、*mukaw-i > vkʰa: のような不規則な変化の説明には至らなかった。中核諸方言で「向かう」は ŋkau~ŋko: であり、宮古語における「一人」「前」が琉球祖語からの継承語であれば、鼻音から始まる形が予想されるが、そうっていない。したがって本研究はこれらを借用語とみなす。具体的には、15 世紀沖繩語 (*tamkai, *mamkai) の借用とする。

沖繩語においては、前者は接尾辞 *-ja がついた形式が現代首里方言 taŋka: 「正面」に反映される(沖繩語で *puta- は ta- になる)。後者については、『沖繩語辞典』には見られないが、伊江島方言の maŋke~maŋko 「真正面」に反映されている。また、『沖繩語辞典』に収録されている現

代首里方言 *taŋka:-maŋka:* 「向かい合うさま」の後半が **ma-mukaw-i-ja* を反映する可能性がある。

現代首里方言 *taŋka:* 「正面」は、その語源的な意味から「二人が向かい合うこと」のほうに変化した結果で、本来は *taŋka:-datçi* 「若夫婦の世代」に見るように「二人だけで、他の人はいない」という限定の意味を持っていたと考えられる。宮古語の「一人」という意味は、「二人だけで、他の人はいない」から「他の人はいない」という限定の意味が強くなり、「一人」の意味に至ったと考える。

本研究が再建する琉球祖語 **puta-mukaw-i* の代わりに、**ta-* 「手」を含む **ta-mukaw-i* を再建することも考えられる。しかし、意味的な繋がりが定かではないため、本論文では **puta-mukaw-i* を再建する。

15 世紀沖縄語 **tamkai*, **mamkai* は、前期宮古祖語 **ta^mbukai*, **ma^mbukai* として借用され、後期宮古祖語 **ta^mbβike:*, **ma^mbβike:* を経て現在の形に至る。**mk* が **mbuk* として借用されたのは、恐らく 15 世紀沖縄語の **mk* が [mpk] または [mbk] のように実現していたことを反映していると思われる¹⁰。また、継承語の琉球祖語 **ai* (> a₁) とは違って借用語の **ai* が後期宮古祖語 **ε:* になることは、**i* > **zi* > **zi* > ₁ の再建と整合的である（琉球祖語 **ai* が前期宮古祖語 **azi* に変化した後、15 世紀沖縄語の **ai* が前期宮古祖語 **ai* として借用されたとすることによって、自然に説明できる）(Yun 2025)。

¹⁰ これは子音連結 C_1C_2 の間に C_1 と C_2 の中間的な子音 C_3 を入れる $C_1C_2 > C_1C_3C_2$ のようなパターンの音挿入 (epenthesis) で、ラテン語 *hominem* > スペイン語 *hombre* の変化の過程における *mr* > *mbr* のような例が知られている (Campbell 1999: 34–35)。宮古語の中でも皆愛方言 *mtsu* 「味噌」(セリック 2018) や、平良方言 *fantsa*, 佐良浜方言 *ffantca* 「萱草」(Jarosz 2015: 116, 118) などがこれに似た変化を示しているが、発酵食品である「味噌」や薬として使われた「萱草」の名前は文化語彙であり、借用語の可能性も十分に考えられる。

「昔」と「蜀黍」

「昔」(中核 $\eta k^{\prime}a:\eta$, 多良間 $\eta ke:\eta$) は, 琉球祖語 $*mukasi$ と比較すると, 子音 $*s$ に対応する部分が欠けている. この現象は琉球祖語 $*pi^{\eta}gasi$ 「東」の沖縄語と共通している. Serafim & Shinzato (2020: 172, 357–358) は, 『おもろさうし』に「にしたけ」と対をなす「ひかたけ」(13・955) や, 「にしかない」と対をなす「ひかかない」(20・1344) が見られること, この「ひか」は『沖縄語辞典』の $\phi idzaho$: 「東の方. 農村で多くいう語」の $\phi idza-$ に対応することを指摘している. これは恐らく北琉球の $*ci$ 脱落の結果で, 「昔」「東」は助詞 $*=n^{\prime}i$ 「に」とともに使われることが多かったため, $*ci > \emptyset / V_C^{\prime}$ の影響を受けたと思われる. 「昔」は, 15 世紀沖縄語において $*mka\dot{c}i$, $*mkan^{\prime}$ ($< *muka\dot{c}i$, $*muka\dot{c}i=n^{\prime}i$) のような 2 つの形式を持ち, 前者は現代首里方言の $\eta ka\dot{c}i$ に継承され, 後者は宮古語に反映されているという考え方である.

中核 $k^{\prime}a ::$ 多良間 $ke:$ の対応 (12) からは, 後期宮古祖語 $*\varepsilon:$ が再建される. 15 世紀沖縄語の短母音が後期宮古祖語 $*\varepsilon:$ になることは一見変則的に見えるが, 実はもう一つの例として「蜀黍」がある. 「蜀黍」(ネフスキー資料の平良方言 $upu-gam$ または $jamatu-upu-gam$, 池間 $hu-g^{\prime}a\eta$, 多良間 $upu-ge:m$) は, 琉球祖語 $*kimi$ 「黍」の連濁形 $*-^{\eta}gimi$ 「黍」に対応するものの, 母音の対応からして継承語ではないように見える. 15 世紀沖縄語では $*-^{\eta}gim^{\prime}$ が再建でき (現代首里方言 $ma:dzi\eta$ 「黍」参照), 語末に硬口蓋化鼻音を持つことが $*mkan^{\prime}$ と共通している. 15 世紀沖縄語において硬口蓋化共鳴音は先行母音の音声実現に影響を与えるが, 音節末ではその効果がさらに強く, 母音 $*i$ が介在しているかのように聞こえたのであろう. 「昔」は前期宮古祖語 $*m\{i, u\}kain\{i, u\} >$ 後期宮古祖語

*mikɛ:ni, 「蜀黍」は前期宮古祖語 *opo-^ogiim{i, u}? > *opo-^ogeim{i, u} > 後期宮古祖語 *^opɔ-^ogɛ:mi が再建される (*ii > *ei については, 次節参照).

「商売人」と「勝負」

「商売人」(中核 akⁱa:da, 多良間 akeoda) は, 日本語 akiuⁿdo に由来するはずで, 現代首里方言には ^oatɕo:du, ^oatɕo:da: (後者は前者に接尾辞 *-ja がついた形式) の両方が見られる一方, 宮古語には語末 *o > u を持つ形が見られないので, 宮古語は, 現代首里方言 ^oatɕo:da: に対応する 15 世紀沖縄語 *^oakⁱiuⁿda: を借用していると考えるのが妥当である.

この akⁱa:da :: akeoda のような反映は, 前期宮古祖語 *akiuⁿda > *akeuⁿda > 後期宮古祖語 *akeβiⁿda のような変化を経ていると思われる. 多良間方言は琉球祖語 *keu 「今日」の反映として kiu を持つので, *ε > e になることを考えると, *εu > eo のような反映を示すことは自然である. また, 前節の「蜀黍」の場合と同様に, 前期宮古祖語では, *ii や *iu のような, 同じ広さの母音の連結は許されず, 借用語においてそのような母音連結が生じた場合は, *ei, *εu に変化したという考えなければならない¹¹. 後期宮古祖語 *keβi > 中核諸方言 kⁱa: の変化については, 「勝負」(中核 mⁱa:, 多良間 me:) が参考になる. この語は, 日本語に逐語訳すると「見合い」になる前期宮古祖語 *mijaw-i > 後期宮古祖語 *me:βi に対応するはずであるものの, (恐らく超重音節回避のために) 実際は *me: のような反映を示している. *εβi と *ε:βi の違いはあるが, 「商売人」も「糸瓜」のように中核諸方言で散発的な *ε の長母音化を経験したとする

¹¹ 「蜀黍」や「商売人」は, それぞれその語源からして狭母音の *i を持っていたことが予測されるにも関わらず, 宮古語においては *ε 相当の対応を示すので, その共通の環境を条件として *i が *ε になったと考えることは避けられない.

と、「勝負」と同じように超重音節回避のための末子音脱落で $k^j a:$ になったと説明できる。

「今」系と「母」

「今」系とは、(14) の 3 つの語を言う（祖形は前期宮古祖語，後期宮古祖語の順）。

(14) a. $*m\{i, u\}nama > *minama$ 「今」 > 中核 $nnama$:: 多良間 $nama$

b. $*m\{i, u\}naja > *mine:$ 「もう」 > 中核 $nn^j a$:: 多良間 mme

c. $*m\{i, u\}naepe > *mine:pi$ 「もっと」 > 中核 $nnapi\sim nn^j api$:: 多良間
 $mmepi$

現代首里方言では、それぞれ $nama$, $na:$, $na:~^j i\phi i$ であるが、これらの語は全て琉球祖語の語根 $*ima$ 「今」に由来すると考えられる。

(14a) は、北琉球祖語 $*im^j a$ の畳語 $*im^j a\text{-}im^j a$ からさらに変化した 15 世紀沖繩語 $*mn^j a(m)ma$ の借用である。 $*im^j a\text{-}im^j a$ における 2 番目の $*i$ は、語頭の $*i$ より脱落が遅かったため¹²、それに後続する $*m^j$ は異化的非硬口蓋化の条件を満たし¹³、 $*m$ になっている。

¹²朝鮮資料『語音翻訳』の $mi.na$ 「空っぽ」の例（上述）に見えるように、規則的な狭母音脱落は 15 世紀沖繩語では既に完了している。2 番目の $*i$ は、例えば今帰仁方言 $^j namma$ の語中の m を説明するために必要であるが、この $^j namma$ は $*mn^j amma$ の段階を反映するものである。宮古語の形は散発的に $mm > m$ に変化した $*mn^j ama$ を反映していると言える。

¹³ $*m^j$, $*r^j$ が $i_$ の環境において非硬口蓋化することを本論文では異化的非硬口蓋化 (dissimilatory depalatalization) と呼ぶ。琉球祖語 $*kimo$ 「肝」や $*siro-$ 「白」などが沖繩語において順行硬口蓋化の影響を受けない一方で、 $*ima$ 「今」(Serafim & Shinzato 2020: 57) や $*pasira$ 「柱」はその影響を受けているという矛盾を説明する方法として、 $*i$ が脱落しない限りは順行硬口蓋化の影響が取り消されるが、 $*i$ が脱落すると硬口蓋化は取り消されずに残ると想定する。これによって、上記の「今」「柱」のような例外的な語彙だけではなく、一般的に沖繩語において $*iri$ の $*r$ が硬口蓋化の影響を受けないように見えること、例えば $*tori > tui$ 「鳥」に対して $*kiri > tciri$ 「霧」のように $*r$ が保持されることも説明できるようになる。

(14b) は 15 世紀沖繩語 *^ʔmn^ʰa=ja 「今は」、(14c) は *^ʔmn^ʰa=^ʔepe 「今少し」に対応する。子音の対応 nn :: mm については、注 7 を参照されたい。また、(14a) の nn :: n は、「命」(中核 nnuts₁ :: 多良間 nuts₁) と同様の対応である。

後期宮古祖語 *min が再建される借用語には、「今」系の他に「母」(中核 anna, 多良間 anna) がある。この語は、現代首里方言 ^ʔamma: との比較から、15 世紀沖繩語 *^ʔamn^ʰa の借用と考えられる(前期宮古祖語 *am^ʰi, u^ʰna > 後期宮古祖語 *amina) ¹⁴。

「山羊」

「山羊」(中核 pindza, 多良間 pinda) は、現代首里方言 ϕ i:dza: と同根であるが、 ϕ i:dza: は『語音翻訳』に pi.co.cya /pits^ʰtsja/ として在証されるため、日本語 fitu^ʰzi 「羊」と同根の琉球祖語 *petsu^ʰdzi に *-ja がついた形式に由来すると思われる。したがって、*tsu の脱落(*petsu^ʰdzi + *-ja > *petsu^ʰdza: > *peddza: ? > *pe: dza:) は沖繩語(首里方言)の改新で、宮古語の形式は借用語ということになる。

*tsu 脱落の原因は定かではないが、脱落の中間段階が前期宮古祖語 *peu^ʰdza として借用されたとすると、後期宮古祖語 *pɪβi^ʰdza を経て

¹⁴女性神職の名称に見える *amu 「阿母」(首里方言 ^ʔancirari < *amu-sirare など参照) は、上代日本語 omo, amo との比較から語源的な意味は「母」と考えられ、*^ʔamn^ʰa は琉球祖語 *amu の 15 世紀沖繩語反映 *^ʔam に指小接尾辞 *-ja がついた *^ʔam-ja から順行同化が起こった形と考える。それを支持する証拠として、首里方言の土族言葉 ^ʔaja: 「母上」の存在があり、これは土族の言葉では先述の *-ja > *-n^ʰa 順行同化が生じた形が好まれなかったが、そのような変化の動機である *m^ʰj の不自然さを解消する必要があったため、代わりに *m を脱落させたものとして説明できる。現代の語形 ^ʔamma:, ^ʔaja: は、以上の説明によって予測される †^ʔamma, †^ʔaja に比べて最終音節が長いが、これは指小接尾辞 *-ja がついていることが音変化によって不透明(etymologically opaque)になったので、さらに *-ja をつけている形である。また、沖繩語における *mn^ʰ > mm の反映は、*mine > *m^ʰin^ʰe > mmi 「峰」の例に見るように、規則的な音変化の結果である。

pindza :: pinda になる¹⁵。15世紀沖繩語の母音 *a(:) は、硬口蓋化子音に隣接する場合は表 4.1 のように前期宮古祖語 *æ として借用されることもあるが、15世紀沖繩語 *ʔatça 「明日」と前期宮古祖語 *atsa の対応から確認できるように、硬口蓋化破擦音に後続する *a(:) は *æ ではなく *a として借用されると考えられる。また、多良間方言では *atsa > ata 同様に規則的な非破擦化が生じている。

Bentley (2008: 263) は、八重山語諸方言の形（石垣方言 pibidza など）との比較によって南琉球祖語（Proto-Sakishima）*pe^mbeza を再建しているが、この語が琉球祖語 *petsuⁿdzi に由来することを考えると、子音 *b の説明が難しい。本稿では、他の南琉球諸語の形を後期宮古祖語からの借用とし、b を *β の適応と考える¹⁶。

ローレンス (2019: 104) は、琉球祖語 *pipiza 「山羊」（本論文の表記では *pipiⁿdza に相当）の再建を提案しているが、上述の『語音翻訳』の形を考慮すると、そのような再建は難しい。ローレンス (2019) が *pipiza 再建の証拠として挙げている伊江島方言の titizja は、首里方言において *tsu が脱落する過渡的な段階（例えば上記の *peddza:）を反映する借用語であろう。

¹⁵音の変化に関しては、この語に似た後期宮古祖語 *iⁿdza > ndza を示す琉球祖語 *iⁿdzuma > 平良など複数方言の ndza 「どこ」を参照。

¹⁶前期宮古祖語 *Vu から変化した後期宮古祖語 *Vβi の *βi が bi のように聞こえたことを裏付けるものとして、『栄河氏家譜』に記された宮古上布の美称「あやさひ布」（綾錆布）がある。「上」の漢字音に由来する形容詞 dzo:- 「良い」は、前期宮古祖語 *ⁿdzau->後期宮古祖語 *ⁿdzaβi- に遡る。「錆布」は「上布」の後期宮古祖語 *ⁿdzaβipβi の発音を「ざびふ」とした（非宮古語話者による、または意図的な）当て字の可能性が考えられる。

4.5 母音 *ɔ: と *ɔ の再建

本稿で再建する母音 *ɛ は、主として 15 世紀沖繩語の第 2 音節 *e に対応し、これは 15 世紀沖繩語の音声実現を忠実に反映するものと考えられる。*e が [ɛ] の異音を持つような言語体系では、*o も [ɔ] の異音を持っていた可能性が高く、前期宮古祖語にもそれを借用した *ɔ が存在した可能性もある。しかし、中核諸方言で先行子音の硬口蓋化という痕跡を残す *ɛ とは違って、*ɔ はもし存在したとしても痕跡を残さず他の母音に合流した可能性が高く、再建が難しい。15 世紀沖繩語の *o に対して特殊な反映を示す借用語として多良間方言 itɕafu 「いところ」(15 世紀沖繩語 *itɕoku) があるが、現時点では散発的な母音変化の可能性が排除できない。

また、3 音節以上の語において前期宮古祖語 *aja, *ija が後期宮古祖語 *e: になったように、*awa, *owa, *oja は *ɔ: になった可能性がある。中核諸方言では ffa-jo:m 「闇」(< *pɸiɾ a-jo:mi < *kura-jo-jami) や jo:ɾ 「祝い」(< *jo:zi < *jowazi) のように o: の反映、多良間方言では e: が見られる語が多い (me:s- 「燃やす」, e:tsɪbɪ 「泡」, e:bɪ 「鮑」, e:m 「闇」)。特に、多良間方言で 2 音節の *awa 「粟」(> a:) と 3 音節以上の *awa-tsubu, *awabi (> e:tsɪbɪ, e:bɪ) の反映が異なるのは、後期宮古祖語 *ɔ: の証拠としてとらえることもできる。これについては、今後更なる研究が求められる。

4.6 後期宮古祖語から八重山語・与那国語へ

本稿で 15 世紀沖繩語からの借用語としている語の一部は、他の南琉球諸語 (八重山語・与那国語) にもそれに似た形式が見られる。これは、

他の南琉球諸語が独立的に沖縄語から借用した可能性もあるが、後期宮古祖語から借用した可能性もある。

その一つである「山羊」については本章で既に論じた。また、「昔」は、セリック (2020: 20) によって八重山語石垣方言 *mikken* との類似が指摘されているが、*mi* の部分は琉球祖語 **mukasi* の **mu* とは一致せず、後期宮古祖語 **mikɛ:ni* の **mi* に似ているように思える。八重山語・与那国語の中の借用語を検討する研究が必要である。

4.7 宮古祖語の母音目録

本章の議論から、本論文で再建する前期宮古祖語の母音目録は表 4.3、後期宮古祖語の母音目録は表 4.4 のようである。

表 4.3: 前期宮古祖語の母音目録

<i>*i</i>	<i>*u</i>
<i>*e</i>	<i>*o</i>
<i>*ɛ</i>	<i>*ɔ</i>
<i>*æ</i>	<i>*a</i>

表 4.4: 後期宮古祖語の母音目録

	<i>*i</i>
<i>*ɪ</i>	<i>*ʊ</i>
<i>*ɛ</i>	<i>*ɔ</i>
<i>*æ</i>	<i>*a</i>

先行研究との違いは、本章の議論によって新しく再建された母音 **ɛ*, **ɔ*, **æ* が加わっていることである。後期宮古祖語においては、琉球祖語および前期宮古祖語の中段母音 **e*, **o*, そして現代宮古語の多くの方言

で狭母音 *i, u* に当たる母音をそれぞれ **i, *u* としているが、これには三つの理由がある。一つは、表記上の理由として、もし **e, *o* から変化した母音を **i, *u* と書くと、琉球祖語および前期宮古祖語の **i, *u* (> 後期宮古祖語 **i*) との混乱が生じうるので、それを防ぐためである。二つ目は、後期宮古祖語の **i* は後に脱落する傾向にあるが、**i, *u* はそうではないことから、**i* を最も狭い母音に設定し、**i, *u* をそれより少し広い母音に設定することにより、以降の変化をわかりやすくするためである。最後の理由は、*/u/* が *[u]* のように実現される伊良部方言の例 (Shimoji 2008: 40) に見るように、現代においてもこの **i, *u* に対応する母音が完全なる狭母音として実現されない方言が存在するためである。

後期宮古祖語における前期宮古祖語中段母音は、全ての方言で上昇した（より狭母音に近づいた）反映が見られるので、後期宮古祖語の段階である程度の上昇を認めるのが経済的である。一方で、全ての方言で狭母音になっているわけではないので、後期宮古祖語の段階で狭母音に達したと断定することはできない。琉球祖語および前期宮古祖語の中段母音 **e, *o* から変化した母音の表記を中段母音と狭母音の中間の **i, *u* にすることによって、現代宮古語諸方言のデータを適切に反映すると同時に、表記上の混乱を防ぎ、後の音変化に関してもより整合的な説明を与えることが可能になる。

第Ⅱ部

宮古祖語を超えて

第5章

琉球祖語と古代九州基層仮説

本章の議論は、日本言語学会第171回大会にて発表した内容をもとに、大幅な修正を加えたものである。

第I部で述べたように、宮古語の語源や音変化の歴史を考える際には、特定の語が継承語なのか借用語なのかを見極めることが極めて重要である。この点は琉球祖語についても同様である。

このことを理解するためには、琉球祖語における「渋い」「言葉」「苦瓜」「朝食」を検討することが有益である。「渋い」「言葉」「苦瓜」「朝食」の琉球祖語形としては、*si^mburi, *monowi, *^ŋgaori-ja, *asewi が再建される。

(1)に示すように、これらの語は、語源的に語根境界を挟んで母音が連続する複合語に由来すると考えられるが、その母音連続が琉球祖語においてどのように反映されるかは語ごとに異なっている。これは、各語が異なる音変化の規則を経験していることを示すものであり、すなわち由来が一様ではなく、一部には借用語が含まれている可能性を強く示唆

する。

- (1) a. *si^mbu- 「渋い」 + *ori 「瓜」 = 琉球祖語 *si^mburi 「冬瓜」
- b. *mono 「物」 + *{i, e}w-i 「言う-NMLZ」 = 琉球祖語 *monowi 「言葉」
- c. *ⁿga- (< *niⁿga- 「苦い」) + *ori 「瓜」 = 琉球祖語 *ⁿgaori-ja 「苦瓜-DIM」
- d. *asa 「朝」 + *iwi 「飯」 = 琉球祖語 *asewi 「朝食」

(1) の語の母音連続に生じた音変化は (2) のように異なる。

- (2) a. (1a), (1b) : $V_1V_2 > V_1$ (第 1 母音を残して第 2 母音を削除)
- b. (1c) : $V_1V_2 > V_1V_2$ (両方の母音を保持)
- c. (1d) : $V_1V_2 > V_3$ (別の母音に融合)

とりわけ、(1c) は琉球諸語が現代九州方言と共有する語彙の一例であること (野原 1981), (1d) の母音融合は上代日本語にも確認される現象であることが注目される。これらを踏まえると、(1c) は九州方言からの借用語、(1d) は日琉祖語段階ですでに存在した複合語の継承語、そして (1ab) は琉球祖語において新たに形成された複合語であると解釈できる。

本章では、上記のように語によって異なる音変化を示す事実に基づき、琉球祖語の語彙の一部は、かつて存在した日琉系の一方言からの借用によるものである、という仮説を提案する。

5.1 *o の三重反映

琉球祖語における「孫」「男」「(女兄弟から見た) 男兄弟」「女」「(男兄弟から見た) 女兄弟」は、それぞれ *uma^ŋga, *weke^ŋga, *wekeri, *wena^ŋgo, *wonari が再建できる。

(3) に示すように、これらの語には日本語との対応に不規則性が見られるもの、対応する日本語が直ちに特定できないもの、あるいは語源が直ちに特定できないものがある。

- (3) a. *uma^ŋga 「孫」 (cf. 日本語 uma^ŋgo 「孫」)
- b. *weke^ŋga 「男」 (cf. 日本語 wotoko 「男」)
- c. *wekeri 「男兄弟」
- d. *wena^ŋgo 「女」 (cf. 日本語 wonna 「女」)
- e. *wonari 「女兄弟」

*uma^ŋga 「孫」(3a) と *weke^ŋga 「男」(3b) の *^ŋga の部分は、*wena^ŋgo 「女」(3d) の *^ŋgo と対応するように見えるが、母音が一致しないという問題がある。同じく、*wena^ŋgo 「女」(3d) の *wena の部分は、*wonari 「女兄弟」(3e) の *wona の部分と対応するように見えるが、母音が一致しないという問題がある。

母音の不一致が説明されるのであれば、その意味と形式の類似性から、琉球祖語の *^ŋga (3ab) と *^ŋgo (3d) は日本語の ko 「子」の連濁形 ^ŋgo と同源であり、琉球祖語の *wena (3d) と *wona (3e) は、村山 (1981: 164–169) の指摘の通り、日本語 wonna 「女」と同源とみなして差し支えないだろう。それに対して、琉球祖語 *weke^ŋga 「男」(3d) と

*wekeri 「男兄弟」(3c) の *weke の部分は、意味の上では日本語 wotoko 「男」との関係が示唆されるが、形式の差異が著しい。

母音の不一致の問題を解決する手がかりは、琉球祖語の *wena, *wona の部分と同源と思われる日本語 wonna の語史にある。日本語の wonna は、上代日本語 womina から第2音節の母音が散発的に脱落したことによる改新とされる。琉球祖語の分岐年代は上代日本語の時代より前と推定されている (Pellard 2015) ので、上代以降に日本語に生じた散発的変化を琉球祖語が共有しているように見える事実は、借用を仮定することでもっとも合理的に説明できる。

そこで本論文は、(3) の語はすべて借用語であり、その借用元は、かつて存在した日琉系言語の一方言（以下「借用元方言」）であり、借用元方言の韻律体系に起因して借用元方言の *o が琉球祖語の *e~*a~*o として借用されたとする仮説を提案する。本章では、借用元方言の *o が琉球祖語の *e~*a~*o として反映することを「三重反映 (triple reflex)」と称する。

本稿では、(3) の語について、借用元方言の語形として (4) を再建する。

- (4) a. 琉球祖語 *umaⁿga 「孫」 ← 借用元方言 *umaⁿgo
 b. 琉球祖語 *wekeⁿga 「男」 ← 借用元方言 *wokoⁿgo
 c. 琉球祖語 *wekeri 「男兄弟」 ← 借用元方言 *wokori
 d. 琉球祖語 *wenaⁿgo 「女」 ← 借用元方言 *wonaⁿgo
 e. 琉球祖語 *wonari 「女兄弟」 ← 借用元方言 *wonari

(4ab) の *ga の部分, (4d) の *go の部分については, 日本語の go 「子」との対応から, 借用語元方言に *go を再建する. (4a) *uma^oga 「孫」については日本語との対応から *uma^ogo を再建する. (4d) の wena の部分, (4e) の *wona の部分については, 日本語の wonna との対応から *wona を暫定的に再建する.

(4bd) の *weke の部分については, 上代日本語 wokê 「顕宗天皇の名, 袁祁」と同源とするセリック (2022b) の説がある. wokê は同じく上代日本語 okê 「顕宗天皇の兄の仁賢天皇の名, 意祁」と対をなすことから, wo と kê からなる複合語と分析できる. セリック (2022b) は kê は日琉祖語の *ki 「男」に接尾辞 -a の付いた形 *ki-a の反映とみる. この *ki 「男」は, (蜂矢 2007) の解釈によると, 上代日本語の omîna 「年老いた女」の対義語の okîna 「年老いた男」や, kamuromi 「女神名」の対義語の kamuroki 「男神名」に含まれる kî 「男」に在証される.

しかし, 本研究では仮説的な古い形式の保持を想定せず, 代わりに *weke の部分を日本語 wotoko 「男」と同源とみなし, 日本語の wotoko に対応する語形が 2 音節に縮約した *woko を借用元方言に再建する¹. これは「女」の形式が改新的なものであるため, 「男」が「男」の意味で直接的に在証されないような非常に古い語根に由来すると考えるよりは, 「女」と同時期の形式に由来すると考えるのが妥当という判断の結果である.

借用元方言から琉球祖語に借用されたときに生じる変化を X→Y の形で表すと, (5) に示すような分布の偏りが観察されることが注目される.

¹この縮約は借用元方言において wonna との類推によって生じたと考える.

- (5) a. *o → *a は語末に限られる
- b. *o → *e は語末以外に限られる
- c. *o → *e は一つの語で複数回現れうる
- d. *o → *e と *o → *a は1つの語で共存可能
- e. *o → *o と *o → *a は共存不可能

このような母音の分布を説明するために、本論文は借用元方言に、語が正確に1つの母音に特殊な指定をもつ韻律体系を再建する。この指定は、Hyman (2006) が強勢 (stress) を持つ体系が同時に満たせねばならないとする要件である *culminativity* (すべての語彙語は最大で1つの卓立を持つ) と *obligatoriness* (すべての語彙語は最小で1つの卓立を持つ) を満たすので、本論文ではこの指定を強勢とみなす。強勢母音を \acute{V} 、非強勢母音を \grave{V} と書くならば、(7) のような仮説を立てることができる。

- (6) a. 語末の *ó → *a
- b. 語末の *ò → *o
- c. 非語末の *ó → *o
- d. 非語末の *ò → *e

語末以外の *ò が *e として反映されることも、*ò が [ə] のように弱化した実現を持っていたとすれば説明できる。

借用元方言における (4) の5語の強勢の位置は、(7) のように再建される。以下、強勢母音のみ \acute{V} で表し、非強勢母音を表す \grave{V} の表記は用いない。

- (7) a. 琉球祖語 *umaⁿga 「孫」 ← 借用元方言 *umaⁿgó [umaⁿgó]
 b. 琉球祖語 *wekeⁿga 「男」 ← 借用元方言 *wokoⁿgó [wəkəⁿgó]
 c. 琉球祖語 *wekeri 「男兄弟」 ← 借用元方言 *wokorí [wəkərí]
 d. 琉球祖語 *wenaⁿgo 「女」 ← 借用元方言 *wonáⁿgo [wənáⁿgo]
 e. 琉球祖語 *wonari 「女兄弟」 ← 借用元方言 *wónari [wónari]

この仮説では、語末の琉球祖語 *a ← *o や、非語末の琉球祖語 *o ← *o は、借用元方言においてその音節に強勢があったことを意味する。(7c) は、最終音節以外の全ての音節で *e ← *o になっているので、消去法によって第3音節に強勢があったはずである。(3d) は、第1音節の *e ← *o と第3音節の *o ← *o から、消去法によって第2音節に強勢があったということになる。

5.2 強勢の位置について

琉球祖語 *wekeⁿga, *wekeri のように、語末音節に複数の *e を持つ語に *ekera- 「少ない」がある。第4章で論じたように、琉球祖語には *ekera- 「少ない」を再建することができる。

- (8) 琉球祖語 *ekera- 「少ない」 > 首里 ?ikira- (cf. 前期宮古祖語 *ekera-)

*ekera- 「少ない」が借用元方言からの借用であると仮定すると、その非語末の *e は、(6d) により、借用元方言では *o であったことになる。したがって借用元方言の「少ない」として *okora- のような形式が想定

されるが、この形式は日本語 *sukuna-*「少ない」（上代日本語 *sukuna-*）に似ている。

上代日本語の *u* は、日琉祖語 **u* だけでなく **o* にも遡ることが知られている（服部 1978–1979）。日琉祖語の **o* は、主として、上代日本語の *u* が琉球祖語の **u* だけでなく **o* にも対応する事実から再建された母音であり、上代日本語は **o > u* の変化を経験したという見解が広く受け入れられている。この変化は *mid-vowel raising* (MVR) と呼ばれ (Frellesvig & Whitman 2004)、上代日本語と現代の日本語諸方言が共有しているが、琉球祖語や上代の東日本の方言（上代東国語）は共有していないとされる (Pellard 2013)。したがって日琉祖語の「少ない」は **sokona-* であったと想定することは妥当である。

日琉祖語の「少ない」を **sokona-* と再建すると、MVR を経験した方言群（上代日本語を含むもので、ここでは便宜的に「中央語」と呼ぶ）では、**sokona-* は MVR によって *sukuna-* となる。それに対して、借用元方言は MVR を経験しなかった方言であると仮定してみよう。すなわち、借用元方言は、中央語（上代日本語や現代の日本語諸方言が属する言語群）とは系統を異にする日琉系方言であるとする仮定である。このように仮定すると、日琉祖語の **sokona-* は借用元方言では **sokona-* として反映されることになる。この借用元方言では **sokona-*「少ない」が琉球祖語に借用されると、借用元方言の非語末の **o* が琉球祖語には **e* と反映するという規則 (6d) により、琉球祖語の「少ない」の第1・第2音節の母音は **e* となるので、琉球祖語に予測される形は **sekena-* となる。この形は、琉球諸語の比較によって再建される **ekera-* と類似しているが、なお、語頭の子音と第3音節の子音が一致しないという問題が残る。したがってこの不一致を説明する必要性が生じる。

まず、語頭の子音の不一致という問題は、借用元方言において *s が弱化した実現（たとえば [h]）を有しており、その弱化した *s が琉球祖語で \emptyset として借用された (*s \rightarrow * \emptyset) と仮定することで解消される。実際に、琉球祖語には、対応する日本語には語頭に s があるにもかかわらず、*s を持たない語が、*ekera- 「少ない」のほかに少なくとも 2 つある。琉球祖語の *e^mba- 「狭い」（首里方言 'iba- など）と *o- 「中称の指示詞」（首里方言 'uri など）である。「狭い」は、*s に遡る語頭子音を持つ形式も存在するが（例えば首里方言 ciba-）、*e^mba- 系と *se^mba- 系は二重語をなしているため、後者を日本語からの、比較的最近の借用とし、前者を琉球祖語まで遡るものとするのが妥当であろう。

琉球祖語の「狭い」と「中称の指示詞」が借用元方言からの借用語であると仮定すると、(9) のような借用の仮定が想定される。

(9) a. 琉球祖語 *e^mba- 「狭い」 ← 借用元方言 *se^mba- [he^mba]

b. 琉球祖語 *o- 「指示詞」 ← 借用元方言 *so- [ho]

次に第 3 音節の子音が *n ではなく *r として反映されている問題であるが、これは借用元方言の *n が琉球祖語で *r として借用されたと想定することで解消される。この *n \rightarrow *r という想定は、*wekeri 「男兄弟」(7c)、*wonari 「女兄弟」(7e) の *ri の部分を、日本語 ani 「兄」と同源にすることができるという利点がある。*ani の第 1 音節の母音 *a は、琉球祖語における複合語に適用される音変化 $V_1V_2 > V_1(2)$ によって削除される。

しかし、*n \rightarrow *r の仮定は *wena^ogo 「女」(7d) と *wonari 「女兄弟」(7e) において、借用元方言の *n が *n で反映している事実と矛盾してしまうという問題がある。しかし、この *wena-, *wona の部分は、wonna (< womina) に対応することを踏まえれば、借用元方言においても *n では

なく *nn を持っていたと想定すれば解決される。このように、*n → *r を想定することによって「男兄弟」「女」「女兄弟」に関して (10) のような借用の過程を想定することができるようになる。

(10) a. 琉球祖語 *wekeri 「男兄弟」 ← 借用元方言 *woko-(a)ni

b. 琉球祖語 *wenaⁿgo 「女」 ← 借用元方言 *wonná-ⁿgo

c. 琉球祖語 *wonari 「女兄弟」 ← 借用元方言 *wónna-(a)ni

以上のように、*s → *∅ と *n → *r を仮定することで、琉球祖語 *ekera- 「少ない」は、借用元方言 *sokona- の借用であると解釈することができる (11)。

(11) 琉球祖語 *ekera- 「少ない」 ← 借用元方言 *sokona- [həkōna]

借用元方言 *sokona- の強勢の位置に関しては、借用元方言の第 1・第 2 音節の *o が琉球祖語で *e に反映しているため、強勢はこの位置にはなかったことになる。しかし、(7c) の場合とは違って、消去法で第 3 音節に強勢があったとすることはできない。なぜなら、*sokona- は活用語であり、活用語は活用語尾に強勢があった可能性があるからである。

また、本論文では借用元方言に *nn を再建したが (10)、このことは、借用元方言では音節末鼻音が許容されることを含意する。音節末鼻音が許容されるのであれば、*ⁿg を *n.g と解釈することができるようになる。借用元方言において開音節は 1 モーラ、閉音節は 2 モーラだったとすると、非語末強勢を持つ語（例えば *wonná-ngo）は後ろから 3 番目のモーラを持つ音節に強勢があったということになる。借用元方言における音節末鼻音が琉球祖語で脱落し前鼻音を伴う有声阻害音として反

映される例としては、漢語 *tendau* 「天道」からの借用とみなされている **teⁿda* 「太陽」(服部 1978–1979)がある。また、琉球祖語の **naⁿda* 「涙」もまた借用語であり、借用元方言で *namida* 「涙」の第2音節の母音が脱落した **namda* あるいは **nanda* の形式が琉球祖語に借用され、琉球祖語で音節末鼻音が脱落した結果、**naⁿda* となったと解釈することができる。

5.3 借用元方言についての考察

本節では、「借用元方言」として言及してきた方言は、九州にかつて存在した日琉系の一方言であるであるという仮説を提案する。

借用元方言の特徴として **s* の弱化があるが、琉球祖語には似たような子音弱化を反映している語がある。それは「唇」と「朝」である。琉球祖語の「唇」と「朝」にはそれぞれ **su^mba* と **sutomete* が再建される。

興味深いことに、琉球祖語 **su^mba* 「唇」と **sutomete* 「朝」は、**s* の代わりに破擦音を持つ日本語の語と対応することが知られている。

(12) a. 琉球祖語 **su^mba* 「唇」(cf. 現代九州北部方言 *tsuba*)

b. 琉球祖語 **sutomete* 「朝」(cf. 日本語 *tsutomete*)

借用元方言では、摩擦音 **s* が弱化しているので、連鎖的な変化として [s] の空き間を埋める連鎖的な変化として破擦音の弱化を想定することは合理的であろう。すなわち、借用元方言において **tu*, **ti* の子音は破擦音 [ts], [tɕ] で実現されていたと仮定し、この破擦音が連鎖的に弱化して [s] になったと想定する。この想定に基づき、借用元言語に **tu^mba* [*su^mba*] 「唇」、**tsutomete* [*sutomete*] 「朝」を再建する。これらの語の母

音が琉球祖語において(12)のように反映されることは、借用元方言における強勢配置の規則と矛盾しない。

tsuba「唇」は現在の日本列島において九州北部を中心とした地域に局所的に観察されることが注目される。『日本言語地図』第「116 図」によると、tsuba「唇」は tuba とともに、宮崎県南部と鹿児島県を除いた九州全土に見られる。また kutçitsuba の形で山口県東部にもみられる。宮崎県南部と鹿児島県には、琉球祖語として再建される *su^mba「唇」と一致する suba「唇」が一様に見られる。古代においても tsuba「唇」が九州周辺にのみ分布していると仮定できるのならば、借用元方言として古代九州の一方言を仮定することが可能となる。

しかしながら、現代日本語諸方言の tsuba~suba については、上代日本語の sipabuk-「咳をする」に見られる sipa- と同源とする説がある（『時代別国語大辞典』：364）。もしこの語源説が正しければ、過去においても tsuba~suba が九州周辺のみ分布していたことを想定するのが難しくなる。しかし、五十嵐(2022)が指摘するように、suba と sipa は分節音の対応や意味の対応が不完全であるため、同源とみなすのは難しい。Martin(1987: 753)は sipabuk-「咳をする」の sipa の意味を「唇」ではなく「痰」とみなしている。

一方で、院政期日本語には sufabur-「しゃぶる」が見られ、それを構成する sufa- は現代九州の suba「唇」によく似ている。さらに『日本方言大辞典』には、sufabur-「しゃぶる」と語根を共有していると思われる suwabur-, subabur-, subakur-「しゃぶる、なめる」が現代の四国地方に見つかる（『日本方言大辞典』：1272）。現代四国の subabur- を構成する suba- は現代九州の suba「唇」と意味も音もよく似ている。しかし、五十嵐(2022)が指摘するように、院政期日本語 sufabur-「しゃぶる」と現

代九州の *tsuba*, *suba* 「唇」はアクセントが一致しないため、同源ではないと考えられる。五十嵐 (2022) は院政期日本語 *sufabur-* の *sufa-* は **sup-* 「吸う」と同根とし、現代九州の *tsuba-suba* は **tu* 「唾」（上代日本語 *tu* 「唾」, *tupasiru* 「唾」, 院政期日本語 *tu* 「唾」, *tufaki* 「唾」と同源と見ている。

以上から、琉球祖語が *tsuba* を借用した時代において、*tsuba* 「唇」が九州周辺以外の地域に広く分布していたことを示す有力な証拠は存在しないといえることができる。したがって、琉球祖語が *tsuba* 等を借用した言語は、九州で用いられていた日琉系言語の一方言とみなすことは合理的である。

現代においてはこの借用元方言は用いられていないので、現代九州諸方言は、古代九州で用いられていた借用元方言を基層とした、借用元方言とは異系統の方言ということになる。本論文では、この借用元方言を「古代九州基層方言」と呼び、この言語から琉球祖語への借用を仮定する仮説を「古代九州基層仮説」と呼称する。

借用元方言が現代九州方言の基層の1つであるという推定は、借用元方言の強勢配置の規則（語末から1~3番目のモーラ）が九州南部方言の卓立の配置に似ているという点によっても支持されるかもしれない。九州南部の現代鹿児島方言は、A型・B型と慣習的に呼ばれる2種類の韻律型を区別する「二型アクセント」体系であり、語末、あるいは語に任意個の助詞が付いた単位の末尾から数えて、A型では2番目の、Bで型は1番目の音節に卓立が現れる（木部 2000; Kubozono 2012）。ただし、九州西部（佐賀県、長崎県など）の「二型アクセント」体系では、A型の卓立の位置は語頭から計算され、九州南部の末尾から数える体系は改新であるとする見解が広く受け入れられている（上野 2012）。また、18

世紀の鹿児島方言のロシア語資料（いわゆる「ゴンザ資料」）では、当時の鹿児島の一方言の体系が、語頭から数える体系であったことが明らかにされており、語頭から数える体系から末尾から数える体系への変化は18世紀以降であるとする見解もある（木部 2000）。

強勢配置が語尾から計算される古代九州基層方言の体系と同様の特徴を持つ九州南部の体系の類似性が、琉球祖語が古代九州基層方言から借用を行った時代にまでさかのぼるものかどうかを明らかにすることは今後の課題となるが、現代の九州西南部の方言が、古代九州基層方言と同様に、強勢に似た体系を持つことは注目に値する。近年の研究は、Hyman (2006) が強勢を持つ体系が同時に満たさねばならないとする *culminativity* 要件と *obligatoriness* 要件を同時に満たす体系が、九州西南部の方言、具体的には鹿児島方言 (Igarashi forthcoming), 長崎方言 (Matsuura forthcoming), 八代方言 (Yamada forthcoming), 小林方言 (Sato forthcoming) に分布していることを報告している。この類似性は、借用元方言が現代九州方言の基層の1つであるという推定を支持しうるだろう。

琉球祖語が九州で用いられていた日琉系の言語と接触していたとする説は、すでに Pellard (2015) によって提案されている。琉球祖語の分岐年代は7世紀以前と推定されているが（服部 1978–1979）, Pellard (2015) は考古学的証拠に基づき、日琉祖語の話者が琉球列島に移住したのは10～11世紀以降であると推定し、琉球祖語は話者の移住以前には日本本土、おそらく九州で用いられていたと推定している。さらに Pellard (2015) は、琉球祖語にいくつかの漢語が再建される点に注目する。これらの漢語は中国語ではなく日本語の漢語と音対応を示すこと、日本語への本格的な漢語借用が8～9世紀に始まったこと、そして琉球祖語の

漢語が13～15世紀に中世日本語（Late Middle Japanese）に生じた音変化（au > ɔ:）を経験していないことに基づいて、8～9世紀から10～11世紀の間に琉球祖語は日本語と接触しており、その過程で漢語を借用したと主張している。

Pellard (2015)の説は、古代九州において琉球祖語が日琉系の言語と接触していたとする点で、本論文が提案する古代九州基層仮説と一致する。しかし、仮定される九州の日琉系言語の系統は両者で異なる。Pellard (2015)の系統樹は、琉球列島で用いられる琉球諸語と、日本本土で用いられる「日本語」とを最初の分岐において姉妹関係に置くものであること、さらに借用元言語を単に「日本語」(Japanese)と呼んでいることから、Pellardが想定する借用元言語はMVRを経験した言語、すなわち本章でいう「中央語」であると考えられる。これに対して、本論文が借用元言語とする古代九州基層語は、MVRを経験した中央語とも琉球諸語とも異なる系統に属する。言い換えれば、本論文の仮説は、10～11世紀までに九州で琉球祖語と接触していた言語を、中央語とは別系統の日琉系言語とみなす点で、Pellardの説と異なる。

本論文の古代九州基層仮説には、漢語借用の問題に関して解決すべき課題が残されている。琉球祖語に再建される漢語のなかには*sを含むものが存在する。Pellard (2015)が再建する*s'aug^watu「正月」はその一例である。この語については、口蓋化子音（いわゆる拗音）や唇音化子音（いわゆる合拗音）を琉球祖語に再建できるかどうかという問題と併せて検討する必要がある。もしこれらの音が琉球祖語に再建できなければ、「正月」は琉球祖語より後の段階での借用語とみなすことができる。

しかしながら、そのように解釈しても、琉球祖語に*sを再建せざ

るを得ない漢語が存在する。例えば、琉球祖語 *seⁿdo 「船頭」は漢語 *sendou 「船頭」の借用と考えられる。この語は、*tendau 「天道」に由来する琉球祖語 *teⁿda 「太陽」と同様に、借用元における音節末鼻音が脱落し、前鼻音を伴う有声阻害音として反映される点を共有している。このことから、「船頭」は琉球祖語の段階で借用された古い借用語とみなすのが妥当である。ところが、もし琉球祖語が古代九州基層語から *sendou を借用したのであれば、*s の脱落した †eⁿdo が予測されるはずであり、実際の形式と一致しない。

琉球祖語の借用元を古代九州基層語に限定する本論文の仮説を維持するのであれば、*s を保持する琉球祖語の漢語については次の2つの仮説が考えられる。第一に、語種によって音変化が異なった可能性である。すなわち、古代九州基層語においては、漢語に限って *s の弱化が生じなかったとする仮説である。第二に、音変化と借用の年代差を仮定する可能性である。すなわち、古代九州基層語で *s の弱化が完了した後に *s を含む漢語が古代九州基層語へ借用され、その形がさらに琉球祖語によって借用されたとする仮説である。

いずれにせよ、琉球祖語の借用語における *s の扱いは、古代九州基層仮説を検証するうえで重要な課題であり、今後さらなる検討を要する。

九州方言と琉球諸語との関係は、20世紀初頭の伊波(1911)の研究以来、今日に至るまで継続的に議論されてきた課題であり、本章もその流れに位置づけられる。そのため、現代九州方言と琉球諸語との系統的關係についてここで整理しておく必要がある。

Pellard (2015) は、現代九州方言を中央語に属するものと位置づけ、九州で話されていた琉球祖語は痕跡を残さず消失したとする。同様に

Jarosz (2004) and Jarosz et al. (2022) も、九州方言を中央語に属するとしつつ、琉球祖語がその基層をなしており、現代九州方言には基層言語としての琉球祖語の形質が残存すると主張している。ペラール (2021) は、五十嵐 (2018) and 五十嵐 (2021) への反論の中で自身の従来説を修正し、現代九州方言は琉球祖語を基層とする中央語であり、その痕跡が認められると述べている。

これに対し、服部 (1976), 五十嵐 (2018), 五十嵐 (2021), 五十嵐 (2023), 狩俣 (2020), and Boer (2020) は、九州方言と琉球祖語に共通する音変化や語彙・文法の改新に基づき、現代九州方言は中央語の強い影響を受けつつも、琉球祖語と単系統をなすとする見解を提示している。一方で Igarashi (2025) は、現代九州方言と琉球祖語の共有改新が痕跡的に見出される点を認めつつも、基礎語彙を含む大部分においては中央語と音変化を共有していることから、以前の主張をより穏健なものとし、九州における琉球祖語の中央語への置き換えを想定する Pellard (2015) の立場に歩み寄っている。

以上を踏まえると、近年の研究では、現代九州方言は琉球祖語を基層とする中央語であるとする説がやや優勢である。しかし、本論文の古代九州基層仮説は、これとは異なるシナリオを想定する。すなわち、現代九州方言は中央語の系統に属するが、その基層は琉球祖語ではなく、すでに消滅した古代九州基層語である。本論文が想定する古代九州基層語は、中央語とも琉球祖語とも異なる系統に属する日琉語である。

5.4 古代九州基層仮説と宮古語の語源研究

古代九州基層仮説は、宮古語の語源研究においても重要である。例えば、本論文の第4章で論じたように、宮古語中核方言 uk^harj 「鬱金」の k^ha が前期宮古祖語 *ke に由来すると再建した。この母音 *ε は 15 世紀沖繩語からの借用語における *e の適応である。同じく第4章で論じたように、15 世紀沖繩語の形式として *^huken を再建すると、現代首里方言に ^hukinj を予測してしまい、実際の形式 ^hutciŋ 「鬱金」と整合しない。したがって、現代首里方言と宮古語両方の反映を説明するためには、15 世紀沖繩語に *k^he を伴う *^huk^hen を再建するしかない。15 世紀沖繩語において、硬口蓋化子音 *C^h は隣接する *i の影響による順行または逆行硬口蓋化の結果である。しかし、再建される *^huk^hen には口蓋化子音に先行する *i が存在しない。このことは、第4章で論じたように、琉球祖語 *si の脱落によって説明できる。すなわち、琉球祖語 *pasira 「柱」が 15 世紀沖繩語 *par^ha に変化するように、琉球祖語の *siC が順行口蓋化によって *siC^h となり、その後 *si が脱落することによって C^h のみが残る変化の過程として、*^huk^hen の *k^h を説明することができる。以上から、15 世紀沖繩語に *^huk^hen として反映される「鬱金」の琉球祖語形は *usiken{i, u} と再建される。

この琉球祖語形 *usiken{i, u} 「鬱金」は古代九州基層語 *utikon 「鬱金」の借用とみなすことができる²。前述のように、古代九州基層語の *ti の

²本論文は、古代九州基層語は琉球祖語とは異なり、音節末鼻音を許容していたと主張する。この点は、琉球祖語 *teni 「空」と *teⁿda 「太陽」を、日本語 ten 「天」・tendau 「天道」と比較することで明らかになる。もし琉球祖語が独自の漢字音体系を持っていたのであれば、*teⁿda の前半に *teni がそのまま含まれないのは不自然である。したがって、*teni 「空」と *teⁿda 「太陽」は、音節末鼻音をもつ言語から借用されたと考えられる。その借用元の発音は [ten], [tendau] のような形であり、閉音節を持たない琉球祖語に適応した結果が *teni, *teⁿda である。同様に、琉球祖語 *usiken{i, u} 「鬱金」も、[ucikən] のような発音が閉音節を許容しない体系に適応した結果とみなすことができ

子音は破擦化していたと仮定されており、破擦音はさらに連鎖的な変化によって摩擦音 [s] として実現されていたと考えられる。また、古代九州基層語の語末以外の強勢を持たない *o は弱化した [ə] のように実現されていたので、古代九州基層語 *utikon 「鬱金」は [uɕikən] のように実現されていたと考えられる。この語を琉球祖語が借用すると、*o→*e (6d) と、音節末鼻音を許さない制約による適応により、*usiken{i, u} として借用される。古代九州基層語 *utikon は、「鬱金」の呉音 utikömu と比較できる。

第6章

日琉祖語について

本章の議論は、尹 (2025b) の成果を土台としつつ、大幅な修正を加えたものである。

日琉祖語は、日琉語族に属するすべての言語の共通祖先として定義される。日琉諸語 (Japonic languages) を、日本列島外で用いられていたとされる日本語同系の言語まで拡張し、Insular Japonic と Peninsular Japonic に区分する研究もある (Vovin 2020b)。しかし本論文では、日本列島で用いられている、あるいはかつて用いられていた諸言語のみを対象とする。

服部 (1978–1979) 以来、「日琉祖語」として理解されている体系は、日本語と琉球諸語の直接的な比較によって得られたものではないことに注意が必要である。そこでは、まず上代日本語を内的に再建し、その体系に基づいて比較手法を適用し、琉球諸語のデータを参照して修正を加えるという手順を経ている。具体的には、上代日本語の内的再建によって *i, *u, *ə, *a の4母音をもつ祖語を設定し、その後、琉球諸語との対応

を考慮して *i を *i~*e に, *u を *u~*o に分けるなどの修正が加えられている (Pellard 2024: 40–42). したがって本章で用いる「日琉祖語」という用語も、「主として日本語の内的再建に基づき、必要に応じて琉球諸語のデータで調整された祖語」という意味で用いる。

現在広く受け入れられている再建体系では、日琉祖語は 9 子音と 6 母音からなる (Frellesvig 2010: 41–42; Pellard 2024: 45–51). その音素目録は (1) のとおりである。

(1) a. 子音: *m, *n, *p, *t, *k, *s, *r, *w, *j

b. 母音: *i, *e, *a, *ə, *o, *u

しかし、当然ながら (1) の再建が完全であるわけではない。先行研究では、より多くの現象を説明するために上記の音素目録を拡張する提案がなされてきた。例えば Frellesvig & Whitman (2004) は、7 つ目の母音 *i を導入し、日琉祖語 *Cəi が上代中央日本語で Cē または Cī に反映する問題を解決しようとした。彼らは *Cəi > Cē のみを認め、Cī に対応するものについては *Cii を再建する。また *i の再建によって日本語と中期朝鮮語との音韻対応が規則的になると主張している。Unger (2008) は、有声阻害音弱化説に基づき、*w, *j の代わりに *b, *d を再建し、弱化しない *g > ʔg を説明するために、*g に加えて *ŋ を再建する。しかし、このような提案は朝鮮語との比較や漢字音の対応規則などといった外部的な要素を視野に入れたものであり、新しい音素の設定を裏づける内部的な根拠が不十分であったため、定説の地位を得るには至っていない。

本章では、新たな音素を追加するのではなく、子音連結をより多く許容するように音素配列制約を緩和することによって、日琉祖語の再建体系を拡張する。従来体系 (Frellesvig 2010: 42–43) では、濁音の由来と

しての *NC (N は任意の鼻音) のみが想定されていたが、本章ではそれ以外の子音連結も許容する体系を再建する。これらの子音連結は語根に本来 (再建できる最も早い段階から) 含まれていたのではなく、子音で終わる形態素と子音で始まる形態素の連結や、子音間の母音脱落によって生じたものと考えられる。

さらに本章では、母音脱落が強勢の配置に従って生じた可能性を指摘する。すなわち、日琉祖語の以前の段階 (先日琉祖語) は弁別的なピッチを持つ体系ではなく、弁別的な強勢を持つ体系であったとする仮説である。この仮説では母音脱落は、強勢音節に隣接する非強勢音節で生じたものと仮定される。母音脱落は元来の強勢配置を変化させることになるが、その変化後の強勢配置に基づいて韻律体系が再解釈され、高起式・低起式の区別 (6.3 節参照) を含む弁別的ピッチ体系が成立した可能性を指摘する。ただし、本章は先日琉祖語における強勢体系の再建には至っておらず、また母音脱落の具体的条件についても未解明の部分を残している。そのため、本稿で提示する仮説は現時点では探索的な性格を帯びるものである。しかしながら、強勢体系に基づく母音脱落の可能性をここで提案することは、日琉祖語の韻律体系をめぐる議論に新たな視座を提示し、将来的な再検討のための基盤を提供することにつながる。

言語の名称と表記

本章では、主として『万葉集』巻 14・巻 20 に収録された歌に見られる、非中央語的特徴を持つ上代日本語の諸方言を「上代東国日本語」と称する。この伝統的な定義について Kupchik (2023: 1) は、「上代東国日本語」が一つの方言連続体を形成しないことを指摘し、伝統的に上代東国日本語と呼ばれてきた諸方言のうち、遠江国・駿河国・信濃国の方言を

Tōpo-Suruga Old Japanese (上代中部日本語?), それ以外を Eastern Old Japanese (上代東部日本語?) としている。しかし, 本章では便宜上これらを区別せず, 代わりに上代東国日本語の歌を引用するときは国名を記載する。また, 飛鳥・奈良を中心とする上代日本語の中央的方言を「上代中央日本語」と呼ぶ。

上代日本語の実用表記として, 上代特殊仮名遣の甲類音節の母音に曲折符号 (◌̣), 乙類音節の母音に分音符号 (◌̤) をつけて区別する。濁音が前鼻音的要素を持っていたとされる言語の語形においては, 同器官的鼻音の上付き文字で前鼻音的要素を表し, 濁音を ^mb, ⁿd, ^ɲz, ^ŋg のように表記する。斜体は実用表記であることを表す。

6.1 子音間における母音の脱落

母音脱落の定義

本章が提案する子音連結の起源の1つは, 母音の脱落である。ここで言う母音脱落とは, 上代日本語の V_1V_2 (V_1, V_2 はそれぞれ任意の母音) $> V_1$ または $V_1V_2 > V_2$ のような, 母音衝突 (hiatus) を回避するための母音脱落ではなく, $C_1VC_2 > C_1C_2 > C_2$ (C_1 に鼻音の要素がある場合は濁音 ^m C_2) のようなものである。本章では母音衝突の母音脱落と区別するために, 必要な場合はこれを「子音間の母音脱落」と呼ぶ。

この子音間の母音脱落は, 上代日本語においては主に形態素境界に隣接する音節の狭母音が脱落する例が知られている。その例として, Erickson (2004: 499–500) は (2) の7語を挙げている (下線は脱落箇所)。

- (2) a. am̄i 「網」 + pik-î 「引く-NMLZ」 $>$ a^mbiki 「網で魚を捕ること」

- b. paya-pītō > payatō 「隼人」
- c. kīⁿgīsi > kīⁿzi 「雉」
- d. mura 「村」 + nusi 「主」 > muraⁿzi 「連（姓）」
- e. nurite > nute 「鐸」
- f. nusum-ī 「盗む-NMLZ」 + pītō 「人」 > nusu^mbītō 「泥棒」
- g. osi-saka > osaka 「忍坂（地名）」

このような母音脱落は、現存する上代日本語の言語資料からは散発的であるように見える。しかし (2d) と同じ後部要素 nusi 「主」を共有する tōⁿzi 「主婦」（前部要素は tō 「戸」）、(2e) と音韻環境が非常に似ている pumī 「文」 + te 「手」 > puⁿde 「筆」などの例が知られており、それらの例を踏まえると、子音間の母音脱落には本来はある程度の規則性があったと考えられる。

しかし、(2) の例だけでは、子音間の母音脱落の本質を把握することはできない。まず、(2) の例の一部は、日琉祖語の時代に完了した母音脱落ではなく、上代日本語以降の二次的な変化の可能性がある。また、(2) の 7 語においては、脱落した母音が全て狭母音であるため、この音変化を特定の条件で狭母音が削除される規則としてとらえることも可能である。これに対して、上代日本語の形容詞活用の内的再建に基づく以下の議論は、母音脱落が日琉祖語の段階ですでに生じていたこと、さらにその脱落が狭母音に限定された現象ではなかったことを示すことができる。

母音脱落と上代日本語の形容詞活用の内的再建

上代日本語の形容詞は、ク活用とシク活用に分けられる (Frellesvig 2010: 80–81; Vovin 2020a: 390)。ク活用形容詞 taka- 「高い」とシク活用形容詞 kanasi- 「悲しい」の代表的な活用形を以下に挙げる。

(3) ク活用形容詞とシク活用形容詞の例

	taka- 「高い」	kanasi- 「悲しい」
終止形	taka-si	kanasi
連体形	taka-kî	kanasi-kî
連用形	taka-ku	kanasi-ku

一般的に (3) の活用体系は、終止形の語尾が -si、連体形の語尾が -kî (< 日琉祖語 *-ke)¹、そして連用形の語尾が -ku であると分析され、シク活用形容詞は語幹が si で終わる形容詞であり、語幹が si で終わる場合に限っては終止形語尾 -si の代わりに、その異形態 -∅ が現れるという解釈が行われている (Martin 1987: 51; Vovin 2020a: 390)。

しかし、そのような解釈では説明できない点がある。1つは、名詞とク活用形容詞の語根からなるシク活用形容詞語幹の存在である。(4) にその例を挙げる。

(4) a. ura 「心」 + yō- 「良い (ク活用)」 = uresi- 「嬉しい (シク活用)」

b. töki 「時」 + na- 「無い (ク活用)」 = tökîⁿzi- 「季節を知らない (シク活用)」

¹主に上代東国日本語に見られる連体形語尾 -kê~kë との比較から、日琉祖語 *-ke が再建される (Frellesvig & Whitman 2004: 286)[416]vovin2020.

(4a) は, Martin (1987: 843) などに見られる伝統的な語源説による. それに対して (4b) は本論文が提案する語源説による. (4b) の左辺と右辺の終止形をそれぞれ比べると, (5) に示したように右辺は左辺から下線部の母音を除いたものに対応しており, (4a) と平行的な関係にあることがわかる.

(5) a. $ura + \underline{y\ddot{o}si} = uresi$ ($e < *ai$)

b. $t\ddot{o}ki + \underline{nasi} = t\ddot{o}k\hat{i}^nzi$ (${}^nz < *ns$)

もし通説のように, ク活用とシク活用の区別が語幹末に *-si があるか否かによって決まるのであれば, 語幹に *-si を含まないク活用形容詞 (yö- 「良い」, na- 「無い」) を後部要素に持つ複合形容詞が, なぜシク活用に属するのかを説明することができない. (5) のような例に基づいて本論文は, ク活用とシク活用の区別は本来存在せず, 活用語尾の部分で母音脱落が生じた形容詞がク活用に, 生じていない形容詞がシク活用になったと提案する.

ク活用とシク活用の区別は, その形容詞の意味にあるという説が山本 (1955) 以来広く知られている. 山本 (1955) は, ク活用は「状態的な属性概念を表す」ものが多く, シク活用は「心的な, 情意的な面を表す」ものが多くとしている. しかし, 本稿で提案する再建では, 短い語幹の形容詞 (一つの形容詞語根からなる形容詞) はク活用になり, 長い語幹の形容詞 (動詞に形容詞化接辞がついたものや, 複合語など) はシク活用になる傾向が予測され, 山本 (1955) の主張した意味の偏りはその結果生じたものと考えられる.

(6) は、形容詞語根単独の語幹と名詞と形容詞語根からなる語幹を対比し、母音脱落によってどのようにク活用とシク活用の区別が生じるかを表している。以下、脱落する母音に抑音符号 (◌̣) をつけて表す²。

(6) 形容詞語根単独の語幹と名詞と形容詞語根からなる語幹

終止形	*jəsi > yösi	*ura-jəsi > *urajsi = *uraisi > uresi
連体系	*jəsike > *jəske > yökî	*ura-jəsike > *urajsike = *uraisike > uresikî
連用系	*jəsiku > *jəsku > yöku	*ura-jəsiku > *urajsiku = *uraisiku > uresiku
終止形	*nasi > nasi	*täki-näsi > *täkinsi > tökî ⁿ zi
連体系	*nasike > *naske > nakî	*täki-näsike > *täkinsike > tökî ⁿ zikî
連用系	*nasiku > *nasku > naku	*täki-näsiku > *täkinsiku > tökî ⁿ ziku

提案される再建体系では、*-si の母音が脱落したものがク活用、脱落しなかったものがシク活用となる。では、なぜ *uresi-, *tökîⁿzi- においては *-si が脱落せず、ク活用にならないのだろうか。本論文ではこれを、隣接する 2 音節において、双方の母音が同時に脱落することを禁じる制約によって説明する。*uresi- と *tökîⁿzi- に想定される祖形は、それぞれ *ura-jəsi-, *täki-näsi- である。ここでは、脱落の対象となる母音を含む音節の直後の音節が *-si である。したがって、もし *-si の母音まで脱落すると *ura-jəsike, *täki-näsiku のように、隣接する 2 音節で両方の母音が脱落することになる。これを阻止するために、上記の制約を仮定する。

この制約の背景に強勢の配置を想定することができる。たとえば、脱落し得る母音は、強勢音節の直前の非強勢音節に限られるとする規則、あるいは脱落し得る母音は、強勢音節の直後の非強勢音節に限られ

²現時点では、母音脱落の条件が完全に把握されていないため、これは結果論的な表記である。

るとする規則を仮定すれば、2つの隣接音節の母音が同時に脱落することとはなくなる。**ura-jəsike*, **təki-nàsiku* の場合には、語頭から数えて第2音節または第4音節に強勢が想定される。

以上の仮説を採用すると、母音脱落は母音の種類 (vowel quality) によってではなく、語中での位置 (第何音節に当たるか) によって条件づけられることになる。例えば、狭母音 **i* に限らず、中段母音 **ə* や広母音 **a* であっても、脱落が生じ得る位置 (以上の例では3音節以上の語における第3音節) にあれば、脱落の対象となり得る。

第3音節における母音脱落の傾向は、(7)の琉球祖語の例からも確認できる。

- (7) **itoma* 「暇」 + **na-* 「無い (ク活用相当)」 = **itonasi-* 「忙しい (シク活用相当)」

琉球祖語 **itonasi-* は、日本語 *itona-* 「絶え間ない」に対応し、『おもろさうし』巻五には「いちよなしや」(**itəuna-ça < *itonasi-sa*) の形で在証される。(7)では **itonasi-* 「忙しい」を **na-* 「無い」を含む語と分析し、その前部要素 **ito-* を「暇」を意味するものとみなしている。しかし、この **ito-* は、同じく「暇」を表す名詞 **itoma* と形式的に一致しない。この不一致は、**itoma* を **ito-ma* 「暇-時間」とみなすことで容易に解消されるように見えるが、この語源説は比較によって支持されない。琉球祖語 **itoma* は、上代中央日本語 *itōma*, および上代東国日本語 *iṽduma* (万葉集 20.4327, 遠江) に対応する。Kupchik (2011: 116) が指摘するように、上代遠江方言には **ua > u* の変化 (例: **kaju-ap - > kayup-* 「通う」) が想定できるため、これらは日琉祖語 **ituama* に遡るとみるのが妥当である。**ituama* の語源は未詳であるが、仮に **itu-ama* と分析するならば、

前部要素 *itu- は iti 「市」の被覆形に対応する「仕事」を意味する語根とし、後部要素 *ama は amar- 「余る」と関連づけられる可能性がある。いずれにせよ、日本語 itona- や琉球祖語 *itonasi- の前半を説明するために *ituama を *itua-ma とするのは循環的である。

これに対し、本論文の(7)のように母音脱落を仮定すれば、(6)で示した第3音節の母音脱落 (*itomànasiku > *itonasiku) によって *itonasi- が予測され、説明は一貫する。

さらに、シク活用である琉球祖語 *itonasi- 「忙しい」に対し、日本語 itona- 「忙しい」がク活用である点も、本仮説で説明できる。*itomana- (< *itu-ama-na-) は3音節語幹をもつ(6)の2語と異なり4音節語幹をもち、そのため第3音節と第5音節(活用語尾)の両方の母音脱落が可能となる(*itomànasiku > itonaku)。したがって、日本語 itona- がク活用を示し、琉球祖語 *itonasi- がシク活用を示すことは、日本語側では「無し」単体の場合と同じく後部要素「無し」にも母音脱落が生じた一方で、琉球祖語側では複合語全体で1回しか母音脱落が生じなかった(後部要素「無し」の強勢は消滅した)という違いによって説明される。

(3)の活用形の母音脱落仮説に基づいて再建された祖形は、(8)のようになる。

(8) ク活用形容詞とシク活用形容詞: 母音脱落仮説に基づく再建

	*takas- 「高い」	*kanas- 「悲しい」
終止形	*takas-i	*kanas-i
連体形	*takas-ik-e	*kanas-ik-e
連用形	*takas-ik-u	*kanas-ik-u

この仮説では、形容詞語幹末に子音 *s を認める。語幹末子音 *s を想定することには、以下の3つの利点がある。

第一の利点は、形容詞の終止形語尾を動詞 *ar- 「ある」と同じ *-i とみなせる点である。これにより、従来仮定されてきた *-si という形容詞に固有の活用語尾を想定する必要がなくなる。動詞 *ar- と形容詞はいずれも状態を表すという意味的共通性を持ち、この共通性を語尾 *-i で統一的に捉えることができる。

第二の利点は、形容詞の連体形と連用形に共通する形態素 *ik- を分離できる点である。両者が *ik- を共有しているとみなすことは、もともと共通の機能を持っていたことを含意するが、実際にそのような機能的共通性があったことは次の例からも示唆される。上代日本語には愛惜や悲哀の感情を表す感嘆詞的な連語 *pasikéyasi があり、その異形態として *pasikiyasi, *pasikiyösi がある。本論文はこれらの原形を、2つの形容詞を含む句 *pas-ik-e ajas-i 「愛しくて特別な」と再建する (cf. 上代中央語 pasi- 「愛おしい」, ayasi- 「特別な」)。異形態のひとつ *pasikiyösi は、*pas-ik-e jäs-i という別形に遡る可能性もあるが、これは本来の語源が忘れられたのち、意味が通じるように後半を yö- 「良い」と再分析したものと考えられる。この句では、本来連用形が期待される位置に連体形相当の形 *pas-ik-e が現れており、連体形と連用形がもとは同じ機能を持っていたことを示唆している。

第三の利点は、*ik- を分離することで、形容詞の活用と動詞 *ar- の活用に古くは一定の並行性があったと予測できる点である。Frellesvig (2010: 86) が指摘するように、形容詞の連用形は本来、名詞化形として機能していた可能性がある。たとえば『古事記』に見られる、「橘」を意味するとされる *tökiⁿziku nö kaⁿgu nö könömi において、形容詞 *tökiⁿzi- 「季

節を知らない」の連用形 *tökiⁿziku が属格の *nö を伴って名詞 *könömi 「木の実」を修飾し、名詞として振る舞っている。ここで連用形語尾 *-ku (本論文では *ik-u に由来) が、動詞の名詞化語尾 -aku, いわゆる「ク語法」と形式と意味の両面で類似している点が注目される。もし動詞の名詞化語尾 -aku が、動詞 *ar- が形容詞的に活用した *ar-ik-u に由来するのであれば、連用形語尾 *ik-u もまた名詞化として機能していたことになる。すなわち、動詞 *ar- は終止形語尾 *-i を取るだけでなく、名詞化機能を持つ連用形語尾 *-ik-u を取るという点で、形容詞と並行的な性質を有していたと考えられる。

このように、母音脱落仮説は、上代日本語の形容詞活用の体系をより合理的に説明できるという利点を持つ。³

6.2 母音脱落に由来する子音連結を持つ語の例

子音間の母音脱落を設定すれば、その結果として必然的に子音連結が生じることになる。したがって、語源説によって母音脱落が想定される箇所には子音連結の存在が期待され、逆に子音連結の存在から母音脱落を再建することもできる。本節では、母音脱落に由来する子音連結を持つ語の例を挙げながら、その子音連結の反映について述べる。

³アクセントに関する諸問題、例えば『類聚名義抄』などの文献に見られるピッチアクセントにおいて、この仮説で構造が似ている連体形と連用形のアクセントパターンが異なり、むしろ構造が異なる終止形と連体形のアクセントパターンが同一であること (Martin 1987: 215-216) については、今後の課題とする。

否定の接頭辞 *na- とその母音脱落形 *n- < *nà-

上代日本語の濁音は日琉球祖 *NC (N は鼻音 {*m, *n}, C は阻害音 {*p, *t, *k, *s}) に由来することが知られている。上代日本語の継承語には、濁音から始まる語は殆ど存在せず (Frellesvig 2010: 43), これは語頭に子音連結を持つ語根が存在しなかったからと考えられる。しかし、例外として形容詞 *götö- 「同じようである」の存在が知られている。したがって、*götö- の語頭濁音 *g を説明する必要がある。

日本語には「別であること」を意味する名詞 koto があり、上代日本語においても köto ni の用例が見られる⁴。上代日本語では、形容詞の語幹が接辞 n- の活用形 nö, ni などとともに使われることが多く (Vovin 2020a: 377), 「別であること」は形容詞的な意味であることから、この koto は本来、形容詞語幹 *kätəs- 「別である」に由来する可能性が高い。

また、上代日本語には動詞の連用形について禁止を表す接頭辞 na- があり、主に -sö と一緒に使われ、接周辞 na-...-sö をなす (Vovin 2020a: 512-513)。接頭辞 na- は、-sö を伴わずに単独で使われる場合でも連用形接続であるが、sö は se- 「する」と同根とされるため、本来は連用形 + sö が命令の意味を持ち (英語 do V のように)、na- は否定・命令の両方を表すのではなく、否定の機能だけを持っていたと考えるのが妥当であろう。日琉祖語において否定の接頭辞 *na- を再建することによって、(9) の形が説明できるようになる。

(9) a. *nà-kätəs- > *nkätəs- > *götö- 「同じようである」

b. *nà-s-u > *ns-u > -ⁿzu

⁴ 「殊」(万葉集 7.1314) 「殊異」(万葉集 12.3099) と書かれ、表音表記の例はないが、CoCo の語は CöCö が多いことが知られているため、köto とみなすことができる。

c. *nà-n- > *nn- > -n-

まず, ³götö- 「同じようである」と *kətəs- 「別である」は逆の意味を持っているので, (9a) のように前者を後者の否定形とすることによって, 語頭の濁音 ³g を説明することができる.

(9b) と (9c) は, 上代日本語における動詞の否定形式に見られるものである. 従来 of 再建では⁵, (10) に示すように, 否定を表す -an- を想定し, -aⁿzu は -an- の連用形 -an-i に se- 「する」の終止形 su がついた形として分析されてきた.

従来 of 分析

(10) a. sir-an-i s-u 「知る-NEG-INF する-IND」 > sir-aⁿzu

b. sir-an-u 「知る-NEG-ATTR」

c. sir-an-i 「知る-NEG-INF」

しかし, 上代日本語で否定の意味を持つ様々な形式のうち, 語頭に表れることができる形容詞 na- 「無い」と禁止の na- はいずれも子音 n から始まるので, 従来 -an- とされたものについても, -a と n- を分け, 前者は動詞の活用語尾, 後者は独立した否定の意味を表す形式に属していたものと考えるのがより自然であると言える. 否定の接頭辞 *nà- (> *n-) を想定する本論文では (10) の例は, (11) のように説明される. *nà- の後には, 終止形では se- 「する」の終止形 su が, 連体形・連用形では, それぞれ連辞 *n- の連体形・連用形が後続する.

⁵例えば, 『日本国語大辞典』第2版の「ず」の項の語誌は, 「ず」を「にす」からの変化としている(日本国語大辞典第二版編集委員会 & 小学館国語辞典編集部 2003). 「に」については, Vovin (2020a: 713) 参照.

否定の接頭辞 *n- < *nà- を想定

- (11) a. *sir-a nà-s-u 「知る-PTCP NEG-する-IND」 > *sir-a ns-u > sira-ⁿzu
 b. *sir-a nà-n-o 「知る-PTCP NEG-COP-ATTR」 > *sir-a nn-o > sira-nu
 c. *sir-a nà-n-i 「知る-PTCP NEG-COP-INF」 > *sir-a nn-i > sira-ni

子音交替 m~n と子音連結 *mj

日琉諸語には、特に語頭において、m~n の子音交替を示す語が多数存在する。例えば、上代中央日本語の nipa 「庭」や nipî 「新しい」は、それぞれ琉球祖語 *mi[w]a, *mi[w]i に対応する。同様に、日本語 nina 「川蜷」は琉球祖語 *mina に対応し、上代中央日本語にも枕詞 mîna nō wata の一部として mîna の形が見られる。また、『古事記』歌謡の mîpòⁿdōri 「カイツブリ」に対して『万葉集』の nipoⁿdōri のように、上代中央日本語の中でも文献によって子音が異なるものもある。

この m~n 交替に似たような現象として、日本語の n~d~y 交替がある。例えば、「避ける」を意味する nok-, dok-, yok-, 「振じる」を意味する nedi-, (detti-?), yodi- がその例である。特に「振じる」の場合は modi- という形もあり、m~n を含む m~n~d~y の交替になっている。この4つの子音 (m, n, d, y < *m, *n, *ⁿd, *j) のうち、歴史的に鼻音的要素を想定できないのは *j のみである。この事実には、次の2つの解釈が成り立ちうる。第一に、「避ける」「振じる」を意味する語根は本来鼻音的要素を伴っていたが、y で始まる形だけがそれを失ったとみる解釈である。第二に、同語根は本来鼻音的要素を持たず、鼻音的要素を伴う語は *m で始まる接頭辞を伴う形に由来するとみる解釈である。本稿は、以下の理由から後

者を採用する。「避ける」「振じる」という意味は、身体（あるいは身体の一部）を動かすことに関わるとみなしうる。身体に関連する意味を持つ形態素として *mi* 「身」があり、これは鼻音的要素を伴う。したがって、鼻音的要素を伴う「避ける」「振じる」系の形式は、*mi* 「身」の被覆形 *mu-* を接頭辞として持つ形に由来し、語根そのものは鼻音的要素を伴わない **j-* で始まっていたと想定できる。以上より本稿は、鼻音的要素を伴う形式の由来として、*mi* 「身」の被覆形 *mu-* が付された形を再建する。

(12) a. **jək-* > *yək-*

b. **mù-jək-* > **mjək-* > *nok~dok-*

「庭」「新しい」「川蜷」「カイツブリ」の例では、*y* で始まる形が確認されないため、**mj* は接頭辞ではなく、語根内部での母音脱落によって生じたものとみなすべきである。「川蜷」については、これと共通する語根をもつ語が現時点では見いだされていないため、**mjina* を再建するにとどまり、もともとどのような意味をもつ語根の、どのような母音が脱落したのかを特定することはできない。これに対して、「庭」「新しい」「カイツブリ」の3語は、高起式アクセントをもつ点、および *mîp~nip* で始まる点で共通しており、共通の語根に由来する可能性がある。

中古日本語には *nifaka* が、上代東国日本語には *nipasi-* (万葉集 20.4389 下総) が在証され、これらが問題の語根 *mîp~nip* を共有しているのならば、この語根には「新しい」だけではなく「急に」「突然」の意味があったと想定することが可能となる。

カイツブリは速い動きを特徴とする鳥で、その属名 *Tachybaptus* も *ταχύς* 「速い」と *βάπτω* 「水に入る」から命名されている (Jobling 2010: 377)。したがって、「カイツブリ」に「急に」「突然」を意味する語根が含まれ

るとみなすのは合理的である。カイツブリは鳥の一種であることから、上代中央日本語 $mipô^n dōri \sim nipo^n dōri$ には、 $tōri$ 「鳥」の連濁形 $-^n dōri$ が含まれていると解釈するのが最も素直であるが、この解釈には問題がないわけでない。上代中央日本語では、この語は常に $mipô^n dōri \sim nipo^n dōri$ として使われ、 $mipô \sim nipo$ の部分が単独で現れることはない。したがって、この語を $mipô^n + dōri \sim nipo^n + dōri$ のような語形成を持つものとして分析することは難しい。本論文は、代わりに、 $mipô^n dōri \sim nipo^n dōri$ は語根 $mip \sim nip$ - 「突然」と $wo^n dōr-i$ 「飛び跳ねる-NMLZ」からなる複合語で、「急に動き出す鳥」の意味であるとする解釈を提案する。

「新しい」と「急に」「突然」の意味的関連性は自明なので、残りは「庭」だけとなる。母音脱落仮説の観点からは $*mip \sim nip$ - の交替は、 $*mjip$ - に遡り、語根頭の子音連続は母音脱落に起因とされるので、問題の語根は究極的には $*m\check{v}jip$ - と再建できる。この語根は $mōye$ - 「芽ぐむ」と $*maj$ - の部分を共有する可能性がある。つまり、「芽生えたばかりの」という本来の意味から、「植物が生えている空間」を意味する名詞化「庭」が派生した後、語根そのものは「新しい」「突然」への意味変化を経験したと考えられる。

子音連結 $*mj$ と「虹」：二重母音 $*io$ の反映

「虹」を表す語形は、現代共通日本語では $nizi$ であるが、中古日本語では $ni^nzī$ 、上代東国日本語では $nō^nzī$ (万葉集 14.3414, 上野)、琉球祖語では $*no^ndzi$ であり、第1音節の母音に多様性が見られる。さらに、現代日本語の諸方言には語頭子音が n ではなく m である $myoozi$ 系が分布しており、九州北部、山陰地方を中心とする中国地方、四国の一部、紀伊半島

南西部，北陸地方など広範囲に及ぶ(国立国語研究所 1974: 27)。このような多様な語形を同源とみなし，日琉祖語における「虹」を再建するためには，第1音節の子音・母音の複雑な対応を説明する必要がある。

本論文は，その手がかりを，現代諸方言に広く分布する myoozi 系に求める。本論文は，この語形は，3音節形 $*mijo^nz$ < $*mijoNsi$ に遡ると仮定する。3音節形を再建することで， ni^nz , no^nz , $*no^ndzi$ といった2音節形は，第1音節が脱落した形に由来するものと説明できる。具体的には， $*mijoNsi > *mjoNsi$ のように母音が脱落した段階を想定することである。この $*mjoNsi$ は 6.2.2 節で論じた子音連続 $*mj$ を含み，これによって「虹」に観察される $m\sim n$ の交替を自然に説明することができる。

例えば，中央語においては以下のような変化を仮定できる。

(13) $*mijoNsi > *mjoNsi > *nioNsi >$ 中古日本語 ni^nz

(13) では中央語に $*mj > n$ の変化を仮定しているが，6.2.2 節で論じたように，上代中央日本語において $*mj$ は $m\sim n$ の交替を示す。この交替には文体上の差異が関与していた可能性がある。例えば， m の反映を示す $mîna$ ($nô wata$) は枕詞に現れ， $mîpô^ndôri$ 「カイツブリ」は『古事記』歌謡に見られる。それに対して， n の反映を示す $nîpô^ndôri$ 「カイツブリ」は『万葉集』歌謡に見られる。これらの事実から，上代中央日本語における $*mj > m$ の反映は，化石化した形や保守的な表記の文献に限定されると考えられる。したがって，上代中央日本語では，一般には $*mj$ が n として反映していたとみなすことができる。

また，(13) では，中央語において日琉祖語 $*io > i$ の変化を仮定している。これは Ramsey & Unger (1972: 291) が， $ik\sim yuk$ 「行く」のような交替を説明するために提案した $*iu > i\sim yu$ という再建を踏まえたものであり，

本論文ではその *u を *o に修正した形で継承している。ただし、「行く」に関しては、本論文は *io が直接的に i-yu になったとは考えない。むしろ、語頭において *io と *jo の区別が曖昧であったため、*io が散発的に *jo へと崩壊 (decay) し、その結果 *iok-「行く」が *jok- となり、さらに通常の中段母音上昇 (MVR) *o > u によって yuk- となったとみなす。

二重母音 *io の再建は、上代日本語 *i 「50」の存在からも支持される。この語はきわめて短く、しかも同じく十の倍数を表す *misô 「30」や *yasô 「80」と共有する要素を欠くという特異性をもつ。しかし *i 「50」を *i-o に由来するとみなせば、*mis-o 「30」や *jas-o 「80」と共通する「×10」を表す接尾要素 *-o を切り出すことができる。この場合、「5」「3」「8」はそれぞれ *i, *mis, *jas に遡ることになり、後二者は語根末に子音 *s を再建する根拠ともなる。さらに母音脱落仮説の観点からは、tōwo 「10」も *pitā-o 「1-×10」 > *ptā-o の反映と説明できる。「×10」を表す -o については、mis-o 「30」を含む misoⁿdi 「30歳」で、-o の後の子音が濁音となる点から、-o ではなく鼻音を伴う *-oN であった可能性が示唆される。もし「×10」を *-oN と再建できるなら、その形式は周辺言語との比較対象となりうる。例えば、中世韓国語 -on~un 「×10」やアイヌ語 wan 「10」などとの関連が視野に入る。

「虹」に *mjoNsi (< *mijoNsi) を再建するという本論文の枠組みは、現代諸方言に見られる語頭が m または n で始まる形式だけでなく、語頭に濁音 (有声阻害音) を持つ形式の由来も説明できる可能性を持つ。現代諸方言には、myoozi 系の語形に類似するものとして、広島県北部に分布する byoozi, 兵庫県 of byuuzi, 島根県東部の byoobu・byobi など語頭が b で始まる形や、九州西部を中心に分布する zyuuzi・zyuuzu など語頭が z で始まる形が報告されている (国立国語研究所 1974: 27)。

このうち、zで始まる zyuuzi 系については、zyuuzi 系の分布する九州西部の一部に ryuuzi や ryuusi が見られること (国立国語研究所 1974: 27), さらにこの地域では語頭の /ry/ が /zy/ に変化する傾向があること (九州方言学会 1969) から、zyuuzi 系は ryuu 「竜」を含む別系統の語源に由来する可能性も考えられる。しかし本論文では、zyuuzi は *mjoNsi に遡り、*mj > *dj > zy という音変化によって生じた形であるとみなし、ryuuzi は zyuuzi の zyuu 部分が「竜」と音声的に類似していたため、民間語源的に再分析された新しい派生形であると解釈する⁶。すなわち、byoozi 系も zyuuzi 系もいずれも *mjoNsi に由来し、前者は *mj > by, 後者は *mj > dy を経て形成されたとみなす。

*mj が濁音 (有声阻害音) として反映されることは、6.2.2 節で「避ける」「捻じる」についてすでに論じたとおりである。これらに共通すると考えられる *mjæk- (< *mù-jæk-) の語頭 *mj は、m や n のみならず d として反映される。日本語における *mj の濁音反映の最古の例としては、『日本書紀』歌謡に見られる ^uderap- = nerap- 「狙う」がある。「狙う」の語源を「視線が集まる」を意味する *mà-jər-ap- 「目-寄る-ITER」に求めるなら、語頭に *mj をもつ *mjər-ap- を再建できる。

ただし、byoozi 系や zyuuzi 系が分布する地域においても、*mj を含むと再建される他の語 («庭」「新しい」「川蜷」など) が必ずしも濁音で反映されるわけではない。この点について本論文は、byoozi 系・zyuuzi 系をもつ現代諸方言は、かつて *mj > by, *mj > dy を経験した方言を基層

⁶ryuuzi 系が「龍」に由来する民間語源的再解釈であることは、(国立国語研究所 1974: 27) によって指摘されている。同様に、myoozi 系の分布域に隣接する一部地域 (鳥取・兵庫・石川) に見られる myoozin も、「明神」に由来する民間語源的再解釈であると同書は示唆する。本章は myoozin が民間語源的再解釈であることについて同書と見解を同じくし、そのうえで、myoozin は *mjoNsi に遡る myoozi が「明神」との形態的近似により再分析された結果と解釈する。

としており、「虹」においてはその痕跡が残った結果であると説明する。言い換えれば、語頭が *n* で反映される形だけでなく、*myoozi* 系、*byoozi* 系、*zyuuzi* 系をすべて **mjoNsi* (< **mijoNsi*) に由来するものとみなすことで、日本本土の諸方言が威信方言（中央語）に置き換えられる以前の日琉諸語の分岐過程に関して重要な示唆が得られる。

子音連結 **mj* と「猫」：上昇三重母音（rising triphthong）の反映

「猫」を表す語は、日本語では *ne-ko* であり、琉球祖語では **majo* と再建される。さらに、アイヌ語の一部の方言には *meko* 「猫」という語が見られる（服部 1964: 185）。この *meko* は、日本語 *ne-ko* と語形的に類似していることから、日本語からの借用とみなすことができる。もしこの仮定が正しければ、語頭子音が *n* ではなく *m* である事実は、*ne-ko* と同源の **me-ko* を持つ日本語の方言がかつて存在し、そこからアイヌ語に借用されたと想定することで説明が可能となる。以上を踏まえると、**me-ko* と *ne-ko* は *m~n* の交替を示す一例とみなしうる。

母音脱落仮説によれば、この *m~n* の交替は **mjV* に遡る。したがって、**me-ko*, *ne-ko* の前部要素 **me-*, *ne-* は、**majo* 「猫」の第 1 音節母音が脱落した **màjo* > **mjo* に由来すると説明できそうに見える。しかし、6.2.3 節で論じたとおり、**mjo* は中央方言では **nio* を経て *ni* になることが予測されるため、実際に観察される *ne-* とは一致しない。したがって、この説明は妥当ではない。

「猫」の日琉祖語形の再建には、アイヌ語 *cápe~cappe* 「猫」（服部 1964）の語形成が参考になる。本論文はこの語を、「散らかす」を意味する語

根 *car* に名詞化接尾辞 *-pe* が付いた形と分析する。興味深いことに、日琉諸語の **majo*, **me-*, *ne-* が由来すると考えられる **mjV* に対応しうる形式として、「散らかす」に近い意味をもつ「ほつれる」（本来は「乱れる」か）を表す上代中央日本語 *mayôp-* < **maju-ap-* が確認できる。すなわち、アイヌ語と日琉諸語の間には、「猫」を表す語に語形成上の仮説上の並行性を認めることができる。この並行性が実質的なものであるならば、その背景には、日本語からアイヌ語への（あるいはその逆の）翻訳借用が想定される。本論文では翻訳借用が実際に行われたと仮定し、日琉祖語の「猫」を表す形式として、**maju-ap-* 「ほつれる・乱れる」と語根を共有する **majua* 「猫」を再建する。

この **majua* の第1音節母音が脱落した形は、中央方言において **mjua* > **niua* となり、上昇三重母音を持つ形式となる。**V₁V₂V₃* (*V₁* と *V₂* が狭母音) のような上昇三重母音が **V₁V₃* に崩壊するとするならば、**niua* > **nia* > *ne* となり、*ne-ko* の *ne* と整合する。一方、琉球祖語では母音脱落が生じず、**majua* 「猫」 > **majo* となる。

本章で仮定した **iua* > **ia* という変化は、「猫」を説明するためだけの特殊な操作ではない。例えば *sakêmb-* 「叫ぶ」の語形成にも適用できる。*sakêmb-* の後部要素を *yômb-* 「呼ぶ」とみなす語源説があるが (Martin 1987: 746), 甲類の *ô* を含む *yômb-* 「呼ぶ」の日琉祖語形を **juaNp-* と再建し、「叫ぶ」を **sak-* 「割く」と **juaNp-* 「呼ぶ」との複合動詞に由来すると仮定すれば、**sak-juaNp-* > **sakiuaNp-* > **sakiuaNp-* > *sakêmb-* という変化を再建することができる。ここで想定した **ua* > *ô*, **ia* > *ê* は、上代中央日本語に生じた音変化として広く認められている。

子音連結 *mj と「恨む」: 曲折三重母音 (rising-falling triphthong) の反映

上代日本語においては、感情を表すシク活用形容詞と上二段活用動詞のあいだに (14) のような対応関係が見られる。

- (14) a. kôposi- 「慕わしい」, kôpî- 「慕う」 < *k[o]pos-, *k[o]poi-
 b. sa^mbusi- 「心が楽しまない」, sa^mbî- 「荒れた気持ちになる」 < *saNp[u]s-, *saNp[u]i-

ここでは、形容詞語幹末の (甲類相当の) o あるいは u が、動詞語幹末の乙類の i に対応している。このことから、日琉祖語においては形容詞語幹末に *os- / *us- を、動詞語幹末に *oi- / *ui- を再建できる。

これに対し、同じく感情を表す形容詞と動詞の対である uramêsi- 「恨めしい」と urami- 「恨む」 < *uramî- には、上記の対応関係が見られない。形容詞語幹末には甲類の ê が、動詞語幹末には乙類の i が現れている。しかし母音脱落仮説を採用すれば、(14) と同様の対応を導くことが可能となる。具体的には、両者を複合語由来とみなし、前部要素 *ura- 「心」に、後部要素「燃える」を意味する形式 (形容詞では mōjas-, 動詞では mōjai-) が複合した形を再建する。これらはいずれも後部要素の第 1 母音が脱落したと仮定される (15)。

- (15) a. *ura-mōjas- 「恨めしい」 > *ura-mjas- > *uramias- > uramêsi-
 b. *ura-mōjai- 「恨む」 > *ura-mjai- > *uramiai- > *uramî-

意味的にも、urami- < *ura-mòjai- は「心-燃える」の構造をもち、妥当性が高い。さらに uramêsi- < *ura-mòjas- では、第3音節母音の脱落が起きており、本章で提示した一般的傾向と一致する。

(15) の例からは2つの点を確認できる。第一に、母音に挟まれた *mj は、語頭の *mj とは異なり、上代中央日本語で n ではなく m として反映する。第二に、曲折三重母音 *V₁V₂V₃ (V₁ と V₃ が狭母音) は *V₂V₃ に崩壊する。すでに 6.2.3 節で、上昇三重母音 *V₁V₂V₃ (V₁ と V₂ が狭母音) は *V₁V₃ に崩壊すると仮定したが、この例からは崩壊のパターンが曲折三重母音と上昇三重母音で異なることが明らかになる。

同様の上昇三重母音の崩壊例として su^ogi- 「過ぎる」を挙げることができる。上代中央日本語 su^ogus- 「過ごす」と su^ogi- 「過ぎる」は、kôs- 「越す」と kôye- 「越える」にそれぞれ意味的に近い。このことから、両者は kôs-, kôye- に接頭辞 *suN- が付加された形に由来するとする語源説が提案できる。kôs- 「越す」と kôye- 「越える」の日琉祖語形は *kos- と *kojVj- (V は *a あるいは *o) と再建できる。したがって su^ogus- 「過ごす」は *suN-kos- に、su^ogi- 「過ぎる」は *suN-kojVi- に由来するとみなせる。前者 *suN-kos- > su^ogus- は問題なく説明できるが、後者 *suN-kojVi- > su^ogi- には母音脱落を仮定する必要がある。すなわち *suN-kòjVi- > *suNkjVi- > *suNkiVi > su^ogi- という過程であり、この変化の途中で *NkiVi が上代中央日本語の ^ogi に至ったと考えられる。この過程では、上昇三重母音 *V₁V₂V₃ が *V₂V₃ に崩壊している。

子音連結 *tj と「力」：二重母音 *io のもう一つの反映

miⁿdukara と teⁿdukara はともに「自分で」という意味を持つ語である。Martin (1987: 483, 545) は前者を mi-tu-kara 「身-GEN-殻/空」、後者を「手-GEN-殻/空」とする語源説を提案している。しかし、両者は意味的に「自分の体の力で」と捉えることも可能なので、tikara 「力」を含む複合語である可能性が示唆される。

この可能性を検討するには、アクセントを考慮する必要がある。院政期（11世紀後半～12世紀末）の京都方言のアクセントを記した『類聚名義抄』によれば、「力」の音調は HLL（H= 高, L= 低）である (Martin 1987: 546; 秋永 et al. 1997: 312)。miⁿdukara の『類聚名義抄』における音調は HHxx（x は高低不明）であり、第3・第4音節の音調が不明であるが、鎌倉期の『御巫本日本書紀私記』、『日本紀私記』丙本、『四座講式』などでは HHLL と記録されている (秋永 et al. 1997: 477)。京都方言のアクセント体系の大きな変化は室町期に起きたことが知られているため金田一 (1954)、院政期の miⁿdukara も HHLL であったと考えて差し支えない。したがって、miⁿdukara の末尾3音節の音調は「力」HLL と一致する。

一方、teⁿdukara の『類聚名義抄』における音調は LHxx で、第3・第4音節は不明である。これ以降の京都方言資料は、すでに大きな変化を経た後の時期（江戸中期頃までの音調を記した『平家正節』）に属するが、そこでは LHLL とされており (秋永 et al. 1997: 336)、後部要素が tikara HLL 「力」であると仮定しても矛盾はない。したがって、アクセントの観点からも miⁿdukara と teⁿdukara が tikara 「力」を含むとする説は支持される。

ただし、-ⁿdukara と tikara との間には、第1音節の母音が i と u で一

致しないという問題が残る。この点を解決するには、第1音節では *i*、第1音節以外では *u* として反映する母音を再建する可能性を検討する必要がある。本章ではすでに二重母音 **io* を再建し、その例として **iok-* > *ik-* 「行く」を挙げた。ここで、*aruk-* 「歩く」を **ariok-* と再建すると、**io* は第1音節では *i* (**iok-* > *ik-* 「行く」)、第1音節以外では *u* (**ariok-* > *aruk-*) となることがわかる。この **iok-* と **ariok-* の再建に関しては、上代日本語の動詞接頭辞 *i-* (Vovin 2020a: 505–512) と *ari-* (Vovin 2020a: 520–522) の存在も参考になり、例えば **iok-* と **ariok-* はそれぞれ **i-ok-*、**ari-ok-* のように語根 **ok-* 「移動する」に接頭辞がついた形で、語根 **ok-* は中段母音の上昇による *uk-* 「浮く」との同音衝突によって使われなくなったというシナリオを考えることができる。

以上の議論から、「力」の祖形として **tiokara* を再建できる。この **io* の起源については、母音脱落仮説の観点から **tiokara* < **tʷjokara* という第1音節母音脱落を想定できる。この **tʷjokara* の前部要素は、意味・形式の両面で *tuyo-* 「強い」と一致する。したがって、本章では **tʷjokara* > **tjokara* > **tiokara* > *tikara* ~ *ⁿdukara* という変化を再建する。

子音連結 **jw* と「病む」：**{r, j}ua* の散発的な単純化

上代中央日本語 *yamapî* 「病気」には、上代東国日本語の *yumapî* (万葉集 20.4382, 下野) の例があり、また *nayam-* 「悩む」に対しても、上代東国日本語に *nayum-* (万葉集 14.3533, 出典未詳) が見られる。これらはいずれも「病む」の語根を含むと考えられるが、その祖形を単純に **jam-* と再建すると、東国方言に現れる *yum-* の説明が困難となる。

本章では、*para* 「原」(上代中央日本語) と琉球祖語 **paro* < **parua* の

対応を参照し、「病む」の祖形を *juam- と再建する。*ua は通常 o に変化するが、*r や *j に後続する場合には中央方言で散発的に *ua > a / {r, j}_ の単純化が生じたと考える。この散発的単純化の背景として、母音連続 *ua に先行する子音が流音 (liquid) あるいは半母音 (glide) である点が挙げられる。流音と半母音は母音とともに接近音性 ([+approximant])、すなわち「口腔内の狭めが摩擦を生じさせない程度に広い」という素性を共有し、母音に近い性質をもつ。したがって *rua / *jua の連鎖は調音的に3つの母音連鎖に近く、母音連続の修復 (単純化) を誘発しうる。中央方言の *parua, juam- では、通常の *ua > o に先立って散発的な *u 脱落 (*ua > a) が起こったため、それぞれ para, yam- に変化したと考えられる。一方、上代東国方言には *ua > u の例があるので、*juam- > yum- となる。このように *juam- を再建することで、中央方言の yam- と上代東国方言の yum- の双方を統一的に説明できる。

さらに *juam- は、形容詞 jôwa- 「弱い」 (< *jowas-) と語根を共有する動詞 *jowam- 「弱くなる」を仮定し、その母音脱落形とみなせる可能性がある。この場合、*jowam- が母音脱落を経て *jòwam- > *jwam- > *juam- となり、yam- 「病む」が生じたこととみなすことができる。加えて、この再建された動詞 *jowam- 自体も、形容詞語幹 *jowas- に動詞化接辞 *-im を加えた *jowas-im- 「弱くなる」に由来し、母音脱落によって *jowas-im- > *jowam- が成立したと解釈できる可能性がある。その場合、名詞 *juam-ap-i > yamapî 「病気」は、*jòwas-im-ap-i > *jwamapî > *juamapî > yamapî という、母音脱落が二度起きた形式と説明される。同様に、nayam- の前半を *muna- 「胸」の母音脱落形 *mùna- > *mna- と考えると、nayam- 「悩む」 < *najuam- 「悩む」は *mùna-jòwas-im- に由来し、ここでは母音脱落が三度起きたことになる。*muna- 「胸」の母音脱落は、例え

ば形容詞 *neta-* 「悔しい」にも想定できる。これを **muna-* 「胸」と **itas-* 「痛い」の複合語とみなせば、**mùna-itas- > *mnaitas- > neta-* という変化を想定することが可能である。**jòwas-im-ap-i* 「病気」と **mùna-jòwas-im-* 「悩む」の事例は、隣接する二つの音節の母音が同時に脱落しない限り、一つの語の内部で複数回の母音脱落が生じうることを示唆している。

子音連結 **mn* と「涙」：Lyman の法則の一般化

「涙」は、上代中央日本語において *namita~namiⁿda* の清濁交替を示す。この語をタイ・カダイ語族からの借用とみなす説もあるが (ヴォヴィン 2010)、本章では他語族からの借用を仮定せず、日琉語内部で説明する語源説を提案する。まず、語頭の *na-* を **ma-na* 「目-GEN」の母音脱落形とみなし、その変化を (16) のように想定する。

(16) **mà-na-miNta > *mnamiNta > *mnamita~*namiNta > namita~namiⁿda*

ここで生じる **mnamiNta > *mnamita~*namiNta* の交替は、Lyman の法則をより一般化することで説明できる。周知のように Lyman の法則は、「後部要素に濁音を含む場合には連濁が生じない」と理解されている (Vance 2007)。しかし本章では、日琉祖語の段階では、その背後に「一語の内部に二つの **NC* 子音連結は許されない」という音韻論的制約が存在したと仮定する。連濁の際には、前部要素と後部要素の境界にある **N* を削除するのが記憶や処理の面で最も単純だったため、この制約が後世に「後部要素に濁音があると連濁が阻止される」という規則として再解釈されたのだと考えられる。しかし、本来は複数の **NC* が並存する場合、どれを削除するかは必ずしも固定されていなかったと想定され

る。また、本章の立場では、*Cが障害音の場合だけでなく、鼻音の場合（すなわち*NN）も*NC子音連結として数えられていたと仮定する。

この制約を適用すると、*mà-na-miNta > *mnamiNta には *mn, *Nt という2つの*NC連結が含まれるため、一方を保持して他方を単純化する2つの経路が予測される。すなわち、前者を残して後者を簡略化した*mnamitaと、後者を残して前者を簡略化した*namiNtaである。これにより、上代中央日本語に実際に観察される namîta~namîⁿda の清濁交替を自然に説明できる。さらに、語頭に濁音をもつ語が一般に少ないことから、語頭の*NCを残すよりも語中の*NCを残す傾向が強かったと推察でき、namîⁿdaの形が現代日本語に残った事実とも一致する。

このような Lyman の法則の一般化で説明できる例は「涙」に限られない。例えば timata「巷」や taⁿgimati「当芸麻道」がある。Vovin (2020a: 89) は miti「道」を必ず mi-ti の二形態素に分析すべき理由としてこれらを挙げている。しかし timata は *miti-n-mata「道-GEN-股」> *mtinmata において語頭 *mt を単純化した結果とみなし、また taⁿgimati も固有名詞 taⁿgima を保持するために *-miti > *-mti「道」の *mt を単純化したと考えれば十分に説明できる。したがって、miti とその母音脱落形 *mîti > *mti を想定するだけで、両語の形態を矛盾なく理解できる。

6.3 母音脱落とアクセントの起源

いわゆる「式保存の法則」（金田一 1937）によれば、同一の語根を語頭にもつ語は、同一の式（高起式または低起式）を保持する。「式」とは、日琉諸語の比較に基づき再建される弁別的な音調のクラスであり、院政期の京都方言では語頭の高ピッチ（高起式）あるいは低ピッチ（低起式）

として実現される。しかし実際には、母音脱落が想定される動詞の中に、母音脱落の結果、高起式 (A) から低起式 (B) へと変化したように見える例が存在する。一方、母音脱落によって低起式から高起式へ変化したとみられる動詞は確認されていない。

(17) の 4 語は、Martin (1987) に掲載された CVp- 語幹をもつ動詞の中から、意味的に *CVC-àp- に由来すると考えられる可能性のあるものである。

- (17) a. kup- B 「食べる」 < *kur-àp- 「食べる-ITER」 (cf. kurap- A)
 b. pap- B 「這う」 < *par-àp- 「張る-ITER」 (cf. par- A)
 c. nup- B 「縫う」 < *nuk-àp- 「抜く-ITER」 (cf. nuk- A)
 d. köp- B 「乞う」 < *kər-àp- 「伏す-ITER」 (cf. körös- A, korom^b- A, köyi- B²)

(17a) は意味が同一であるため、同根とみなせることは明らかである。(17b) は「這う」を「体を伸ばす行為の繰り返し」と捉える解釈に基づく。(17c) は「縫う」を「穴を開ける行為の繰り返し」と捉える解釈に基づく。(17d) は「殺す」を「伏させる」という本来的な婉曲表現とみなし、「乞う」を「平伏を繰り返す行為」と解釈することに基づく。

(17) の 4 語が実際に母音脱落を経験しているという確証はない。しかし (17) の 4 語を参考にして仮説を立て、その仮説を検証することができる。

まず前提として、本論文では日琉祖語の母音脱落を「強勢音節の直前に位置する非強勢音節の母音が脱落する現象」と仮定する。強勢音節の直後の非強勢音節が脱落するとみなさないのは、第 1 音節の母音が脱

落した例が存在するためである。2音節語幹をもつ高起式動詞では、第2音節で母音脱落が起こることから、第3音節（語尾の第1音節）に強勢が置かれていたと考えられる。

さらに、前述のとおり低起式動詞には(17)のような式の逆転を示す例が確認されない。したがって、母音脱落は高起式動詞に特有の現象であり、低起式動詞には生じないという仮説を立てることができる。以下では、Martin (1987) に収録された動詞のうち、単音節語根に使役接辞 *-as(ai)- が付加されたものに由来すると考えられる例を用いてこの仮説を検証する。ここでは、*CVC-às(ai)- > CVs(e)- を「脱落形」、*CVC-as(ai)- > CVCas(e)- を「非脱落形」と呼ぶ。例えば、tas-u A 「足す」は *tar-às- > *tars- > tas- のように、また yose-ru A 「寄せる」は *jær-às-ai- > *jærsai- > yöse- のように生じたとみなせるため、いずれも脱落形に属する。

(18)

高起式 (14)

- 脱落形 (4): hes-u 「減す」、kas-u 「貸す」、tas-u 「足す」、yose-ru 「寄せる」
- 非脱落形 (10): mak-as-u 「負かす」、maw-as-u 「回す」、nar-as-u 「鳴らす」、nuk-as-u 「抜かす」、sir-ase-ru 「知らせる」、suk-as-u 「透かす」、tir-as-u 「散らす」、tuk-as-u 「尽かす」、uk-as-u 「浮かす」、wak-as-u 「沸かす」

低起式 (21)

- 脱落形 (1): nas-u 「成す」

- 非脱落形 (20): ak-as-u 「飽かす」、aw-ase-ru 「合わせる」、huk-as-u 「蒸かす」、hur-as-u 「降らす」、ik-as-u 「生かす」、kam-os-u 「醸す」、kir-as-u 「切らす」、mak-as-u 「任す」、mit-as-u 「満たす」、mor-as-u 「洩らす」、mot-as-u 「持たす」、nom-as-u 「飲ます」、ow-as-u 「負わす」、sek-as-u 「急かす」、sor-as-u 「反らす」、sum-as-u 「済ます」、ter-as-u 「照らす」、tok-as-u 「溶かす」、tor-ase-ru/tor-as-u 「取らせる/取らす」、wak-as-u 「分かす」

高起式動詞は、14 語中 4 語が脱落形を示し、低起式動詞では 21 語中わずか 1 語しか脱落形を持たないのに比べ、きわめて高い脱落率を示す。この点から、母音脱落が高起式動詞に特有の現象であるとする仮説が支持される。例外は nas-u 「成す」だけである。

高起式動詞に非脱落形が存在する事実は、母音脱落は高起式で生じるとする仮説を反証するものではない。なぜなら、使役形は (17) の例とは異なり、意味的な関連性が話者にとって自明であるため、類推によって脱落した母音を補い復元することが可能だからである。

さらに (17) の例と異なり、(18) の高起式動詞では母音脱落が式の逆転をもたらしていない。これもまた、類推によって元来の式が復元された結果として理解できる。

高起式 2 音節語幹動詞の第 2 音節母音脱落を想定することには、枕詞 yasumîsisi の sisi が説明できるという利点がある。枕詞 yasumîsisi は、『万葉集』では「八隅知之」「安見知之」と書かれる。「知」は ti を表す音仮名としての用法以外は、動詞 sir- 「知る」を表すために使われているので、当時の話者たちは sisi を sir- の活用形のように認識していたことが伺える。高起式の sir- に 1 音節の接尾辞がついた語幹は、高起式 2

音節語幹動詞の第2音節母音脱落の対象であり, *ya-sumî sisi* < **ja-sumi sir-às-i* 「8-隅知る-HON-INF」を再建できる。

以上のように, 本章は, 先日琉祖語(母音脱落以前の段階)は弁別的なピッチを持たず, 弁別的な強勢を有する言語であり, その強勢配置が母音脱落を条件づけたという仮説を提示した。母音脱落の結果, 式が逆転する例が確認されることから, 本章では, 母音脱落によって強勢配置が変化し, その新しい配置に基づいて韻律体系がピッチを有する体系として再解釈され, 高起式・低起式というクラスが成立したと提案する。

先日琉祖語の強勢体系を包括的に再建すること, さらに強勢体系がどのようにピッチ体系へと再分析されていたのかを解明することは, 今後に残された課題である。いずれにせよ, 本章で提示した仮説は未解明の部分を多く含みながらも, 日琉祖語の韻律史を考える上で新たな可能性を切り開く試みであり, 今後の研究に重要な示唆を与えるものである。

第7章

おわりに

7.1 第I部「宮古祖語と15世紀沖縄語」

第1章「はじめに」では、宮古祖語の再建に15世紀沖縄語との言語接触を考慮しなければならない理由として、二重上昇（double raising）と順行硬口蓋化（progressive palatalization）という二つの現象を紹介した。二重上昇は、北琉球諸語のデータや本土日本語との比較によって琉球祖語の段階で中段母音 *e, *o を持っていたはずの語の一部が、宮古語や他の南琉球祖語のデータからはまるで琉球祖語の狭母音 *i, *u に遡る形式を持つように見える現象である。順行硬口蓋化は、北琉球諸語の特徴の一つであるが、宮古語を含む南琉球諸語では一部の限られた語にその痕跡が見られる。同章では、該当する語彙を沖縄語からの古い借用語とみなすことによってこれらの現象を説明することができると指摘し、さらに、歴史的な背景からその借用が行われた年代は15世紀であるという推測を提示した。

第2章「先行研究による宮古祖語の再建とその年代」では、宮古

祖語の音素目録を提示している先行研究として Bentley (2008) と Pellard (2009) を挙げ、その特徴について論じた。Bentley (2008) の再建は、破裂音の弱化と母音の上昇が起こる前の段階で、琉球祖語と同じ 5 つの母音再建される。Pellard (2009) の再建は、破裂音が弱化し、母音の上昇した後の段階に当たり、母音音素の数は 4 つになっている。同章では、『朝鮮王朝実録』漂流民記事との照合によって、前者（本論文の用語では「前期宮古祖語」）は概ね 15 世紀後半、後者（本論文の「後期宮古祖語」）は 16 世紀前半の言語であると主張した。二重上昇によって沖縄語からの大量借用が行われた時代は前期宮古祖語であることがわかっているので、第 1 章で提示した推測（借用の時期が 15 世紀であること）が確認された。

第 3 章「宮古祖語の子音体系の再検討」では、宮古語に見られる超重音節の回避傾向から、先行子音を伴わない摩擦母音 ɹ がかつて有性摩擦音 *z であったことを示し、その一般化によって宮古語における摩擦母音の発生を破裂音の破擦化（硬口蓋破擦化・両唇破擦化）で説明することを提案した。また、前期宮古祖語において狭母音の前で *t と *ts , *r と *r の区別がそれぞれ存在したことを論じ、先行研究の再建より完全な宮古祖語の子音目録を提示した。

第 4 章「宮古祖語の母音体系の再検討」では、宮古語の中の 15 世紀沖縄語からの借用語に見られる特殊な母音対応を検討し、先行研究によって再建された宮古祖語の母音目録に加え、短母音 *ɛ , *æ , (*ɔ) を新たに再建するべきであると主張した。そのうち、 *ɛ と *ɔ は 15 世紀沖縄語の語中音節の中段母音 *e(:) , *o(:) に対応し、 *æ は硬口蓋化破裂音の後ろ、または硬口蓋化共鳴音の前 *a(:) に対応する。同章ではさらに、短母音 *ɛ , *ɔ に対応する長母音 *ɛ: , *ɔ: の存在を示した。結果として、前期宮古

祖語には8母音、後期宮古祖語には7母音の体系が再建された。

*kinu	> *kinu [kçinu]	狭母音に先行する破裂音が破擦音として実現（前期宮古祖語）
	> *ksini	狭母音 *i と *u が *i に合流, *ç, *z > *s, *z（後期宮古祖語）
	> *ksn	成節性を担うことのできる子音に隣接する *i の脱落
	> kɪn~tsɪn	成節的摩擦音が摩擦母音に再解釈, 一部方言で ks が ts に合流

図 7.1: 本論文の再建体系による歴史変化の例：琉球祖語 *kinu 「服」

7.2 第II部「宮古祖語を超えて」

第5章「琉球祖語と古代九州基層仮説」では、本論文で「古代九州基層方言」と称する、かつて九州のどこかで話されていた方言から借用された語が琉球祖語の語彙の中に多数存在することを指摘し、古代九州基層方言の特徴と、同方言からの借用語に見られる音韻対応の規則について論じた。特に、母音 *o の三重反映 (triple reflex) から、古代九州基層方言は強勢言語であったとし、強勢の配置に関する規則を記述した。また、古代九州基層方言の知識が宮古語の研究に役立つ例として、語源が定かではなかった宮古語の uk'əŋ~ukin 「鬱金」を挙げた。

第6章「日琉祖語について」では、日琉祖語における母音脱落規則の存在を提案し、母音脱落によって子音連結や二重母音・三重母音などが生じている語の例を挙げた。また、母音脱落とアクセント式の関係について論じた。

本論文で提示した新しい再建と枠組みは、更なる研究を要する部分もあるものの、今まで試みられなかった仮説によって従来の再建では説明できなかった言語現象や語源などを説明できるようにしている。

参考文献

- 秋永, 一枝 et al., eds. (1997). *日本語アクセント史総合資料索引篇*. 東京: 東京堂出版.
- Bentley, John (2008). *A linguistic history of the forgotten islands*. Folkestone: Global Oriental.
- Boer, Elisabeth de (2020). “The classification of the Japonic languages.” In: *The Oxford Guide to the Transeurasian Languages*. Ed. by Martine Robbeets & Alexander Saveljev. Oxford: Oxford University Press, 40–58.
- Campbell, Lyle (1999). *Historical linguistics: An introduction*. Cambridge: The MIT Press.
- セリック, ケナン (2018). “南琉球宮古語下地皆愛方言 — 簡略記述・談話資料・語彙集 —.” In: *言語記述論集* 10, 97–249.
- (2020). “南琉球宮古語史.” PhD thesis. 京都大学.
- (2022a). “宮古語砂川方言の語彙集.” In: *言語記述論集* 14, 157–209.
- (2022b). “上代日本語の甲類の o_1 に対する琉球祖語のもう一つの音対応について.” In: *日本語学会 2022 年度春季大会予稿集*, 115–120.
- Erickson, Blaine (2004). “Old Japanese and Proto-Japonic word structure.” In: *Perspectives on the origins of the Japanese language*. Ed. by Alexander Vovin

- & Toshiki Osada. Kyoto: International Research Center for Japanese Studies, 493–508.
- Frellesvig, Bjarke (2010). *A history of the Japanese language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Frellesvig, Bjarke & John Whitman (2004). “The vowels of Proto-Japanese.” In: *Japanese Language and Literature* 38, 281–299.
- 九州方言学会, ed. (1969). *九州方言の基礎的研究*. 東京: 風間書房.
- 蜂矢, 真郷 (2007). “上代特殊仮名遣に関わる語彙.” In: *萬葉* 197, 1–36.
- 服部, 四郎, ed. (1964). *アイヌ語方言辞典*. 東京: 岩波書店.
- (1976). “琉球方言と本土方言.” In: *沖縄学の黎明：伊波普猷先生百年記念誌*. Ed. by 伊波普猷生誕百年記念会. 沖縄: 沖縄文化協会, 7–55.
- (1978–1979). “日本祖語について.” In: *言語* 7(1)–8(12).
- 外間, 守善, ed. (1970). *混効験集: 校本と研究*. 東京: 角川書店.
- Hyman, Larry M. (2006). “Word-prosodic typology.” In: *Phonology* 23, 225–257.
- 伊波, 普猷 (1911). *古琉球*. 沖縄: 沖縄公論社.
- 五十嵐, 陽介 (2018). “九州語と琉球語からなる「南日本語派」は成立するか?: 共通改新としての九州・琉球同源語に焦点を置いた系統樹構築.” 鹿児島大学公開共同シンポジウム「九州-沖縄におけるコトバとヒト・モノの移動」(鹿児島大学, Nov. 3, 2018).
- (2021). “分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み.” In: *ワールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史*. Ed. by 由華 林, 智英 衣畑, & 暢子 木部. 東京: 開拓社, 17–51.
- (2022). “琉球語・八丈語以外の非中央語系ジャポニック諸語の系統.” *言語系統樹ワークショップ* (沖縄県立博物館・美術館, Dec. 25, 2022).

- (2023). “現代九州諸方言における旧上二段動詞の「下二段化」は九州・琉球祖語仮説を支持するか?” In: 言語研究 163, 1–31.
- Igarashi, Yosuke (2025). “Tracing Japonic lineages through matryoshka distribution: Phylogeny, migration, and language replacement in Eastern Japan.” In: 日本語・日本学研究 15, 151–170.
- (forthcoming). “An introduction to the prosodic systems of Japonic languages: Bridging Japanese and general linguistics.” In: *Word-Prosodic Systems of Japonic Languages*. Ed. by Yosuke Igarashi et al. Leiden: Brill.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 & 小学館国語辞典編集部, eds. (2003). 日本国語大辞典 第2版. 東京: 小学館.
- Jarosz, Aleksandra (2004). “Non-core vocabulary cognates in Ryukyuan and Kyushu.” In: *Proceedings of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia*. Ed. by Hayato Aoi. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 8–29.
- (2015). “Nikolay Nevskiy’s Miyakoan dictionary: Reconstruction from the manuscript and its ethnolinguistic analysis.” PhD thesis. Adam Mickiewicz University.
- (2021). “Old Japanese post-nasal non-back close vowels in a comparative perspective.” In: *International Journal of Eurasian Linguistics* 3, 50–82.
- Jarosz, Aleksandra et al. (2022). “Demography, trade and state power: A tripartite model of medieval farming/language dispersals in the Ryukyu Islands.” In: *Evolutionary Human Sciences* 4.e4, 1–21.
- Jobling, James A. (2010). *Helm dictionary of scientific bird names: From aalge to zusii*. London: Christopher Helm.

- 狩俣, 繁久 (2020). “琉球語の起源はどのように語られたか — 琉球語と九州方言の関係を問う —.” In: 日本語「起源」論の歴史と展望 — 日本語の起源はどのように論じられてきたか. Ed. by 俊樹 長田. 東京: 三省堂, 227–249.
- 木部, 暢子 (2000). 西南部九州二型アクセントの研究. 東京: 勉誠出版.
- ed. (2016). 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 与論方言・沖永良部方言調査報告書. 東京: 国立国語研究所.
- 金田一, 春彦 (1937). “現代諸方言の比較から観た平安朝アクセント — 特に二音節名詞に就て —.” In: 方言 7.6, 1–43.
- (1954). “東西両アクセントのちがいが出来るまで.” In: 文学 22.8, 849–870.
- 国立国語研究所, ed. (1963). 沖縄語辞典. 東京: 大蔵省印刷局.
- (1974). 日本言語地図解説: 各図の説明 6 および 300 面の地図の総目次. 東京: 大蔵省印刷局.
- Kubozono, Haruo (2012). “Varieties of pitch accent systems in Japanese.” In: *Lingua* 122, 1395–1414.
- Kupchik, John (2011). “A grammar of the Eastern Old Japanese dialects.” PhD thesis. University of Hawai'i at Mānoa.
- (2023). *Azuma Old Japanese*. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
- Lass, Roger (1994). *Old English: A historical linguistic companion*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ローレンス, ウェイン (2019). “竹富島方言アクセント (2).” In: 琉球の方言 43, 97–129.

- Lawrence, Wayne P. (2003). “多良間方言の系統的位罫.” In: 世界に拓く沖繩研究. Ed. by 第4回「沖繩研究国際シンポジウム」実行委員会. 沖繩: 第4回「沖繩研究国際シンポジウム」実行委員会, 238-247.
- Lee, Ki-Moon & S. Robert Ramsey (2011). *A history of the Korean language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Martin, Samuel E. (1987). *The Japanese language through time*. New Haven: Yale University Press.
- 松森, 晶子 (2000). “琉球アクセント調査のための類別語彙の開発 — 沖永良部島の調査から —.” In: 音声研究 4.1, 61-71.
- (2017). “北琉球における C 系列 2 音節名詞の語頭音節の長音化 — その原因について考える —.” In: 日本語の研究 13.1, 1-17.
- (2021). “北琉球祖語の祖形再建のこころみ.” In: 日本女子大学紀要 文学部 70, 11-32.
- Matsuura, Toshio (forthcoming). “Nagasaki.” In: *Word-Prosodic Systems of Japonic Languages*. Ed. by Yosuke Igarashi et al. Leiden: Brill.
- 宮城, 信勇, ed. (2003). 石垣方言辞典 本文編. 沖繩: 沖繩タイムス社.
- Muhamedowa, Raihan (2016). *Kazakh: A comprehensive grammar*. London/New York: Routledge.
- 村山, 七郎 (1981). 琉球語の秘密. 東京: 筑摩書房.
- 仲間, 博之 et al., eds. (2024). 南琉球・宮古語 池間方言辞典: 西原地区版. 東京: 国立国語研究所.
- 仲宗根, 政善, ed. (1983). 沖繩今帰仁方言辞典. 東京: 角川書店.
- 仲宗根, 將二 (2011). “「自立」した < 14~16 世紀 > 宮古…” In: 宮古島市総合博物館紀要 15, 47-64.

- 野原, 三義 (1981). “琉球方言と九州諸方言との比較 (III).” In: 沖縄国際大学
文学部紀要：国文学篇 10.1, 1–16.
- 生塩, 睦子, ed. (2009). 沖縄伊江島方言辞典. 沖縄: 伊江村教育委員会.
- Pellard, Thomas (2009). “Ōgami: Éléments de description d’un parler du Sud des
Ryūkyū.” PhD thesis. École des hautes études en sciences sociales.
- (2010). “Review of Bentley (2008): A Linguistic History of the Forgotten Is-
lands: A Reconstruction of the proto-language of the Southern Ryukyus.”
In: *Diachronica* 27.1, 1–31.
- (2013). “Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system.” In: *Japanese/Korean
Linguistics* 20. Ed. by Bjarke Frellesvig & Peter Sells. Stanford: CSLI Publi-
cations, 81–96.
- (2015). “The linguistic archeology of the Ryukyu Islands.” In: *Handbook of
the Ryukyuan languages: History, structure, and use*. Ed. by Patrick Heinrich,
Shinsho Miyara, & Michinori Shimoji. Berlin/Boston/Munich: De Gruyter
Mouton, 13–38.
- ペラール, トマ (2016). “日琉祖語の分岐年代.” In: 琉球諸語と古代日本語
日琉祖語の再建にむけて. Ed. by 行則 田窪, ジョン ホイットマン, &
達也 平子. 東京: くろしお出版, 99–124.
- (2021). “日琉諸語の系統分類と分岐について.” In: フィールドと文献か
ら見る日琉諸語の系統と歴史. Ed. by 由華 林, 智英 衣畑, & 暢子 木部.
東京: 開拓社, 2–16.
- Pellard, Thomas (2024). “Ryukyuan and the reconstruction of proto-Japanese-
Ryukyuan.” In: *Handbook of historical Japanese linguistics*. Ed. by Bjarke
Frellesvig & Satoshi Kinsui. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton, 39–68.

- ペラール, トマ & 由華 林 (2012). “宮古諸方言の音韻 — 体系と比較 —.” In: 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書. Ed. by 暢子 木部. 東京: 国立国語研究所, 13–51.
- Ramsey, Robert S. & Marshall J. Unger (1972). “Evidence of a consonant shift in 7th century Japanese.” In: *Papers in Japanese Linguistics* 1.2, 278–295.
- Sato, Kumiko (forthcoming). “Kobayashi.” In: *Word-Prosodic Systems of Japonic Languages*. Ed. by Yosuke Igarashi et al. Leiden: Brill.
- Serafim, Leon A. & Rumiko Shinzato (2020). *The language of the Old-Okinawan Omoro Sōshi*. Leiden: Brill.
- Shimaji, Michinori (2008). “A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language.” PhD thesis. The Australian National University.
- 渡久山, 春英 & ケナン セリック, eds. (2020). 南琉球宮古語多良間方言辞典. 東京: 国立国語研究所 言語変異研究領域.
- 富浜, 定吉, ed. (2013). 宮古伊良部方言辞典. 沖縄: 沖縄タイムス社.
- Unger, Marshall J. (2008). “Early Japanese lexical strata and the allophones of /g/.” In: *Proto-Japanese: Issues and prospects*. Ed. by Bjarke Frellesvig & John Whitman. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, 43–53.
- 上野, 善道 (2012). “N型アクセントとは何か.” In: 音声研究 16.1, 44–62.
- Vance, Timothy J. (2007). “Have we learned anything about Rendaku that Lyman didn’t already know?” In: *Current Issues in the History and Structure of Japanese*. Ed. by Bjarke Frellesvig, Masayoshi Shibatani, & John Charles Smith. Tokyo: Kurosio Publishers, 153–170.
- ヴォヴィン, アレキサンダー (2010). “上代日本語と古代・中世韓国語の「水」と「涙」.” In: 日韓言語学会議 — 韓国語を通じた日韓両国の相

- 互理解と共生 —. Ed. by Bjarke Frellesvig & Satoshi Kinsui. 千葉: 麗澤大学 言語研究センター, 115–120.
- Vovin, Alexander (2020a). *A descriptive and comparative grammar of Western Old Japanese: Revised, updated and enlarged second edition*. Leiden/Boston: Brill.
- (2020b). “Reconstruction of Japonic and para-Japonic based on external sources.” In: *Handbook of historical Japanese linguistics*. Ed. by Bjarke Frellesvig & Satoshi Kinsui. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton, 11–37.
- Yamada, Takaaki (forthcoming). “Yatsushiro.” In: *Word-Prosodic Systems of Japonic Languages*. Ed. by Yosuke Igarashi et al. Leiden: Brill.
- 山本, 俊英 (1955). “形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について.” In: 国語学 23, 71–75.
- 与那国方言辞典編集委員会編, ed. (2021). どうなんむぬい辞典 第二版. 沖縄: 与那国町役場.
- 尹, 熙洙 (2024). “琉球祖語の狭母音及び中段母音の 15 世紀沖縄語における反映について.” In: 日本言語学会第 169 回大会 要旨集. Ed. by 日本言語学会. 京都: 日本言語学会.
- Yun, Huisu (2025). “Korean perspectives on Southern Ryukyuan glide fortition.” In: *Japanese/Korean Linguistics* 31, 122–134.
- 尹, 熙洙 (2025a). “宮古語諸方言の比較による母音祖体系の再建と 15 世紀沖縄語.” In: 方言の研究 11, 81–106.
- (2025b). “日琉祖語の子音連結.” In: 国立国語研究所論集 29, 189–202.